

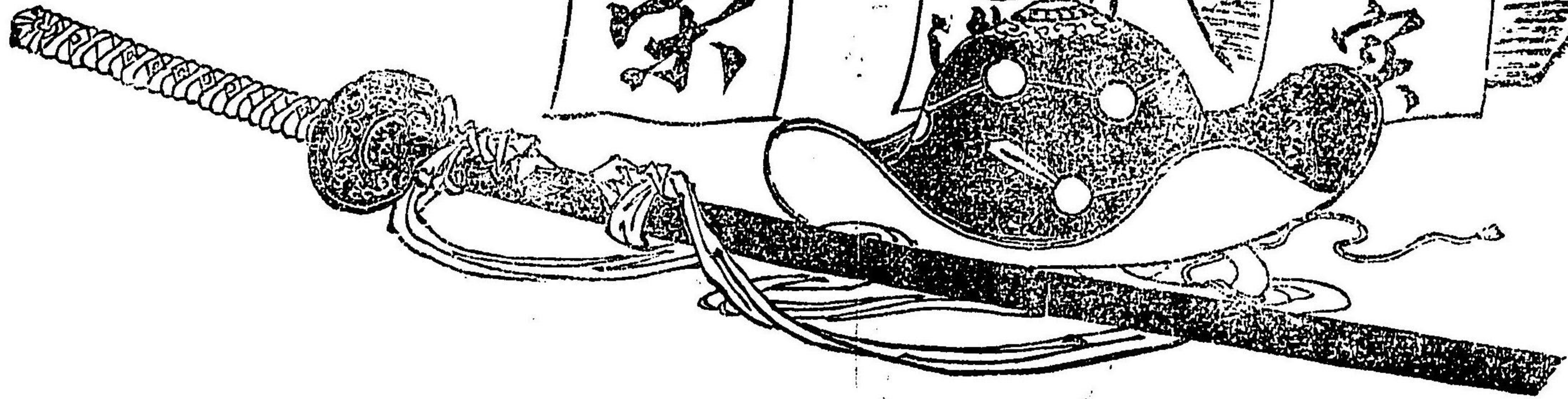
未年日奉國中

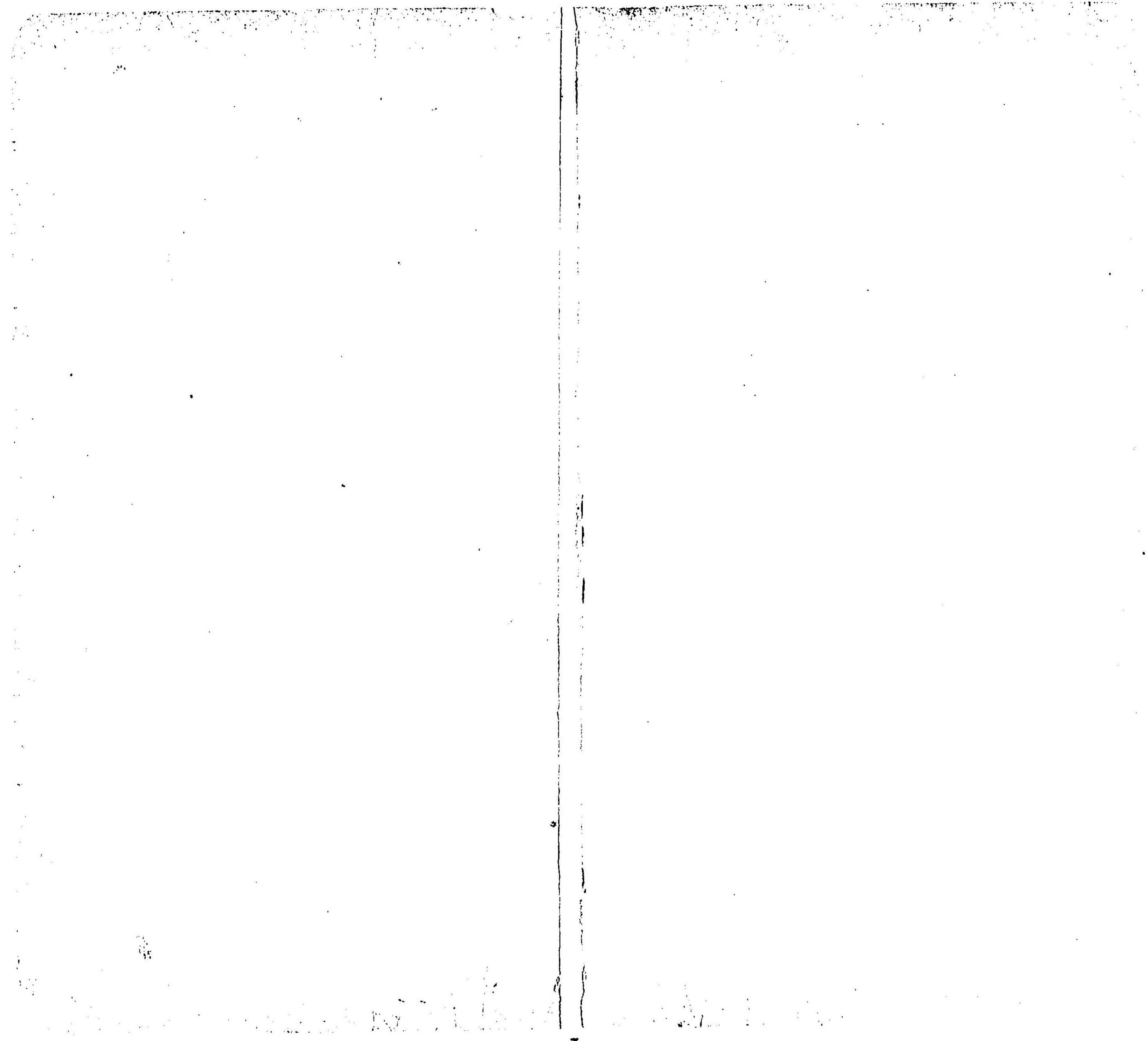


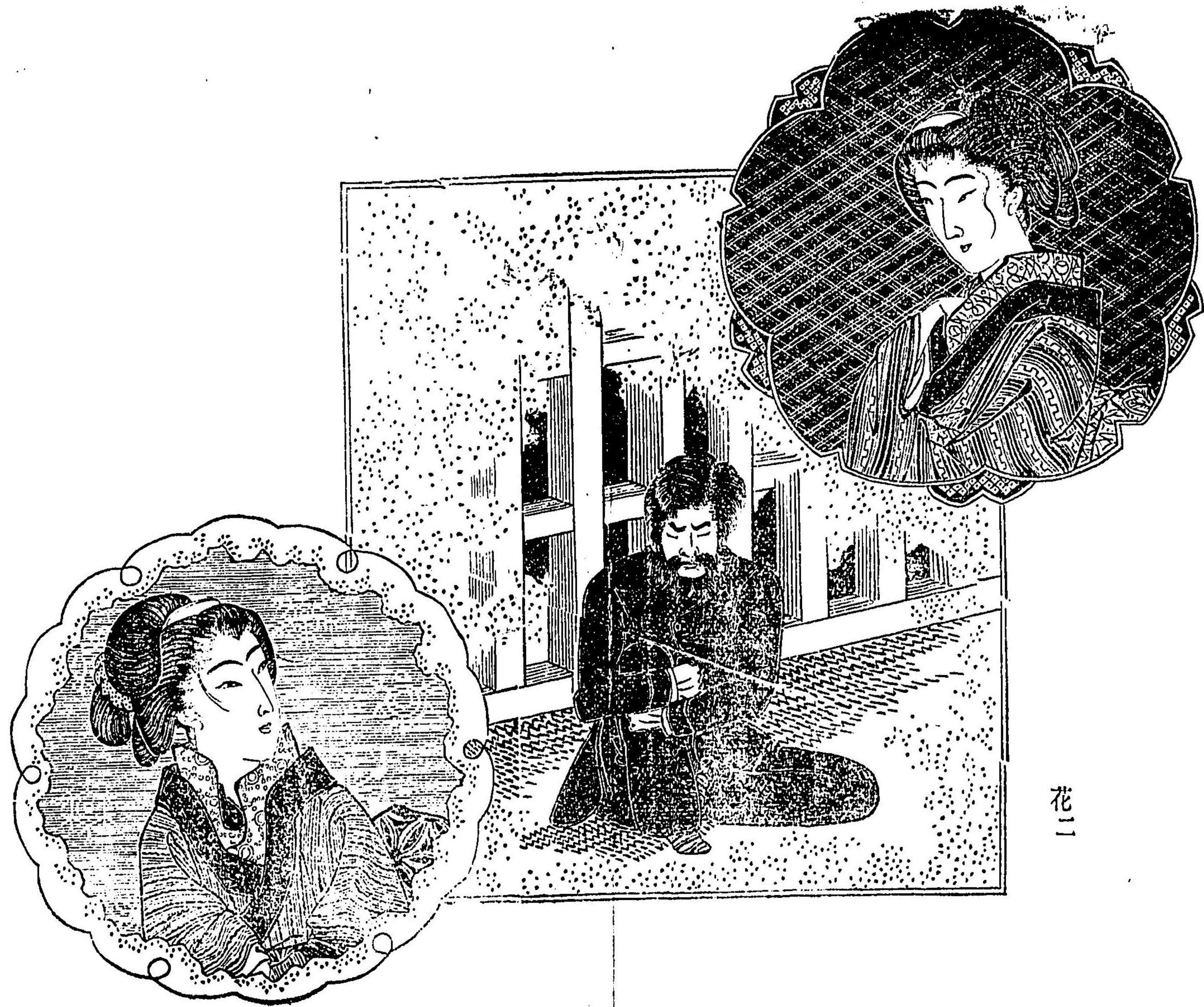
改心ていぬ國本富



興福の山と茶







花二

志士 花吹雪 後談

佐伯半鼻 編  
岡野半牧 閱  
旭亭芳峯 書

第一回

頃ころは明治十五年と云ふ四月中旬梅莊うめぢやうに瓢携ひょうけいへし日は早く一月餘いちげつじよの過去かことなり桃山ももやまに樽たるを擔かかへる客きやくも何時いつか影かげなく實じつに三日見ぬ間まてふ言ことに漏もれき今は櫻さくらの宮みやの邊あたりに最時さいじめきて爛熳らんまんたる花はなの姿すがたは天そらに知られぬ雪ゆきと紛まひ野のるせに咲出さきだでし菜なの花はなは宛まながら黃金こはねを敷延しきのべしかと疑うたがはれて殊ことに此日このひは日曜にちようの休暇きゆうかなれば夫おつとの官人くわんじんを始めとし會社くわいしや向其外むきがい日ひの勤つとめに事繁ことしげさ人達ひとたちも今歳ことしの花はなは今日けふならざばと正午ただひる過すくる頃ころより車くるまに舟ふねに思おもひくくに集行つぎやうさ花はなの下したに旣せんを展ひらけて竹筒たけつつみ傾かたける雅流みやびりゆうあれば紅裙こうくん紫袖むらさきそでの美人びやうじんを携たづへて豪奢かうしゃを競あふ大盡おほぜんとあり堤つみを覆おほふて構かまなしたる假茶店かりぢやんは最も俗ぞくに適あへるにや簾のら並なみだ人の醉よめはざるなく杯盤はいばん到いたる處ところに狼藉らうじやくたり河原かはらに戯狂たはぶれくるふ女子供こどもは只面ただおもて白しろしと云いふ外ほかに餘念よねんありとしめ見みぬを

特 13  
751

No 13313



一隊打連れし書生の洋杖振つて肩を怒ら  
 したる花観る人の何事ぞと思はれたれど  
 流石麗ら、かな風景は政論の反對黨派に  
 向ふとい異にして強ち春を鞭たんと云ふ  
 にもあらでや草を齒に花を跳めて現あし  
 斯くて午後の三時近くにもなりければ群  
 集次第に加はりて貸三味線ありの張札も  
 出切の断書を添へんとしてその熱鬧の  
 景況はなかく筆にも辞にも盡され花  
 にして若し靈あらば目をや遠ざらん耳をや  
 塞がんと覺ねたるに今迄殊に温暖なりし  
 徴に應じてか空俄に搔曇り風さへ添ふて  
 大雨ザツと降來るにぞ幾千となさ遊客



は慌て惑ふて宛かゝる蜘蛛の子を散らすが如く

暫時にして己がじ、家路に去つてその跡は前の繁華に引變はり淀川下る後師も小養欲し氣に眺められ無情に花を吹落す風の力は稍衰へたるも雨は尙小止もなく最荒涼じき境とはなりぬ斯る折しる大神宮の社とは程遠からぬ堤の傍りに當初何某の畫史が建設けしと聞ゆるたる草庵の中に雨舎りする人ありけり是を誰かと云ふに此程より西區江戸堀に住居して未だ定まる營業はあらざれと兼て近在に若干の田地を有ち尙少ながらぬ公債證書をも蓄へて裕かに暮せる大倉健三と呼ぶる、年の頃三十六七の男なり之に向合ふて椽鼻近くに坐を占めつ、川面遙かに見渡し居るは平常大倉へ出入の骨董商廣田源介とて本業よりも世の中を幫間で渡る似非商人昨日今日は暖氣の逆上で額疾しく氣も淫ねど勉笑顔の面白氣に(源)モシ如何です那の造幣局から網島邊りへ掛ての景色は何とも歎とも云はれんぢやありませんかソレ何やら云ふ事が……オ、月の隈なきを見るのみかはで雨中の花もなかく妙ですナ(健)ソリヤ随分捨つたものだから貴公には定めて買へる方だらう(源)マア私が價踏すりや如何しても千五百金がものです(健)アハハハ、一刻千金の元價に五割増か夫では奥の席を借つて居る一組にも幾等か値を

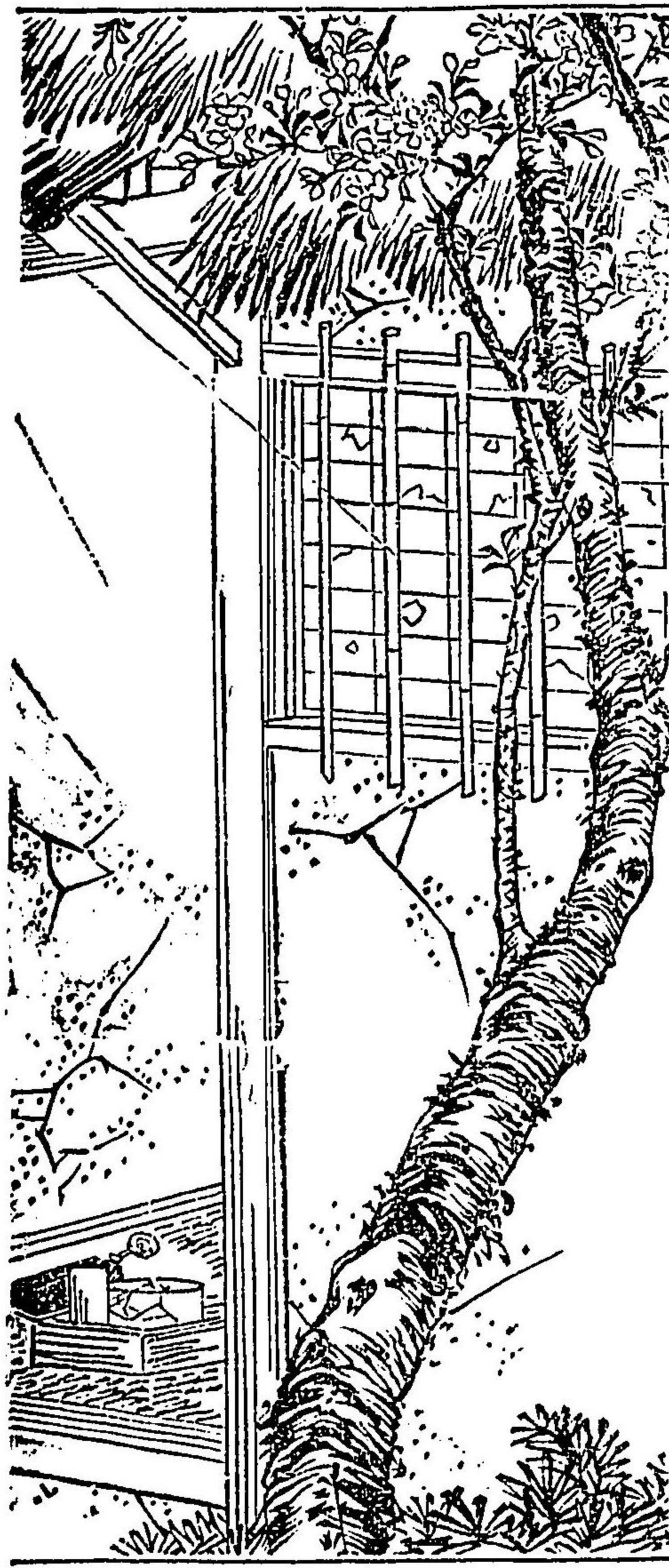
持したと見ゆるナと云ひつ、首を伸して後振返り頻りに彼方の一室を指覗けば源介は打笑ひ(源)ナニ彼等が價になつて堪り升るのかモシ彼は雨に降込られた稽古屋か縫物屋かの小娘手合二三人の婆さんが隊長顔で一年一度の命の洗濯持寄行厨と首引して花より團子と樂んで居るので一向論はありません。とはいへ是ヤ商ひの買辞 正直な處は如何やら一人丈は掘出しの代呂物と云ふて好き、うながあり升せハイソリヤ此處へ来た時から白眼であるのですと鼻動めかして云ふ辭に健三も打笑ひ(健)流石商賣柄で鑑定の附け方が旨い様だけれど骨董商丈處女の鑑定には不相應だナアハハハ、(源)けとも故を温て新らしき知ると云ふぢやありませんか(健)イヤ下さらぬ固辭附だぞ併し爾なことは措て肝腎今日の用事は如何であらう若し天氣と向ヒ様に異變が出来ては困るせ(源)イエ其處は御安心なされませ昨日も母親のお虎に逢ふて充分手筈を仕て置ましたから今日は改めてのお目見と云ふ裕で朝から化粧でも仕て店へ来て居るに違ひありません(健)イヤハハ、此雨では那の出し茶店には来て居られまい(源)ナニ貴府店に居ません處で家は此處の村ですから直にお出掛なさつても又岩國屋邊へ呼びましても

如何とも都合が附うぢやありませんか(健)成程爾ら云やその通だが全体父親の方には未だ承知をさしてないと云ふ事だナ(源)イエソリヤ那のお虎婆々が掛引に云ひ升ので假令少しは父親に故障があつても其處は金さへ遣れば譯はないのです(と云ひながら天を眺めて)幸ひ霽れ掛りましたから論より證據一走り行て程好う話を附て來ませうと立上つたるその折しも提傳に南の方より此方を指て歩來る一個の老婆ありけるが源助の生牆越しに早くも夫と認めつ、忙しく外に駈出しオ、お虎さん好い處へと聲掛れば老婆は立留りながら稀疎ある齒を現はして莞爾と笑ひ(虎)コリヤ源助さん好うお出なされました實の最前からの雨で如何あらうかと思ひましたが若しやと此處等へ見に來たのです(源)旦那も約束通り來て居られるがお前の方の都合は如何ぢやナ(虎)ハイ妾の方は何時でも宜しいけれどモシ昨日も云ひました通り父親も初めから妾奉公など、明かしてハ兎や角云ふて聞入ませんゆゑ實は斯々した手筈に致しましたと何が暫らく聞き告れば源助は屢々點頭さ(源)ブン成程夫りや妙ぢやブン好しく其處は旦那にも詳しう含めて置ろ。ブンく爾らぢやとも何かなしに今日の處さへ首尾好う

遣つて彌々旦那の方へ行た上はモーお靜さんも否もなからうから早う連れて來てお呉れ(虎)爾なら直ぐに家へ歸つて(源)岩國屋で待つて居るせ(虎)澤山御馳走の用意を頼み升と頭に霜は戴けど身体は然に張詰めて肥太りたる壯健婆々櫛齒の足駄ギシくと踏しめつ、元來し道へ引返す跡見送つて源助も草庵の中に立戻り暫らくあつて夫の大倉を先に立し門頭へ出るに引違へ此に入來る人こそあれ只見れば年の頃ハ三十二三と覺しく身には紺綾羅紗の上衣に細き縞のツボンを穿ち黒の帽子を戴き脊の高からぞ低からき面は少し淺黒けれと眼涼しく眉秀で頬髭左右に分れたる威風嚴めしさその中に何處やら温和の色を含める壯士にして是も俄雨に逢ひしと見ぬ衣服は甚く濡れたるが草庵の主人に打向ひ何事か二言三言問尋ね頓て懇ろに禮を述べ南を指して急ぎ行く折柄草庵の奥より立出る容貌麗しき一個の處女がその後姿をチラリと見るより如何なる譯にや俄かに遽て履物穿くも、どかしげに闕の外に走出ぬ

● 第二回

此に櫻の宮の片傍野田の村里に久しく住へる老人ありその女房をとらと呼びしづと云



八  
 娘を待てり兼て少し許の田地を耕やし閑隙あるときは近き邊の川々に網を入れ釣を  
 む垂れて生活の補助とせしが今年に兎角に思ひ勝にて荒き稼のならぬ上高き諸色に暮  
 向の最手詰りて苦しければ此程より村外なる堤の傍又一軒の茶店掛設け花を依頼し幾  
 許かの利益を得んと思ひしに花咲く折の天癖とて雨の妨多くして今日も午後より降  
 出し女房と娘は一旦店を片付け歸りしかど又何處へか出行て跡は我身只一八二三日



九  
 漸々今迄吹荒れし風さへ稍静まりたれを責めては外面の景色なりとも眺めんと篋先近

以來酒痛にて臥したる床に  
 在りながら過越方を思出で  
 溜息吐て居たりしが頓て心  
 に思直し痛も昨日と少し



く進出で晴んとしつ、荷もポロリくと降る空を仰ぎながらに煙草薫らし居る折柄料  
 らせ訪來し洋服着たる立派の壯士表よりしてツ、と此方に進入りつ、會釋して「生は  
 松山幾之助と云ふものですがお前さんは當家の主人で昔勤王の志士國重氏に仕て居ら  
 れた中村七助ののではありませんかと不意な尋ねに老人は驚きながら面を眺めて居直  
 りつ、(七)へい私が七助で御座り升元の身分迄御承知であれば以前は貴君様を存じて  
 居つたかも知れませんが只今は頃とハヤ……(幾)イヤ是迄お近付でも何でもありま  
 せん實は此程より京都に演説會の催があつて同黨員……と云ふては分り兼ねるでせ  
 うが二三人の朋友と京都に參つて滞留中下宿に來合した去る男から料らせお前さんが  
 此に居なさる事を聞き込まました然るに生は兼てより維新前國のため力を盡して空しく  
 なつた人達の傳記を纂めて一つの書物を著したい積もあり殊に國重氏はその苦心の程  
 を較て見れば今日政府の上又立つて歴々の官職有てる人達と劣らぬ志士でありながら  
 出所に因て夫程世間に名も聞ぬぞその履歴さへ明らかならぬ處あれば平生遺憾に思ふ  
 て居ましたゆゑ斯して態々尋て來たのですから如何かお前さんの知つて居なさる丈の

事柄を話して下さるまいか(七)へいソリヤお過ぎなかつた主公の爲にも甚ばしい事で又  
 主公の事は何處へ出した逆一点の曇るない譯ゆゑ初てお目に掛り升お方なれと詳しう  
 お話申し升が併し京都で私の事をお聞なされました男はモシ四十許で勇助と云ふ名  
 では御座りませなんだか(幾)ハイその通りて今南禅寺近邊の住居だと聞き升た。イヤ  
 くモ一此で結構です又何もお構下さるな茶は道で休足して喫んで來ましたと云ひつ  
 、上り口に腰掛れば七助は手を挑みながら(七)ア、左様で御座り升か家内の者も皆出  
 て居りまして大きに不都合ですがマアお話から先に致しませうと元の座に返り少し思  
 案をして(七)扱私の舊主人國重龍左衛門とは申すまでもなく水戸御家中のお家柄で  
 ……オ、忘る致しません元治元年三月十五日の夜夫迄の一向爾ういふことのみならず  
 とも存じませなんだ處俄かに奥様始め兩個の子息を御親類へお預けなまつて私一人を  
 供に召されて其折烈公様の勤王のお志を貫くと築波山に立籠つてお出なされた東  
 湖先生の御次男藤田小四郎様の陣中へね越になり夫からは彼是どの御心配にて時の  
 御老中并に備前様などへ志の程をお申立なさる中向藩ながらも奸黨とか云ふ方では色



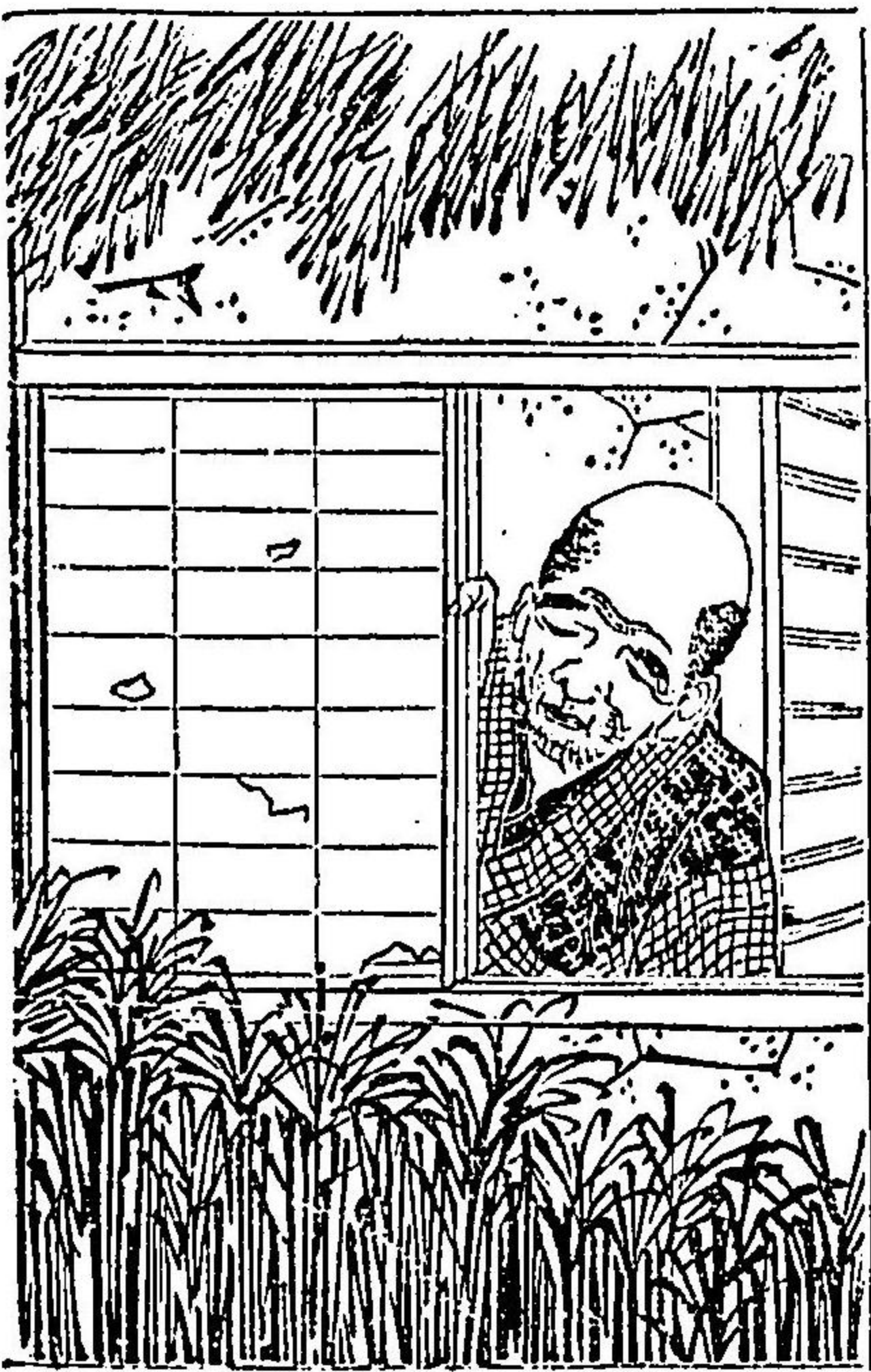
没れなされましたと云ひつ、ハラ／＼と涙溢せば幾之助も共に哀を催して嘆息しながら稍のつて夫に就ては最前も話のあつた郷里に残された御家族はと尋る辭の未だ全くは口より出でぬその處へ忽ち表より兩三人警察署の特務掛と覺しさがトヤ／＼と進入り幾之助の前立塞ぎ嫌疑の筋あつて拘引する由呼ば、つたり

● 第三回

松山幾之助が不意に拘引せられしその跡に七助は轟く胸を押へ暫時茫然としながらア、飛んでも無い事が出来た併し那の御人体ではなか／＼盗騙詐をとするか方とは見えずヨリヤ定て無實の罪か何ぞであらうオ、分つた／＼此頃好う聞く國事犯とか云ふ様な事に違ひないがソリヤ兎も角も人の事より余の身にマア迷惑が掛らいで好つたと口の中よて呟きつ、烟草一服吸はんとするその間もあらせせ門口に「チヨツとお尋申し升此方は中村七助さんといふお家で御座り升かど女の聲にて音信る、を聞くより七助ハ舌打して「エ、今日は好う人の尋ねて来る日ぢやと咳へし烟管その儘に上り小口へ立出るに尋來りしは十六七の容貌好き娘よて小腰屈めて會釋をすれば此方は少しも知

らぬ面七助の不審察に(七)ハイ中村七助は私ですが何ぞ又用事でございへば娘は嬉しさらに(娘)オ、左様で御座り升か爾ンなら最前から洋服を着たお方がお出なされた筈です情願逢して下されませと時に取つての意外な辭七助の愈々怪み其處に坐つて(七)成程言なさる様なお方も來られんではなかつたが併しその洋服を着た人はお前さんと如何いふ間で又お前さんは何處のお人ですと問はれて娘はハツト顔紅め暫らく答もあさ／＼りしが暫らくして(娘)ハイ妾は唐物町の三宅たつの姉花と申して那の國重さんは前方妾の方に寄留を仕て居なされたのでお心易う……(七)コレ／＼。國重さんとはアノれ前さんの尋ねる洋服を着た方ですが(花)左様で御座り升國重龍二郎と云ふお名前です(七)ナニ國重龍二郎とエ……ア、始め一寸見た時には年恰好と云ひ様子と云ひ國でお分れ申してより行方の知れぬ御二男の襟にもあつたが好く／＼視れば爾うでもないと思ふたにコリヤ残念な……(花)夫では國重さんは何處ぞへお出なされましたか(七)ハイ今は此に居られん上その行きなされた先も一通りではないのですと云ひつ、頭を垂れて案ざる様にお花の氣遣(花)モシ一通でないとは如何いふ譯で

……何ぞ變な事でも出来ましたか(七)變な事處ぢやない最前此へ來なさつてお話仕  
 て居る中警察署より拘引になりましたと聞くよりお花は仰天して(花)エ、ソリヤマア  
 何故で御座り升如何して爾んな事になりましたかと急込み問ふを七助は押留め(七)サ  
 ア何故と云ふて實は私もその縁故を知りませんが一体彼の國重と云ふのは今何を仕  
 居るお人で又お前さんの方に寄留を仕られた事もあるなら如何いふ御氣質であるか知  
 つて居なさらうナ(花)ハイ國重さんのお家は大和又御座りまして書物を編輯たり訴訟  
 の鑑定とか云ふことを仕て居なさつ  
 て妾の方に寄留の間は演舌會などに  
 チョエ〜お出でなさつたのすが夫  
 は〜物堅い御深切なお方で今年の  
 一月親爺の没くなつた時何から何  
 迄お世話を仕て下さりますシ私はモ  
 ー何時迄も居て欲しいと思ひました



に其後大和へお歸りなされたゆゑお尋申すことゝ儘になりませせ折々手紙をあげて

返事が来ませんので察してばかり居ました處今日近處のお方と花見に来て雨に降込られたが幸で國重さんの此お家を探ねなされた姿を見掛けましたから直ぐに跡を追ふてお目に掛りたいと飛立つ様に思ふたのですがお同伴の手前もあつて然るなら今漸々首尾を見て此地に伯母さんがあるゆゑ一寸寄つて來升と虚言を吐て貴店のお名前を便に尋ねて來ましたと云ふさへ何とやら口籠りたれば七助も凡そ夫ぞと推察して(七)オ、その話で仔細も分りましたが併し折角尋ねなされるお人が右の次第で誠に本意ない事です+(と人をも身をも慰め兼ね陸歎なしつ、稍あつて)併し私も那の人は棄て、置けぬ義理もあつて何れ警察署へ尋ねて行くもな様子に分つたらお前さんへも知らして上サア哀しうもあらうけれどマア此は早う歸りなさい大方お同伴の人も待つて居なされるであらうコレ泣顔を仕ては見つとるまいせと訪來し人の歸り急かすも老の身の深切見ぬて折しも大長寺の鐘鐺々と入相告ぐる響すれば花は實にもと心付き別れを告げるその處へ表の方よりどつかんと歸り來れる母も虎今しも袖にて眼を拭ひしはく出來くお花の姿見るよりも(虎)マア此兒とした事が人に氣骨を折らして置て逃て歸る

どの如何したものでやと(云ひつ、傍々近寄つてその顔眺めて)エ、コリヤ違ふたも驚いて四邊キヨロく見廻すにぞ七助は様子怪しみ(七)コレおしづの最前お前と一緒に出たさう未だ歸つて來んが全体逃たと云ふのは如何した譯ぢやと氣遣問へばお虎の夫はと許りに驚き周章て彼是心は變れども互に顔を見合して暫らく辭もなかりけり

● 第四回

軒端に花は咲きながら雨に傷み風に散り長閑けき春の景色なく坐ろに哀を催はされて家の中にも前程より降つて湧たる愛の種國重龍次郎が拘引と云ひ今又娘おしづにも事ありげなる様子なれば主人七助は女房お虎が遠しくれしづは居ぬかど其處等うろく立騒ぐを引留め(七)コレおしづが逃たどか走つたどか云ふてソリヤ一体如何したのかマア其次第から話すが好い(虎)エ、爾ンな落着た事は仕て居られんわいな若も此儘身でも隠すか怪しな覺悟でも仕られては折角來か、つた福の神も……(七)エ怪しな覺悟なんぞと云ふて愈々氣遣なイヤ放して好いものかとお虎が振切る袖を確つかと捕へ夫婦争ふその間へ表よりしてツ、と立入る廣田源介お虎に向ふて(源)オイく爾んな

事を仕て無暗に飛出したる隙を斯うなつたら何も歎め御亭主に次第を話して共々  
 行方を捜した  
 方が好からう  
 せモシ御亭主  
 お虎さんが逃  
 てなさるの事  
 無理のない事  
 です實にお静  
 さんが逃出了  
 と云ふのは外  
 でもない私が  
 出入先の旦那  
 大倉さんが此



間鶴満寺の花  
 見歸りに何櫻  
 の宮は早いけ  
 れと遊び餘つ  
 た散歩がてら  
 と源八の渡を  
 東に越えられ  
 たのが縁の端  
 で此家のおし



づさんが茶店に出て居なかつたが目に留り妾に仕たいと云ふ事から段々お虎さんに話  
 し仕込み指當つての支度料とて十圓の金渡し今日岩國屋で改めての目見と兼ね身  
 の引取りをすること、なつた處その錫際に肝腎おしづさんの姿が見ねん様に……サ  
 アお前さんの不承知はお虎さんも疾くより知つて居なさるゆゑ何にも云はせに話から

先に極めて置き彌々收終の附た上で支度金をドツサリ見せて喜ばす積であつたのぢや  
 (虎)オ、源介さんの言なざる通りお前に隠して居たのも皆家内のためコレれ静の行處  
 が知れてあるなら早う云ふてお呉と急立つて七助ハ眼怒らし白眼みつけ(七)エー喧し  
 い爾ンな事をするからお静の逃るも無理はない全体江戸堀の大倉とて金持か物持か知  
 らぬが何處の馬の骨やら新平民やら分らぬ者の妾など、は穢らはしいナニ縦し士族で  
 あらうが華族であらうが金銭づくで娘を遣る様な七助ではないア、流石血統の……  
 イヤ成らぬ中から長う學校へも遣つて置た効が見ぬて好う恥を辨へてその場を逃て呉  
 れたど痛む腰をば打敲さつ、俄かに表を指して駆出さんとしたりければ今迄留られた  
 るお虎が却つて引留の(虎)一体お前何處へ行く積ぢや。(七)何處へとておしづを捜して  
 乃公の手に確つかり繫いで一寸でも外へ出すことぢやない(虎)エ、お前は如何しても不  
 承知か併し好う思ふて見なされおしづ逆も年頃の娘ゆる美しい物も着て折々は寛くり  
 遊戯も仕たからうに年が年中蕭り逃つて親子三人が共稼ぎ時分の物さへ着兼て居れば  
 飯令養子としても嫁入さしても牛は牛連の縁談で生涯花賣の乗ることアマア難かしい

と思ふから今度大倉さんの話を幸ひお妾奉公から取付してナア源介さん先方にと奥様  
 がないゆゑ其處は那の子の心次第で出世の路も……(源)オ、見透いてある處か始め  
 から旦那もその積ぢや夫故にこそ虚言を吐くのは好うないけれどお虎さんと盲合して  
 全体未通女なおしづさんゆゑ前から仔細を云ふてコテくするより埒の早いのが好から  
 うと或る大家の御寮人が出養生を仕て居なざるお伽がてらの小用聞に暫らく行くのぢ  
 や何をするも親のため茶店に出るより利金があるからと言購めて岩國屋へ連れて行たの  
 ですが是も畢竟悪るがせに仕た譯ではなうて詰りお前さんの爲にのみなればマア腹を立  
 てぞに落着て篤つくり考へなざるが好らうと説けと誘せと七助は愈々怒つて身を振は  
 せ(七)エ、間けば聞く程無法な仕方次第又因つてはその儘には濟まさんぞと強てお虎  
 が手を振放し走り出さんとしたりしに俄かにギックリ痙攣つける腰の痛にバツタリ其  
 處に平伏るを幸ひなりと謂はぬばかりにね虎け源介を見返つて眼交せしつ、表の方に  
 走出で、慥に心も暗紛れ瓦人の親み兒の愛さへ棄て駆行く黄昏時忽ち影は見ぬせなり  
 ぬ跡に七助は悔しさに堪られねば痛を堪へて起上り己遣らじと蹠蹠さながら續て出ん

とする處へ思掛けなく奥の室より娘おしづが走出で袖を捕へて引戻せば意外に驚く七助は我覺ぬぞも娘の手を取り嬉し涙を溢しける

● 第五回

降上りたる雨天の今は雲間に星の影三つ四つ五つ輝きて夜風も西に吹交り晴る、微の見ゆながら我身に懸る愛の雲は拂ひ兼立覆ふたる水烟を幸ひに急しく岸漕放し今しむ淀川の中央へ浮び出たる一艘の釣舟あり棹操る男は六十餘の老人にて胴の間には十六七の娘を載せたる夫の淺妻船の昔想はる、姿ながら是は夫どの事異り親義両つながらに淺からの親子連頓て老人は棹さし緩めて船を流に任しつ、ホツと息つき板子の上りませんと腰の邊りを摩りながら「夫に斯う俄かに家を出なされたのは妾に嫌な妾奉公をさせぬために暫らく身を隠して遣らうとのお情であり升ければ最前も云ひました通り岩國屋から逃て歸つた時近處に目慣れぬ奇麗な形した那のお花さんとか、來て居られて何やら話のある様子ゆゑ裏へ廻つて立聽く中母親さんが戻りなされたつて又源介と

云ふ人も出て來ての話から段々と考へますと一旦逃て送歸つたのですが夫も親爺なり家の爲めにもなる事なり世間にない事でもありませんから随分辛抱も仕升ければ……身体を金で賣る様なき……と云ひつ、顔を背けて俯向けば七助はおしづの手元を押し戻し此方に膝向け(七)コレは又何を云ふのぢや其志の程は辱けないけれど前に仕掛た余が身の素性話。元水戸藩の國重様に御奉公仕て又その御主人は國のため多大い御艱難なされた由は掻摘んだ處マア那の通の譯であるが此に一つ改めて(と云ひつ、坐を正して片手を突き)扱今迄は世間の手前と戸籍の都合で今日の今迄我子と仕ておしづくと云ふて居ましたが全く卿は御主人國重左衛門様の遺篋で御座り升と意外な辭におしづは仰天して何の答も出ばこそ只管呆れて居たりしに七助は膝を進め(七)夫で又卿がお産れおさつた摸様な姿を是から詳しうお話し申しませう(と云ふ折しも船は水のままに流れつ、造幣局の石崖近へ摺寄らんとしたるにぞ棹さし延て突放し)全体貴女は御總領の哲之丞様御次男の龍二郎様とは勿論お兄弟と云ひながらお腹も別で御座りまして親且那樣が京都の岡崎村に忍びでお出なされ升中お交際のため折々



祇園町などでお遊なされた事も御座りましたに情の道の格別と見ゆまして若子と云ふ  
 藝者に仮初の契をお結びなされてその腹に胎られたが貴女にて御誕生は慶應三年九月  
 十日産は至つて安らかにて日々肥立になりました處其後問もならず且那の御最期餘り  
 の事に若子どのは血逆上して到底その年十一月の五日の曉方に果敢なうなつて仕舞ひ  
 なさつて夫の人には面親共にあつたのですが元から有餘つた暮しでもなければ卿を任  
 して置く譯にも行かぬ私る且那に離れて自分の體一つ丈さへ生活の途に差支る程であ  
 りましたが幸ひ近隣に或る豪家の別荘守の口があつてマア食て行く丈の都合が附さま  
 したから私の手元に引取つて彼地此地と貫乳して如何やら斯うやら一年餘を岡崎村に  
 てお育申した處其時はモ一御一新となつて奥州の亂も治つたと云ふ事ゆゑ一度お郷里  
 へ歸つてどの思ひましたが奥様始めお兄様お兩方とも先年同じ藩中ながら主公とは敵  
 對して居た姦黨とか云ふ人等のため無殘な刃にお果なされお兩方は如何やらお助りな  
 された様子ながら行方知れぬ夫に遠國へ出る路用はなし據なうろの事は止めました  
 おと云ふ處へ櫻の宮の方よりして松音響かし下り來る屋形船今日大倉は船にて來しと

●花吹雪 四



云ふ事なれば若や彼が乗つて居ぬかどおしづはハツと驚きつ、夫と七助に手真似で知らず其中に彼方の船は何事もなく行過ぎたれば七助は語を次で「併し何時迄も別荘守では久後の目途もなく私は全体此野田村の生で若い時分に道樂して江戸に出掛けて料らぬ事より主公が詰番にて江戸のお屋敷にお出なさる時御奉公致しましたので今は親兄弟もない身なれど兎も角故郷へ歸つて身の落着を定めんとて明治二年の十一月ぶらりと此地へ歸つて来て暫らく知る邊の家に厄介になる中昔懇意な朋友が世話して呉て今の女房お虎が後家暮で居る處へ入婿となりましてその間にもお兄様のお行方を探す事に心を留め又一つには卿の御成人を樂みにして情願ぞ及ばせながら一通の學問をせ仕込みぬい折を見て一度ハ東京かお郷里迄も尋ねて行きお兄様にお會し申さうと思ふて居た處今日尋ねて來られた松山幾之助と云ふのが御次男の龍二郎様であらうとは實に思ひの外的事で御座りましたが夫に就ては氣掛な警察署よりの拘引沙汰直ぐにその筋の様子をも聞きたいと思ふ間もなくお虎奴が怒心から卿へ追つた不埒な仕方付けても思止らすが當然なれど日頃剛性な彼が氣質の上其處ハ又入婿と云ふ此方の弱身

と夫に那の大倉三とは前にも申した姦黨とか云ふ中に心當りのある名前ゆゑ旁々此の處ハ卿を暫らく隠すが好からうと思ふので御座り升と言葉つきさへ俄かに改まつて意外に出でたる昔語りにおしづは愈々驚き呆れ夫れに就ては生の父母が不幸な成行七助が一方ならぬ深切厚誼哀しき有難たさが一つの胸に溢れつ、涙に流る、ばかりにて直と船底に取附て何の辭もなかりしに又もや上手より間近に下り來る一艘の屋形船中には兩個の男客が「到底手の中の鳥を逃して仕舞つて詰らない全体貴公も今少し話を屈かして置けば好いのだ」サア然う仰しやつては一向も出ませんがいや其處は又充分骨を折つて今日のお説は屹度致し升と云ふは正しく大倉三廣田源介の兩個の聲にてありければおしづは遠て、其處に有合ふ衣類を入れし風呂敷包と舷の間に身を平伏して姿隠せば七助は夫と察し彼方に怪められじと立上つて故と船を上手に向け例の腰をば敲きも敢へせ棹突立て、漕上りぬ

● 第六回

此に又唐物町一丁目の三宅たつと云ふは表は細き針の葉舞暮しの漉つそりと見ぬが

ら兼て貯蓄も乏しからで娘お花と共稼ぎ手際巧みにその賃さへも廉ければ例も仕事の  
 断目なく今日も朝より裕衣二枚ばかりを仕立上げホツと一息吐間もあらで流し元にて  
 夕飯拵へに暇なき折しも此へ入来るは隣り裏家に住居する手傳職安五郎の女房お勢と  
 呼ばれ氣も輕ければ自から口先輕るき女にて一個の娘を伴なひしが主人お辰のそばに  
 近づき勢オ、貴女も何歟とお忙ない事ですナ日は段々長なつて來升けれどツイ家の  
 事にエテくして居ると直ぐ夕方に成り升ので毎日々々忙しない目ばかりして今漸  
 く鉄漿丈をつけましたが真に髪を結ふ間もないのですと二つか三つか齒の缺し黃楊  
 の小櫛を扱取りて蓬となれる亂髪搔上る手の不束に肥太りたる夫のみか口の邊にベツ  
 たりと鉄漿に汚れし痕あるを。とも知らせして口を替めて物云ふ様子の噴出すばかり  
 に可笑しければお辰は曲突の烟に咽ふ振をなし只ハイハイと云ふのみにて返答さへも  
 仕兼ねしが之に引變へ娘お花はこの程櫻の宮にて料らき國重龍二郎の姿を見て嬉れし  
 と思へるの空頼み警察署へ拘引との異變を聞て獨り心を傷めつ、那の七助どのも深切  
 に様子分れば報知すと云はれしかどその折は心遠て、委しう町處をも告げてなけれ

ば是も頼みにはなり難しア、今頃の嚴しい牢屋に鎖込められて色々難儀を仕て居なさ  
 らうが尋ねたいにも只警察を聞けるのみ何處を目的とも定め難く縦し又その事の知れ  
 しとて女の身にて行かれるすまじと彼是胸に思ひつゞけて二三日以前感冒の心地にも  
 ありければ衾引被いで打臥せしが今日の努めて起出で、奥の一室に家業の裁縫はなし  
 つ、も鉢に裁たる海棠の花散る風情を眺め入り針の運び滞りたり斯る折柄此方のお  
 勢は尚も眞面目に濟し顔(勢)夫は爾うと今朝お話し申しました妾の方に預つて居るお  
 静さんと云ふのは此お兒です情願是から裁縫の手張つた時は手傳はして上げてね呉な  
 されませ恰どお花さんとの好いお友達随分お心易うに……サアお静さん御挨拶しあ  
 さらんか後振返るその顔をお静は何心なく眺むるに今迄少しも氣づかざりしが彼の  
 口元の得も言はれを汚穢しければ是はと思はせ興を醒しつ、兼て心に掛る兄龍郎が  
 身の上を案じ暮して日頃鎖せる眉も伸び忍び兼ねたる筆をば袖に包みて頭下げたるを  
 の處へ忽ち表よりツカくど入り來る一個の丁稚が突然りに此間から頼んである仕  
 立物は如何です出來てあらなら貰ふて歸り升と大きな聲して云ふ辭にね辰は彼方を見

遣り(辰)へい、貴公は伏見町の丸源さんですナ昨夜迄に仕て置く様に申しましたが家の娘が此間から臥て居ましたので大きに遅うなり升たコレ花今丸源さんから尋に來なされたが何時迄と返辭をしやうかいナ夫にお勢さんの處に居なさるわしづさんもお出で、あるせと庭口より奥を覗て懸掛ればお花は彼方で(花)ハイモ一明日は出來升ゆゑ明晩にても此方から持て参じ升。オ、お静さんとやら好うお越なされましたと膝に附いたる糸屑を捻りながらに出で、來る姿眺めてわしづは心に夫と點頭合せ故と初い、しき風情にて會釋なし居る傍より夫 お勢が紹介せの口上長々々々喋べり立てたる口の邊りは例の鉄漿黒々と難かしさにぞね花へ見るよりグツと堰止る可笑さにはも笑を袖に包んで指俯向けば最前より暫らく氣を沈めたるお辰も今、忍び兼ねフツと吹き出す様子にて初めて知つたる丸源の丁稚さへ共にお勢が顔を見入りつ、腹抱もれば是より後は又如何に成行く身とも白齒の娘ね静も坐るに心の憂を打忘れホ、とばかりに打笑ひぬ

● 第七回

政談演説會來る二十六日午後八時より東區平野町某の寺院に於いて開會す參聽無料辨士某々との廣告は當時大阪の諸新聞紙に掲載ありて時しも政黨組織の議論は露々として世を動し人苟にも政黨に入らざれば人にあらき政黨に加らざれを愛國心なきものなりと迄に批評して殊には此程岐阜中教院懇親會に於て自由黨の總理たりし板垣君が相原尙書に刺れたる事なぞあり且つ世間は通貨變動の影響にて左しも一時は止まる所を知らざりし物價の騰貴も俄かに下落の方にのみ傾る商業漸やく衰退の色を現はしたるにも拘はらで政黨論の一方には人氣頗る湧上り固り腕力を斥くる時節とは云へ何となく言論に殺伐を含みつ、黨派の爭論は目覺しくも亦凄まじく日夜互に反對黨の攻撃に怠る隙のなき折なれば此演説會の催しも兼て人々の取沙汰して待構へたる多かりしが扱開會の當夜ともなりければ一席七八十疊も敷かるべき堂内に今宵ばかりは光明赫奕たる本尊も戸帳の内に垂籠めて無爲安樂を觀じ玉ひ堂の左を正面より一脚の卓子押据る後の承座には白紙繼合して政黨の解。岐阜の血雨若しく、國會の道中もど、演題を筆頭に書つけて夫々辨士の姓名をも記し兎角する中聽衆も追々詰掛け警官の出張

遣り(辰)ハイ、貴公は伏見町の丸源さんですナ昨夜迄に仕て置く様に申しましたが家の娘が此間から臥て居ましたので大きに遅うなり升たコレ花今丸源さんから尋に來なかつたが何時迄とお返辭をしやうかいナ夫にお勢さんの處に居なされるわしづさんもお出で、あるせと庭口より奥を覗て懸掛ればお花は彼方で(花)ハイモ、明日は出來升ゆる明晩にても此方から持て参じ升。オ、お静さんとやら好うお越なされましたと膝に附いたる糸屑を捻りながらに出で、來る姿眺めてねしづは心に夫と點頭けと故と初い、くしき風情にて會釋なし居る傍より夫、お勢が紹介せの口上長々々々喋べり立てたる口の邊りは例の鉄漿黒々と難かしさにぞね花へ見るよりクツと堰止る可笑さには是も笑を袖に包んで指俯向けば最前より暫らく氣を沈めたるお辰も今、忍び兼ねフツと吹き出す様子にて初めて知つたる丸源の丁稚さへ共にお勢が顔を見入りつ、腹抱也れば是より後は又如何に成行く身とも白齒の娘ね静も坐るに心の憂を打忘れホ、とばかりに打笑ひぬ

● 第七回

和吹雪

政談演説會來る二十六日午後八時より東區平野町某の寺院に於いて開會す參聽無料辨士某々の廣告は當時大阪の諸新聞紙に掲載ありて時しも政黨組織の議論は露々として世を動し人苟にも政黨に入らざれば人にあらぬ政黨に加らざれと愛國心なきものなりと迄に批評して殊には此程岐阜中教院懇親會に於て自由黨の總理たりし板垣君が相原尙書に刺れたる事などあり且つ世間は通貨變動の影響にて左しも一時は止まる所を知らざりし物價の騰貴も俄かに下落の方にのみ傾き商業漸やく衰退の姿を現はしたるにも拘はらで政黨論の一方には人氣頗る沸上り固り腕力を斥くる時節とは云へ何となく言論に殺伐を含みつ、黨派の争論は目覺しくも亦凄まじく日夜互に反對黨の攻撃に怠る隙のなき折なれば此演説會の催しも兼ねて人々の取沙汰して待構へたるも多かりしが扱開會の當夜ともなりければ一席七八十疊も敷かるべき堂内に今宵ばかりは光明赫奕たる本尊も戸帳の内に垂籠めて無爲安樂を觀じ玉ひ堂の左を正面より一脚の卓子押据る後の承座には白紙縫合して政黨の解。岐阜の血雨若しくハ國會の道中おと、演題を筆太に書つけて夫々辨士の姓名を記し兎角する中聽衆も追々詰掛け警官の出張

もありたれど尙時刻の早きにや辨士は未だ出席せむ只卓子の邊には水飲コソナの洋燈の影と玲瓏たる光りを放つのみなりしが閑話は扱措き表は今日一六の夜市に當りて最闊しく人様々に群集ふその中を西の方より歩み來れる一個の女當り別人なら老彼の三宅の娘お花にて手に大巾の空風呂敷を携へたるは昨日の約束に隨て伏見町なる丸源へ仕立し衣服を持行ける歸途と知られぬ常にもあらば出し遊べたる色々の店々を覗き目も眩らんと



# 法演説會



は始終國重が身の上のみ引されて只庸早に行過となしたれど込合群集に遮られ思はを胸を止めしは恰も演説會場の門前にしてその張出しは簾より地に垂れ最嚴しき書さなる

に眼を奪はれ見るともなしに眺むれば這は又如何に之と並べて掲げたる辨士が姓名の  
 その中に思ひ設けぬ國重龍二郎との文字あればお花は覺ゆる進み寄り暫時茫然として  
 不みしが頼て莞爾り笑を含みて打點頭さ折しも四五人下々々と門に立入る後又眼さ  
 出入改める傍迄は憚る心も歩も進しかど斯る場所とて女の身の何とやら立寄るも耻か  
 しく如何なさんと猶豫ひしを彼方に居合す二三の少年が疾くも見つけて袖引合ひ(甲)  
 君見玉(彼處に来て居る娘を……(乙)成程好い女だ(丙)聴きに來たのだらうか(甲)  
 然らサ是迄藝妓などにや随分あるが(丙)夫も女紅場の生徒だから條例に據ると不可な  
 いとか云ふ説もあつたぢやないか(乙)兎も角女の聽人とは珍らしい實に自由万歳だ(一  
 丙)熱心感服々々(甲)ア、彼是喧しく云ふものだから如何やら歸らうとするせ(乙)早  
 う呼ぶが好い(丙)オ、然だど走出しお花又聲掛け(丙)卿さん演説を聴くなら早うお入  
 んなさいまごくして居ると傍聴満員となるから。ナニ遠慮もや及ばないと袖引留れ  
 ばお花はハッと顔赤め(花)イエ妻は演説會を聴くのではありまんが演説會に出るお方  
 に……(丙)エ辨士に用でもあるのか(花)ハイ(丙)フソリヤ誰に。何と云ふ人ぞエ

(花)國重龍二郎さんと云ふお方ですが……(丙)オ、國重さんか。オイ、河村君國  
 重さんを尋ねに來たのだと(花)イエ、何れ今お逢ひ申させどもお宿が分り升ならチ  
 ヨット仰しやつて下されませ(甲)何だ國重さんを尋ねるア、井上君兼て聞て居る一  
 件のだせ(乙)成程以前の下宿の娘か(甲)國重さんの夫人候補にあらうと云ふ女だ(乙)  
 夫ぢや一遍拜見……否お目に掛らうと笑ひ興じて無作法にもお花の四邊を取圍み戯  
 れ掛りしその處へ忽ち表の方より一個の壯士が靴音響かし入來り夫と見るより少年共  
 を叱退け庭の洋燈の影に透して(壯)オ、卿はお花さん此に何ぞ用でもあるかと辭掛け  
 られお花は嬉しく笑を含み(花)誰方かと存じましたら中山さんですナ先日から國重さ  
 んが妾の方をお立なされたので久しうお目に掛せせん併し今夜那のお方は此にお出ま  
 しですか(壯)ウン國重君か成程那の人も我輩と一緒今夜の演説會に名を出した  
 が據らない用事が出來て大和へ急に歸つたせとてお花は夫はとばかりに打驚る姿が  
 辭まなかりしに折柄會場には今や演説の始まれり覺えくして拍手の響堂、震ひ之  
 に續いてヒヤ、ノ、ノの聲沸くが如くに起りたれば壯士は忙しく分れを告げ會場

さして赴ける跡にお花は悄々ど入りたる時の心とは引變り張る方も脱落ちて進ぬ脚を引さなから表の方へ花行ぬ

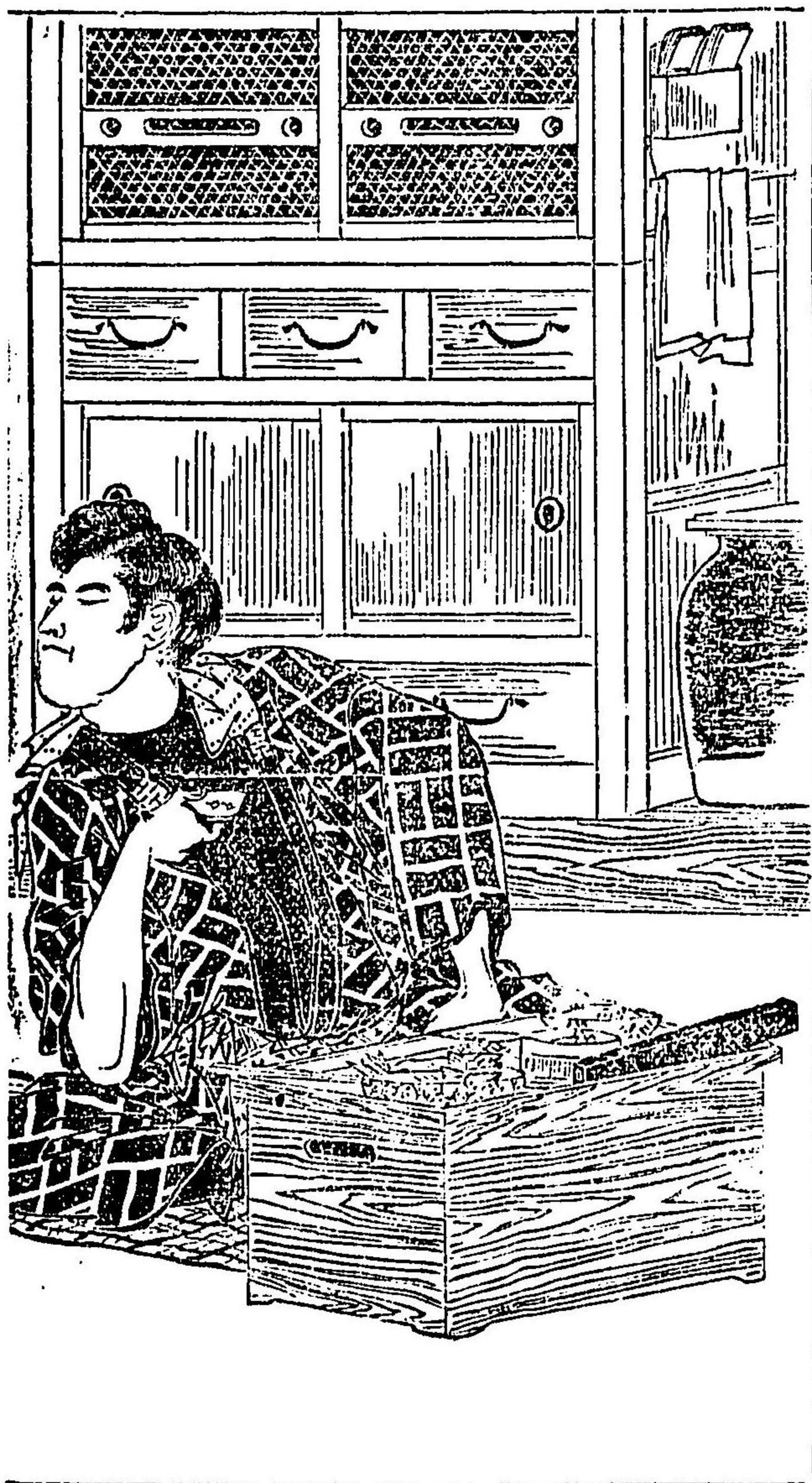
● 第八回

日暮し稼ぎの暇なき手傳職の安五郎今日は例より歸宅も晚く女房が勢が待受けて其處に取出す飯臺に向ひながら何か頻りに思案の体一種二種の下物にさへ手を着けお只盃のみを傾くる様子をお勢は不審りて(勢)コレ卿は何ぞ心配な事でも出来たのか嚴う顔色が悪い様な又頼母子の口か夫とも仲間の人と紛紜事でも……ホんに今朝出掛けにも頭痛がすると云ふ事であつたナ爾なら恰と蘇命散が一服残つてあるから煎じやうかと老實しくも口まめに尋ぬる辭々安五郎は五月蠅しと打消しつ、手に持つ盃下に置いて突然り又(安)汝は昨日表のお辰ツアん處へお静さんを連れて行たナ夫に阿呆らしい口の端に……と云掛るを半分聞かぬお勢は我から噴出して(勢)サアその事で昨日の人さんに腹筋を捻らしてアハハハハ、恥をかいたり笑ふたり……思ひ出しても……アハハハハ、餘まり見つともないので未だ卿には……と又もや笑ふて臥轉ぶ

を安五郎は白眼つけ(安)コレ笑ひ事ぢやないその可笑な様を仕たから大變が起つたぜ(勢)エ大變とは……漸々笑を収むれば安五郎ハ膝組み直し(安)サア大變とは外でもない汝がお辰ツアんの家へ行た時伏見町の丸源と云ふ處から丁稚が來であらう(勢)爾うく丸源とかより仕立物を取りに來たが夫が又何か仕たのかいナ(安)何とかしたテ其丸源と云ふのは七助さんより聞て居るお静さんを大倉へ世話しか、つた(勢)アノ廣田源助と云ふ人の事かエ(安)オ、爾うぢや其家で乃公が此譯を知つたのは外でもない今日棟梁から仕事の都合に因つて不意に遣られた先が那の家であつて朝からは外の事に掛つて夕方の仕舞際に此間の雨風に損じた天窓廻りを直して居ると下でお家と下婢衆どが如何いふ事からかツ〜と笑ふて居る聲が仕た中に店から入つて來た丁稚の側で笑ひながら昨日唐物町の仕立屋へ行た時に斯々した事があつたとしてサア夫から汝の面の可笑しかつた塩梅を仕方交りに……(勢)エ、悪い素丁稚ぢや定めて仰山に言ふたであらうナ(安)爾んな事は如何でも好いが揚句の果には側に居たお静さんの名迄聞腦りに覺て居て委しう様子を出したので實は乃公も其時始めて汝が事ぢや



と氣附た處奥の間に居た主人も最前からの話を耳に挟んだと見ぬて蔵所に走つて出て  
ソリヤ如何やら此間から迷惑掛けられた櫻の宮のお静に違ひない全休仕立屋とは何處



●石川幸次



の事ぢや直ぐに是から出掛て行て引張  
出すと云ふ権幕であるから乃公が心は  
堪ろまいがナ(勢)眞にソリヤ難儀な  
安)慮がまごくする中主人は忙しう  
支度をして出掛るからモ一黙止つて居  
られぬゆゑ急よ智慧を振ひ出して天窓  
から(勢)エー天窓から……(安)モシ旦那そのお静さんのお事なら私も兼て知つて居升

が預り人は志入と云ふ道楽者ですから卿が一寸行きなされた位でハイと承知して渡すことはあり升まい〜イなか〜食へた奴ぢや御座りませんと聲掛けたので主人は出した歩を引込る乃公はそろ〜家根から下りて其處を程好う言取つて詰り乃公から溝八へ談じを仕て此方へ連れて参りませうと話を極め又向ふから云ふ通り骨折代も有難う受け升と慾で掛つた様に見せて置たが扱是から先を如何したものであらう(勢)マアソリヤ殿い事が起つたナア……けども那の兒は長い馴染の七助さんから預つたので向ふへ渡すことは出来んぢやないか(安)ソリヤ勿論渡す積なら今云ふた様な狂言は書かんけれど爰に難儀なは此頃喧しいアノ頼母子一件最前歸宅掛けにも天満の吉兵衛さんが家へ来るのに逢ふた處例の殿しい催促で彌々埒を明けぬなら政府へ訴へたその上に棟梁に言込んで仲間の者にも附合の出来ん様にするよ云ひれたゆゑ據ころなら明日には岐度目鼻を附け升と平頼にして歸つて貰たが元から目的のある事でもなしそんならと云ふて怒い是迄表を張つた暮しを仕て居ながら今更世間へ襦袢を出すも残念あり……夫に就て考へて見ると如何も濟んければ那のお静さんを……(勢)エ卿如何

どかする積か(安)好んだ譯ではないが九源から頼まれたを幸ひ骨折代のその外に大倉よりも金を引出す工夫をば……併し今那の兒は何處へ。湯に往たのか……ア、何にも知らずに居るものと差當つたる窮迫に善からぬ心は出しながら流石良心の自かから咎めて尙も思案を定め兼殊にお勢は始めより然る考ひなかりしかと教育乏しき身の哀しさ眼前に迫る困難に打勝つ勇氣を失ふて終にお静の身体を餌として金の融通を釣出さんと密議を此に整へしは亦是非もなき次第なり斯る折しも露路口より利久の履の響も軽く湯より歸へれる娘れ静何氣も附かぬ安五郎が住居の前に近づく處へ不意に起つて小陸より現はれ出でたる一人の曲者お静の袖をムツと捕へ有無を云ふ間も荒くれなく元の露路口へ引出したればお静の恐怖へアツと一聲立ちながら暗に透してその顔眺めエ、アナタはと二度吃驚り跡の辭は出さざりけり

● 第九回

上弦の月は尙高くある頃なれと晝より曇れる天の脚下暗く今や降出さん景色なれば常に變りて往來稀れなる本町通りを西の方より脚早に歩來る一個の娘頓て橋の袂にて瀟

通を南へ行くかとなした。折しむを此方に渡す。南に通を向ふんとする。老人の娘は街燈の光にてその顔チラリと見るとより忙しく傍へ走寄つてオ、櫻



の宮の七助さんと掛けたる聲に老人は驚いて立ち留り娘の姿熟々視て(七七)是ハ



り直ぐに其處へ行た處が(花)大和へお歸りなされたらうですナ(七七)サアその通りで主

◎好慮へ遇ましたモシ  
お花さん國重さんの事を聞なされたか(花)ハ  
警察署から放免されてお歸り(七七)ソリヤ  
なか／＼早く知れました  
私には最前漸々の事に  
兼て頼んで置た先から  
その次第を聞込みお宿  
る石町の芝辻朝五郎と  
云ふ家である様に知ら  
して呉れましたから。

人夫婦は留主中ながら賄婆さんの話では大和へお歸りなさつたと確かに云ひ升から  
 兎も角娘に知らせ又貴女さんの家へも尋て行く積であつたのですが一体今頃何處へお  
 出か(花)イエタ方伏見町へ行た歸りに平野町の演説會で國重さんの事を聞きまして夫  
 から安土町に一軒用事があるので一寸其處へ寄つて是から家へ歸る所です七アー爾ら  
 すると貴女さんの家も唐物町の一丁目邊ですか(花)ハイ曲灣の處です(七)フーン夫で  
 は娘を預けた先の近隣でと獨言く辞も未だ了らぬに忽ち南の方より足音高く宙を駆つ  
 て走り来る一人の女あり續て跡に一人が追絶つたるその光景只事ならを見れば七  
 助はお花を傍に避けさしつ、シツと彼方を眺る中女はアッヤ捕へられんとする處を纒  
 かに躲して七助の後に廻つて身を隠せば追人は焦燥つて七助を押退んとして顔見合し  
 是はとばかりに驚くも有理や妻と夫の不思議な遭遇雲時互に呆れながら七助に親爺ん  
 かと絶りつく後の女を身で蔽ひ前より取付く女房お虎を突飛しつ、眼を怒らし(七)ヤ  
 イ執念深い畜生奴何時居處を……(虎)オ、今日夕方廣田の家で聞て見るとおしづの  
 所在が知れ那の手傳の安公が隠れ先から引出して(七)エ安五郎が……(虎)手渡する

受合を仕たさうなけれと尙余からも言合めてと安公を尋ねに行て料ら老夫婦が悪計を  
 立聽いたその處へおしづが歸り合したから引捕へたに逃出しをつつと云ふ中におしづ  
 は七助の手真似に覺り本町橋を東へとして走り出せばお虎は厄鬼となり支へる夫を押  
 退け突退け跡追つ掛んとしたれと此方へその手を引留め暫らく其處に挑合ひしがお  
 虎の力や勝りけん頓て捕らる、袖を振放し逸脚出しておしづを追へば七助も這は口惜  
 しとお花の事杯は捨置て必至となつて跡を慕へと多病に衰弱れる身の甲斐なき心程に  
 は脚進まき看すくおしづは再び母手に捕へられんを見ればアナヤと思ふ折しも  
 おれ向ふの方より歩み行れる大の男夫と見るよりお虎の前を立塞ぐよ善か悪かは暗  
 紛れ間距離隔り其意を知るに由なけれとおしづは爲に虎口を免れ早二三間逃延びたれば  
 七助は天の助と氣を勵まし彼方を指して走行さぬ

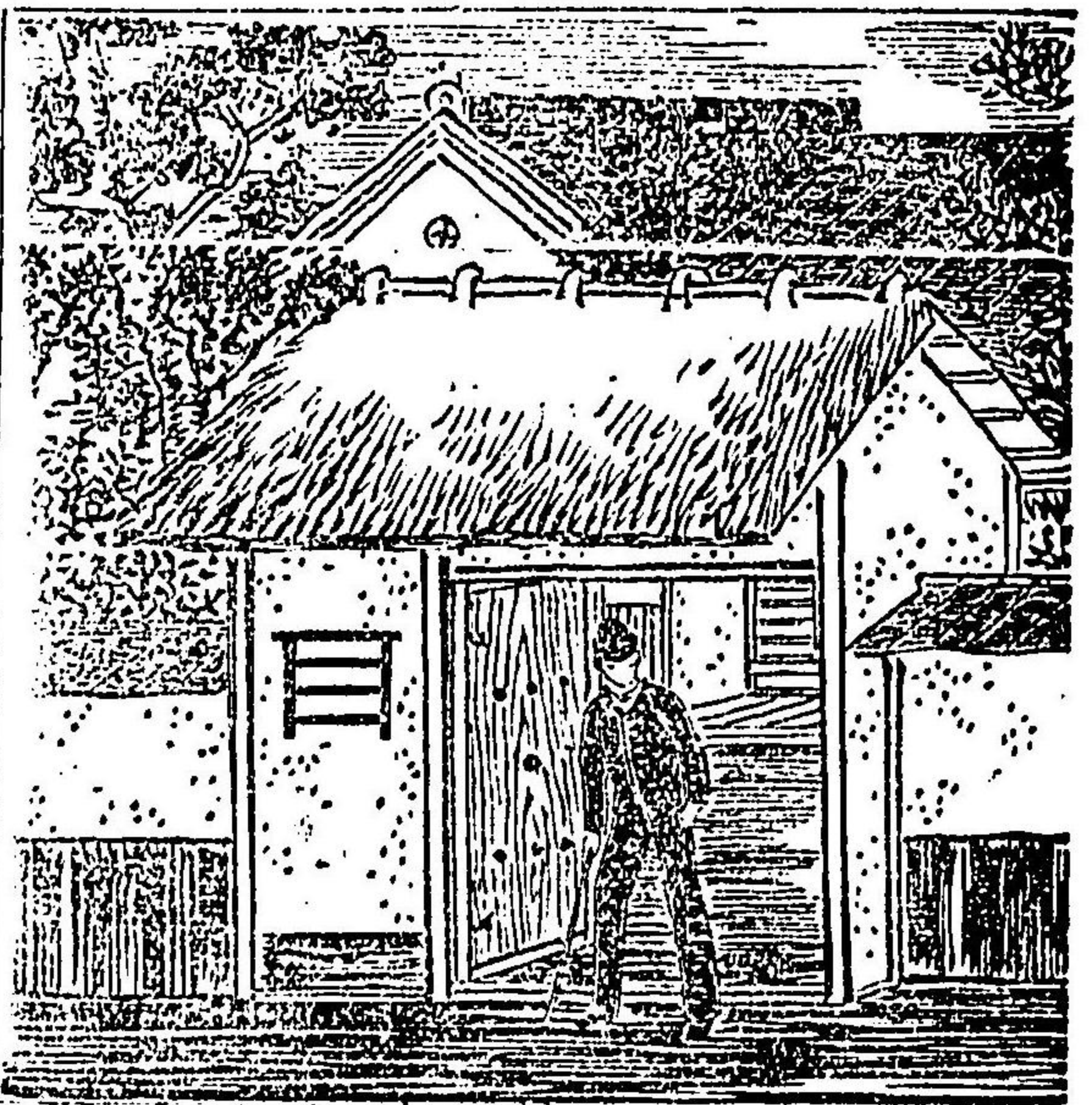
● 第十回

變轉常なき世の有様日々逢ふ境遇は誰か豫じめその吉凶を知らん然れば忠實無類の七  
 助も日頃心盡しの甲斐あつて昨日國重が放免の沙汰を聞き嬉れしと喜べる間もなきよ

本意なくその人は大和へ出立と聞くが上俄かに起れるお静の再厄夫に就ては依頼に思へる安五郎の變心と云ひ事皆意外に出でたぞれ但本町橋の危ふき際に彼の大の男が跡追ふお虎を遮へしため辛くもお静を伴ふて逃課せしを喜びつ、その夜は少の知る邊を便りとして上本町の去る家に宿を假り今日は大和へ旅する身天の摸樣は昨夜の曇餘波たになく野にも山にも色々の花咲出で、心の中も此の目こそ年頃祈りし念願の一つの叶ふと思ふに就け勇みを含んで見ぬながら停午過る頃國分峠の麓にて只ある一軒の茶店に休らひつ、共に腰打掛しれ静が姿の帯も衣裳も平常のま、髪さへ甚く亂れて疲勞し脚を摩り居る様子も目を留めホロリと溢す一軍折柄傍に人もなければ(七)ア、何れ時の成行では御座り升が年頃不自由な目ばかりさせまして夫に此頃の様な心配續き……イヤモー皆私が至らんからの事……若旦那のお目に掛るにも何とやらお恥しい……溜息吐て嘆息すればお静は急に形を改め(静)夫の親爺ん何を言ひなさる幼少い時から養育て貰ふた上に實の親にも勝つた慈愛平常から分に過ると思ふ程讀書算術裁縫の事迄も仕込んで下され升て今度又妻の故に母親さんとの反目風波……

花吹雪

(七)サア那奴が爲に折角是迄力一杯にお護育て申した私の辛苦も巳の事水の泡にする處で御座りました(静)併し母親さん如何しなかつたか定めて妾の事を……(七)ナニ那奴の事は如何ならうとも宜しいから捨てお置なされませ(静)けさ本町橋で遮へた人が何ぞ又悪いものではなからうかと思ひ升(七)ソリヤ昨夜からも云ひ升通り貴女は向ふへ走りなさるし又迂濶々々して居てはならんと名前も仔細も問はせに那の場を避れたゆゑ未だ誰とも心當はつきませんがその中には又分りませうと云ふ處へ西の方よりガラ〜と人力車に乗りて走來る男は年の頃四十許にして商人風と見ゆるが忽ち下に降立ちて此方へツ、と入りながら兼て馴染と見ぬて店の主翁の今しも奥より出來るを呼掛け(客)八兵衛さん又來ました(主)オ、角金さん貴君昨日大阪にお歸りなされて(客)ハイ今日は又俄かに奈良に出物がある事を聞たので(主)何せお忙しいのは貴君も結構私の方もお蔭で……併かし裏の座敷へは通りなされませ最前からお仲間丸源さん(客)エ那の廣田の源介さんが來て居るソリヤ妙ぢやナ此頃は取込んだ事があつて何處へも出られんと聞て居たにど啞や死ながら裏の座敷へ通り行く様子を



立上るべくも見ゆざれば七助は滑感の胸を打ち(七)ア、是とマア如何したら好からう  
 か若旦那のお家へ龍田在の椿井村へ云へばモ一此からは遠ふもなけれど此お怪我では  
 飯令痛が去つたとして歩行く事は出来ませぬ。と云ふて後から後から廣田の源介が今にも

聞て七助お静は俄かに顔色變へ茶鏡を置く  
 もそこくに取手先引合ひつゝ、東に走り  
 山阪を半登れる時しめわれ餘りに急でお  
 静は思はせ木の根に爪先蹴掛けて伏轉べば  
 アナヤと驚き七助の透忙しう扶起せど甚く  
 膝の上部を石にて折けるゆる血潮流れて裾  
 を濡はし一脚さへも歩まれを再び其處に倒  
 れたれば七助は愈々驚き手拭裂て疵を裏み  
 血の汚れをも拭取り道の傍に滴る清水掬ひ來  
 て口を潤しなご襟々介抱なしたれど容易に

出て来るに違なし私も昔の身体であるから主公のお供をして軍場も履んで来た位ゆる何の那奴等如きが三人四人出て来て若し無理に貴女を連れて行かうなど、するときは片ッ端から敲付ふして遣り升けれと昨夜の様に虎奴にさへ力の叫はぬ程又全体此山道も近頃切開けて人力車が自由と通ひ升けれと何分不意に起つた旅立にて持合せは眞の茶の錢許人力車も乗る所か午飯の食事も……未だお上げ申す譯にも行かぬ仕籠イヤく貴女は最前からもお兄様に逢ふのが嬉しいから胸膨がして何も食べたうないと仰しやるけれとのお心を察すると私こそ胸が一杯になつて来升ぬいナアと坐る涙に暮れつ、も心に掛る元來し道を眺むれば遙かに見ゆる二挺の人力車此方を指して馳来るにぞスッ大事ぞと七助は周章ながらも甲斐々々しくお静を脊に負上げて半町許走りたれと身一つでさへ老人の脚下難かしき山阪を争で何時迄續くべき次第に息断れ氣憊れて今や其處に倒れんとしたる處へ向ふより来る二個の車夫牽けるは幸ひ空車なれば七助の屹度思案を定め(七)モ一此場で猶豫は出来ませんサアお乗りなされませ。人力車夫大急で瀧田の椿井村迄一挺五十錢ぢや。母衣を着せて大急ぎとれ静を先に自

分は後に乗移れば金の光りに一個の車夫は二つ返事忽ち懐返して駈出したるその後には早くも前に見ゆたる二挺の車走來り細き道筋ゴロくと續て進む四挺の車前の二挺は後の車に追る、如く山の岫谷の傍を廻りくつて行く様は最も危ふく見ゆたりしが是より後はいざ知らせこの時お静の運や強かりけん背後の乗人は正しく廣田源介にてありたれと氣づかれる事もあらせして何時か山路を過越ぬて塗平坦かな奈真街道に指掛れば車の輾も速かに瀧田の曲に到りしは尙二時にハ早かりき此時後の車は遙かに後れてその影さへも見ぬざれば七助お静は喜びながら我志ざす椿井村に道を轉じて車を走せしに忽ち彼方より歩來る一個の壯士あり身は薄羅紗の洋服を着し手に黒草の草袋を提げたる年の頃は三十二三罷さへ左右に分れて生しはお静こそ未だ知らぬ七助の胸の中に夫と點頭と透て、車を飛下りつ、近づき見れば面影似たれと櫻の宮にて逢し人にはあらざれば是はと本意なく思ひながら會釋して(七)モシ失禮ながら貴君は此村の國イヤ只今の松山幾之助と云ふ方のお家を御存じなら何れで御座り升か教へて下されませと懇懇に尋ねれば壯士は一寸立留り後を指ざして(壯)オ、松山君の處は向の辻を東

に入つた北側だと鮮少なに云ひ捨て、瀧田の方へ立去るを有難しと禮を陳るも心急ぎ、我身先立つて教られたる辻を曲れば果して藪葎ながら殿し長屋門あり表の標札眺れば明らかに松山幾之助と記したるにぞお静も忙しく車を下り七助諸共胸撫下してホツと息吐き嬉しき餘つて不覺の涙を溢し、ハ亦無理ならぬ事なるべし

● 第十一回

外より歸來れる主人幾之助居室に通りて洋服脱棄て和服に着變へ下女が進める煙草盆引寄せて煙管取出し一服二服吸ふ處へ母の岸江が隣の室より出來り紙枚かの名刺を幾之助の手に渡し(岸)オ、割合に早う濟みましたナ最前から此黨員の人達が嫌疑の晴れた獄に来てお呉なされたせ(幾)ア爾うで御座り升か……井上正重中井柳三太田道一竹中半造吉川元康 成程皆黨員ですが……オ、勅使河原も来て居升ナ。是は案外近頃那の男は帝政黨に隨身したさうだが好く尋ねて呉た世間には政黨の異同にて従前の私交を棄てるものもある中にア、感心だと獨り口の中にて呟さつ、跡に一枚残りたる名刺の表を視る折しも岸江は忽ちオ、と何事か思出したる様子にて(岸)夫は爾うとそ

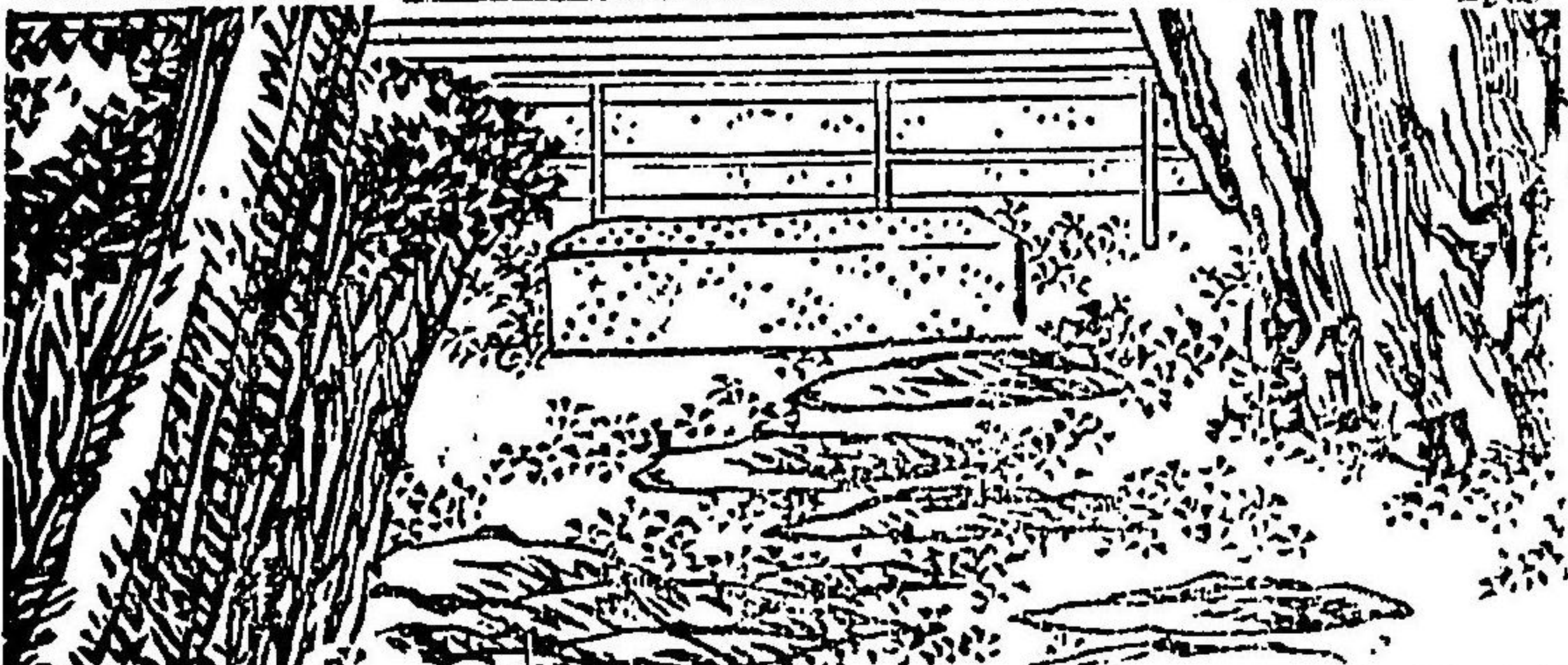
の外に大阪から櫻の宮の七助とか云ふ男が一個の娘を連れて尋ねて來たので今勝手へ通してゐるせ(幾)エ、中村七助か……ハテナ娘を連れて……フーン何だか仔細は分りませんがその男は大事なものですから兎も角逢ひませうと云ふに岸江は點頭て勝手に立ちしが暫らくして七助はた静を伴ひ腰を屈めて此方に入り主人の顔を見るよりも辭儀する事さへ(打忘れ)ニコとして傍に頭下げたるお静を強て我より上座に押し直し(七)サアお嬢さま向ふにお出なさるか方で御座り升エ、モ一御遠慮にや及びません。モシ若旦那様私の方で警察署へお引かれなされました時から以來へ夫はハ心配致しましたに御機嫌好うお歸りでハイハ斯んな嬉しい事は御座りません。イヤ是ハ私した事がお嬢様の事も申さいで粗勿なモシ此お嬢様は先日お話し申しました親旦那様が京都にお出なされ升中にお出なさつたお嬢御で御座りましてお名はお静様と仰しやう升と云ひ掛るに幾之助は膝を進め(幾)コレハ七助どん一寸待ちなさいそ若旦那とか親旦那とかお嬢御など、は皆余に係つて言はれる様々聞ゆるが夫れでは一向仔細が分らん全体余の方へは何用があつてお出たのですと聞くより七助は忽ち不



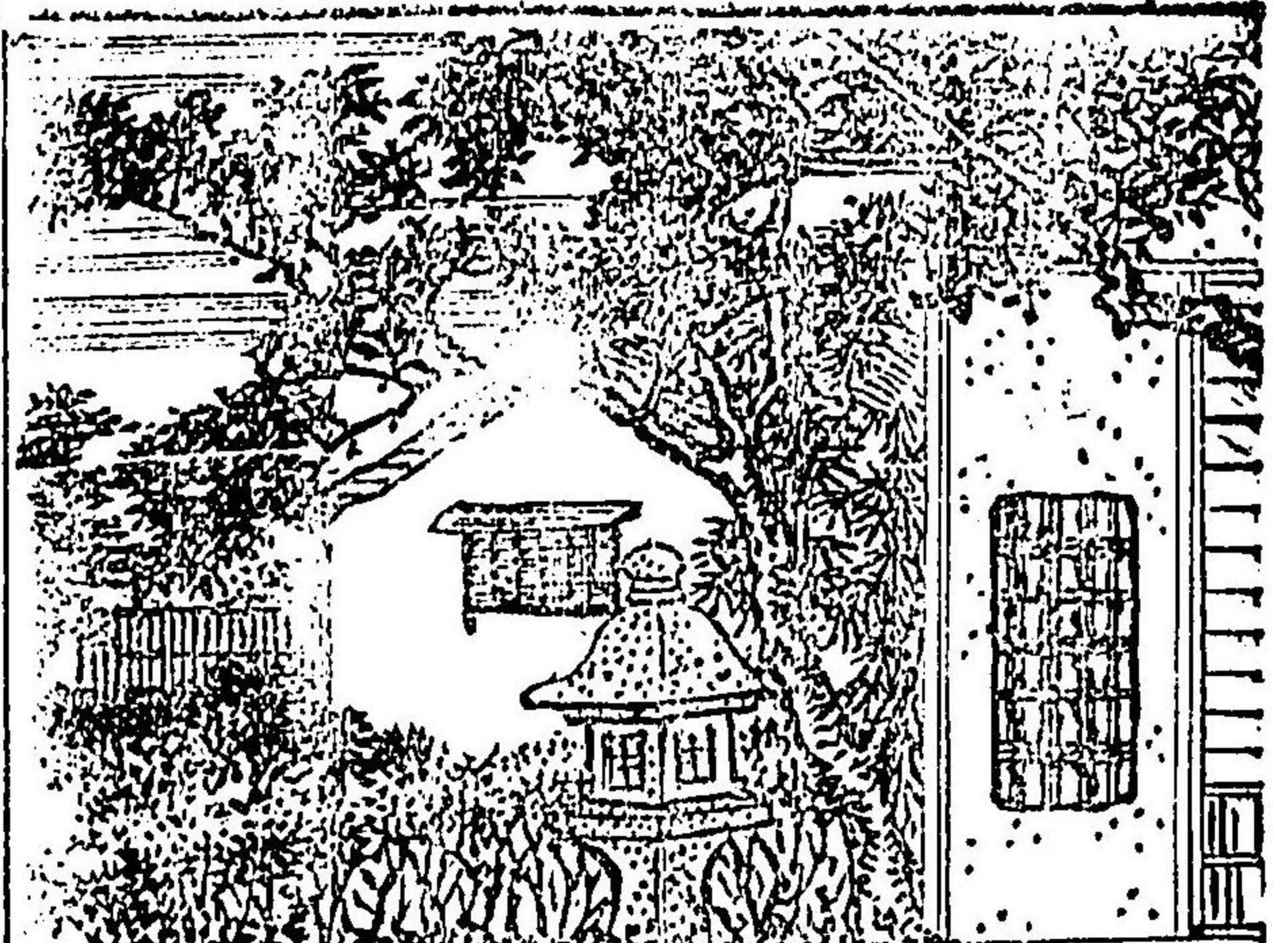
平顔はも膝を進め張眩して(七)エ何と仰しやるのですオ、



只今こそお名前が變つて松



山幾之助様では御座り升が  
 山前ヶ國重龍二郎と(幾)ナ  
 二國重龍二郎……ハテ不  
 思議なことを傍の名刺取  
 上て何か云はんとするにも  
 順着せ七助は手の掌にて



水汲りながら又も膝を進め(七)マッお聞下されませ何もお名前が變つたとて國重様  
 のお血統は變り升まい。好う親兄弟と知りながら切ない義理があつて夫と名乗られぬ  
 事などは昔語りにある事で御座り升が今の貴君に爾う云ふ譯もなからうと存じ升よ何

龍二郎ぢやと云ふて下されませぬ。ハ、アお嬢様なり私なり此淺ましい容体ゆゑお  
 疑があるの御座り升かモシ是にハ段々仔細のある事ですに夫も聞かきに只一概に  
 知らぬ顔をなさるのは(幾)イヤ是ハ又迷惑な成程先日那の通お前さんの方へ参つて國  
 重氏の逸事を聞かして貰ふたハ畢竟私ハ好事の癖から起つて兼々思ひ立つた著述の参  
 考とするため一尙國重氏又因みる何もない譯サア落ついて聞かさいその證據は國重  
 龍二郎と云ふのは別に其人があるから夫を尋ねなさるが好い併し余を國重龍二郎だと  
 思ひなされたには定めて仔細がありませうナ(七)勿論仔細のある事で御座り升とも夫  
 ハアナ先日私の方から警察署へお拘引れなされたその跡へ唐物町一丁目三宅方のお  
 花と云ふ娘が今此へお出なされた洋服を来たお方に逢ひたいと申し升からその次第を  
 聞て見ると彼は國重龍二郎と云ふお方でお家は和和にあつて書物を拵へたり訴訟の鑑  
 定とか云ふ事を仕て居なされた折々演説會にもお出があると云ふ辭は那の時貴郎から  
 私へ話したに書物を拵へる積ぢや京都へ演説會で行たと仰しやつた所に暗合して居りま  
 して又その娘が尋ねて來ましたは貴卿が一旦お郷里へお歸りの後一向便りがなかつた

處今日花見に來て雨に降込られて居る中に料らぞお姿を見掛たからの事ぢやと云ひ升  
 もるハ、ア夫では松山幾之助と仰やつたのは本名を匿して親且那の事を夫となくお聞  
 にお出でなされたこと、合點して夫から其娘へ貴郎のお拘引れなされた事を知らして  
 その場を歸した後で警察署の方を色々閉合しました處成程お住居は大和であるがお名前  
 丈ハ矢張り松山幾之助と云ふ事で御座り升から扱へば松山と仰しやつたが虚言でもな  
 スコリヤ此頃お名前が變つたのであるわいと始めて心付きました次第で御座り升、夫  
 に昨日は昨日で貴郎が警察署よりお放免になつた由を聞てから右の娘に途中で料らぞ  
 逢ひました時にも私が國重さんの事を聞きなされたかと申し升と平野町の演説會とか  
 で聞て來た事さうで好々次第を存じて尙大和へお歸りの處迄知つて居ましたからモ一  
 隠くさきにお名乗り下されませと搔口説くを前より幾之助は首傾けて聞取りつ、忽ち  
 撲と膝を打ち静かよ口を開いて(幾)ハ、アその話で大体分りました(七)夫なら貴郎は  
 愈々若旦那で……と又々膝を押進めツツと力を入れて主人の面を眺めたり

登時主人幾之助は一吹煙草吸つけてボンと灰吹に打はたさつ、(幾)イヤ間違の次第が  
 分りましたマア好く考へて見なさいお前さんが此松山幾之助と云ふのは今改めた姓名  
 で全くは國重龍二郎だと思はれた元の起りは外でもなく夫のお花とやらが一言云ふた  
 辭から出たのでありませうがナ(七)ハイ左様で(幾)ウン夫でその娘がお前さんの方へ  
 國重氏を尋ねて行たのは確か余に會つたどの事でもなくて只姿を見掛けたとばかり  
 云つたのですナ(七)ハイ夫は其通りで御座り升(幾)サ其處が間違の源に違ひない世間  
 に他人の空似とか云ふ事もあり夫でない處が余の姿を夫のね花とやらが偶々國重龍  
 二郎氏と間違へてお前さんの方へ尋ねて行て夫から又お前さんは余の云つた處と娘が  
 話しの次第と暗合する廉もあるからコリヤ松山幾之助は國重龍二郎の改名したものだ  
 どの想像を作り自分でに愈々夫だと決定してその人の斯々したと云なされたからお花  
 とやら迄拘引しられたり國重だと思ひ込んで居た處へ平野町の演説會に國重氏の名前  
 でも出てあつたから放免なつた事だと考へたか夫共國重氏が余に類した國事犯とか云  
 ふ如き意外な嫌疑でも被ふりて拘引なつたが同日に放免されたと云ふ様な次第であり

ませう實はお前さんの云ひなさる國重龍二郎氏は近頃余等と同じ黨派に加入して名前  
 を聞て居升ゆゑ定めて國重龍左衛門氏と縁故ある人だと察し殊に住所も此處とは遠く  
 ない土地であれば何時か逢ふて尋ねたいと思ひながら始終國重氏は獨身の上遠方に遊  
 歴しられるから掛違ふてその意を果さずに居る中お前さんの事を聞込んで先日の際に  
 尋ねて行た譯ですが何より先是を見て余の云ふ處を合点して下さいと前より手に持つ  
 名刺を七助の眼前に置けばお静も傍より指眼くに名刺の表の活字にて大阪府大和國添  
 上郡奈良高島村五百六番地平民國重龍二郎とありければ兩個は是ほど許に驚呆れ暫  
 時の間は何の辭も出でざりしが頼て七助は萎れながら(七)成程只今仰しやる所を承  
 り升と私が日頃若旦那お二方の事のみを氣に掛けて居り升處へ那のお花と云ふ娘の話  
 を聞かしまして夫に貴君のお年頃と云ひ仰しやつた事と云ひ土地迄が同じ大和のお住居  
 ゆゑお花から委しう國重様は大和で何處の村とも町とも聞かませせ又その事を聞く間  
 もなかつたより此間違が起つたので御座り升併し此國重様のお名刺を見升と何れ御當  
 家へお出なされた事と見お升が夫は何時の事で御坐り升か(幾)オ、是は先刻余が郡山

の黨員に招かれて彼地へ参つて居つた留守中に來られたゆゑ只余が嫌疑の露れたを聞  
て訪ふて下さつたと思ふて居る丈で未だ何とも委しい事は知らずに居るのですと云ふ  
折柄次の間に來合せし此家の老僕忠平が恐るゝ進入り(忠)モシ旦那様今仰しやり升  
國重様は主公がお留守なものですから別に用事はないが昨日大阪から奈良へ歸つて今  
日又大阪へ参る序に以來御入魂を願はふと云つて立寄つたんだから御主人が歸られた  
ら爾ら云つて呉と云ふて直ぐお歸りになりましたハイその時刻は此お兩個が見えまし  
たと門外で行違にもな  
る頃で御座り升と聞く  
より七助は思ひ打  
き(七)エ、夫では前刻  
此のお家を問ふたか  
が若旦那をあつたか  
静アノ洋服を着た...



(忠) 左様々々髭のある

成程 親旦那に 好う 似て あり

ましたから當家の旦那かと思ふたが怒い若旦那であ  
ると思違へた當家の旦那は兼てお目に掛つた事のお  
るために却て眞宵の若旦那を見損ねたか是は残念な  
事で御座りましたと投首してお静と顔を見合して茫  
然として居たりしに忠平は此方に向ひ(忠)モシね客さん表に人力車夫が待つて居て賞



錢をお貰ひ申して呉れど度々催促致し升から只今是へ參つたので御座り升如何かお拂ひなさつてと聞くより兩個は始めて氣づき兼て、幾之助を龍二郎なりと思込んだる事なれば取換貫はんどの心積も今は陰違ふ鴉の嘴さすが斯々と言出し兼一錢だにも持合せなき懐の如何はせんと當惑しぬ

第十三回

再説も松山の家に訪來れるお静と助の兩人は本意なき中にも尋ねる龍二郎の住所も知れ就てはその人の大阪へ赴けるを聞くものから再び後に引返さんとは思へるも路用に忽ち事を欠くのみか今乘來れる人力車の質さへ持合せねば據なく七助は開き兼たる口を開き此程よりの成行を委しう話して扶助を請ひしに幾之助は殊に憐み思ふて其言ふ所を承引く上此日は時刻も後れたればとて兩個を我家に宿せしに實に明日料られぬ人の身とて七助はその夜俄かに疾を發してなかく出立すること叫べば心ならざる夫より以來十日餘の日を送れるに容体次第に悪くして今日は一入苦痛加はり爛み少なく見わたるが最前より眼を開き傍に在りて看病に怠りなきお静の姿を熟々眺め坐るに

花吹雪

流る、涙を蒲團の襟にて密と拭ひ枕に絶りて少し身を起し切なき息を吐きながら「七」モシお嬢さん此間からお醫者様は急性の肺炎であるから養生さへすりや癒る事も亦早いと仰しやるければ何分年若つて居り升から如何も今度は……イヤ、爾う仰しやり升ければ逆も難しいと存じ升夫に就ても當家の主公の御深切斯うして何時迄ともなく置て下さる上お醫者の世話から何も歎むに氣を附けて生れてから若た事も無い柔かな蒲團の中で養生をさして貰ひ升は分に過た仕合で是と云ふも先旦那の御餘光があれはこそ是程迄に入さんが憐を懸て下さるので御座り升と云ひつゝ、も咽入る咳に胸を押へて苦しめばお静は忙て、脊を撫摩り（静）オ、お苦しからうがモ、斯うなつた日に仕方のない譯ゆる何卒今の様な哀しい事を云はせに随分氣を落着て養生して下さいませハイ今朝からもお徳室さんが例の様に牛の乳を持つて來てお呉なされました（七）如何も御座り所ともお情け深うて取分け主公幾之助様ハ學問と云ひ御人品と云ひ誠に見上げたお人で御座り升から仮令私は此儘果升とも彼のお方よさへお凭れなされば決して悪うはなさりません實は昨夕も貴女が引續た介抱のお草臥で暫らくお憩みの間

此の御老母さんがお出な  
 さつて色々お物語の中偶と  
 貴女の事に話しが移りまし  
 た處家の主人も尙無妻であ  
 る故兼てより彼是心懸て居  
 ながら順と程好い縁もなし  
 のであるが情願嫁にするな  
 らお  
 さんの  
 様な  
 を貰  
 たい  
 のぢ



と仰し  
 やつて  
 御座  
 りまし  
 た勿論  
 今貴女  
 のお身  
 の上ではなかく左様な事處では  
 御座りませんけれど行々御兄様方  
 にお逢ひなされた上で何れにかお  
 片付なさらうなら此の旦那の様な  
 お方に……とは申すもの、縁談の格別なもので御座り升から外より強て如何とも言  
 はれませんが若し斯う云ふ中にも私が目を遮ぎましたら兎も角主人御親子に御相談を



なされまして何何處にお出なさるとは分り兼ねるにも致せ大阪に違ひないのですからその所が分り次第一日も早うお兄様を尋ねてお出なさるが宜しい又私の身に取つては濃い親類もない事ゆゑ但貴女が世にお出なさつた時石塔の一つも立て、下さりましたら夫で充分で御坐り升と苦しさ息と忍びながら無き後迄の心遣ひ恩義を込めて盲遺す言葉をお静は哀しさ遣る方なく堰来る涙留め兼左なきだに露けき袖を又もや此に濕したる折しも奥の室より主人幾之助が一通の手紙を手にして入来り七助の枕邊に徐かに坐し(幾)今朝からは何かと多用で好う尋ませなんだが様子は如何です。何案じなさる事はないから何時迄なりと寛くり養生しなさい併しお静さん兼てお兄さんの居なさる所を聞合せに遣つた大阪の黨員も先日來他行致して居つたさうで今漸々此通り書状を寄越して呉れました處お兄様は此頃有馬にね出で、此月二十日頃迄滞留の後播州路より中國筋へ黨員募集の事を兼て遊歴せられると云ふよしですから兎も角余から書面を出して卿の事を知らして上げれば好いのだけれど有馬のお宿は何處とも知れてないから夫も叶はず去速今七助迄のは此通りの病氣であれば卿一人で行かれる事も出来升

いが其處は何とかか考でもあり升か夫共ね兄さんがお歸りの程も分らぬ事ゆゑ今有馬にお出るを幸ひ彼の地でお逢ひなされたい事なれば宅に使ふて居升忠平は御存じ通りの老人でその上至つて賢貞なるのですから供をさしても宜しい。又七助迄の、病氣も養生次第で全快するに相違ない譯で介抱万端余の方で屹と引受け升ゆゑ其處心安心なさいと例に變らぬ懇情にお静は涙拭ひつ、(静)段々どの御深切有難う存じ升實はその事を承り升と何地に仕ても御厄介になる事ゆゑ少しも早う有馬へ尋ねて行きたいの山々で御座り升が何分病人を捨置く譯には参りませんと云ふを七助は牀の中より打消して(七)ア、モシお嬢さんソリヤ貴女何を仰しやるのです今日處では若旦那も有馬にお出なされ升から仮令ね宿は分らぬとも狭い土地ゆゑ尋ねたなら直ぐにお逢なされる事が出来ませうイエ私の身体は頓着して下され升な兼て貴女もお聞の通り若旦那は是迄家をお出ましなされると一年半お歸りのない事もあるさうですから餘り遠方へお出ぬ先にお逢ひなさるが宜しう御座り升是非思立つて御主人には申兼ね升けれど忠平さんと御一緒に有馬へお出下されませと云へどお静は只主従の縁のみならず兼

てより親と頼みしその人の尋常ならぬ病に臥したるを打捨て、旅立ちするは心に忍びぬ處なれば頭打振り聽入ぬを言甲斐なまど七助は疲れし身体を起上り(七)エ、平常から賢しい貴女に似合はせ是位の道理が分りませんか畢竟今迄私が一方ならぬ苦勞を致しましたも只お兄様方を尋出して貴女をお手渡し仕やうと云ふばかり今現にその御一人の所在が知れてありながら私故に脚斷なさつては取りも直さず私の今迄盡した心を無になさると云ふものですモシ是程に云ひましては尙お聽分がないとあれをオ、爾らぢや今から藥も食物も口に入れ早う命を捨て、貴女の手脚纏を私から斷棄て升イヤ夫が私の本望で御座り升と如何にも思詰めたる氣色に見ゆたればお静も今は争ひ兼主人幾之助も此の處は七助の意に随ふが却て病氣の爲にも好からんと共に出立を勧めたれば終にお静は次の日より松山の僕忠平を従へて有馬へ出立すべしと諾ひける

● 第十四回

大海は遙けさみのをいかにして有馬の山に鹽湯わくらんと詠じたる 古より攝津國有馬郡湯山町の温泉は世に聞わたるその上今學術の進める時に逢ふて湯の成分は鹽

化那篤留母その外十三種の固形物を含めりと微細に知れ適症の効能も防腐。解凝。強壯。催下。制酸等に頗る好しと云へば患者の浴療は言ふに及ばず常に保養の遊客群集して殊に夏時には内外の紳士淑女を始めとし避暑の遊を爲すもの多く世間の三伏は此地の春と賑へる例しなるが今は尙その時にあらで左程熱鬧するにも至らぬを湯加減の好さ五月雨時に遠からねば何れの宿も日々泊客の敷を加ゆるその中に此に温泉の浴場へも遠からで吸霞樓とか呼ばる、家へ今しも遠たゞしう入來れる處女と老人の兩個連は是なん國重の遺女お静が松山方より附けられし老僕忠平に伴はれて兄龍二郎を尋來れるものど知られぬ頼て僕忠平の店の間に居合す手代の前に進寄り(忠)モシ只今取締の方で聞合して此處に泊りの國重龍二郎様と云ふ方にお目に掛りに参りましたがお出で、御座り升かハイ大和の松山幾之助方よりと取次で下さりませと云ふに手代は打點頭(手)へいゝ國重さんはお泊りで御座り升併し今お湯にでも居てお出か私はツイ外から歸つた處ですから一寸聞て上げませうと立掛ればお静ハヤレ嬉しやと早くも兄の傍に身を置く心地歡喜餘つて窺に胸を轟したるその折しも勝手より此方へ出來る一個



の下婢あり手代  
は夫を見掛けて  
泣つたるまゝ、



手) オイお熊と  
ん二階の國重さ  
んに逢ひたいと  
大和の松山さん  
からお出でたせ  
(下) イヤ國重さ  
んなら貴公が最  
前から留守の間



にお立になりましたと輕き返辞もお静の胸には撲  
と當り今瞬く間に綻びし心花も俄に散失せて如何  
はせんと當惑して暫らく辭も出でざりしが漸々氣  
を沈着て下婢に向ひ(靜)その國重さんは何地へ御  
出立になりました夫共是から跡を追ふたなら會へませうか(下)ハイ豫ては今三四日し

てから播州の方へお出でなさる様にお話で御座りましたけれど急に都合が變つたとか仰しやつて……左様ですお立になつてから大方一時間にもなり升ので何處へお出なさるか好らう聞て居りませんが折角のお出にお氣の毒で御座り升と慰め兼ねたる挨拶にお静は遺憾遺る方なく鳴の羽搔百はがさ悔めと慨けよその甲斐なく去り又し人の跡慕はんにも何れを目的と定め兼折柄店に掛けたる時計の針も正しく午後の六時三十分を指示し天さへ俄かに雲立ちて卯の花下し降出さんとなしたるにぞ今宵は此に脚を留め明日にもならば兎も角進退を決せんと思案を定め忠平にも相談して終に此家に宿りを求め頼て一室に通りにて食事そこへに濟せし後お静の茫然と坐しつゝも傍に無我なる忠平が額に煙管杖にあて沈黙りたる有様を氣の毒なりと心を汲んで時刻早けれと牀に就かし我身は跡に只獨り胸の中にて熱をど「ア、如何なれば又是程に物事相續し譯なるか今度此地に來りしも尋常一通りのことではお病煩ふ人を後に殘し路用は勿論衣服方端旅の支度は悉く松山氏の恵に依りて整ひしものなるを僅か時間の後れしたため是度こそは必らせと樂しみ思へるその人と行違ふて忽ち行方の知れせなりしとは時か運

わは知らざれど何たる此身の不幸ぞと嘆嘆くに就けて又心に掛る七助が病の容体今頃は如何に惱みて居るやらん若し哀しい事の出來はせぬか松山氏は斯許りに深き情を懸けるも扱何日迄と限りなくその蔭のみには依り難しハテ如何したものであつうかと思案に結ぶ憂の雲時しも簷よシヨボくと雨降濺ぐ音のして遙かに聞ゆる三絃の聲低き調子の切々と人は徒然の慰め草。我は腸を斷つ心の愁に最ど寂しき旅の宿暗さ行燈の小蔭にて額を疾し居る處へ次の室より一つ二つ咳拂ひして徐かき此方へ進入る一個の男あり年の頃は三十六七にして縞の衣服を身に纏へる未だ何者とも知れざれど馴々しくお静の傍に坐を占めて會釋なし(男)私は二階に泊合せて居り升大和の或る家の主人に附て居るものですが最前も蔭ながら飛り升と貴女は如何か國重龍二郎様をお尋ねなさるさうですが實に私の主人はその國重様とお約束申した事ありて今日より四日の後に此處にて再びお目に掛る筈で御座り升からその事を知らして上げいと主人から申付けましたと云ふにお静は忽ちに鎖せる眉を開きつゝ、膝を進め(静)夫と御深切に有難う存じ升シテその國重は何地の方へ行かれたので御座り升(男)ハイ京都よ

てから播州の方へお出でなさる様にお話で御座りましたけれど急に都合が變つたとか  
 仰しやつて……左様ですお立になつてから大方一時間にもなり升ので何處へお出な  
 さるか好う聞て居りませんが折角のお出にお氣の毒で御座り升と慰め兼ねたる挨拶に  
 お静は遺憾遣る方なく鳴の羽搔百はがき悔めと慨けよその甲斐なく去り又し人の跡慕  
 はんにも何れを目的と定め兼折柄店に掛けたる時計の針も正しく午後の六時三十分を  
 指示し天さへ俄かに雲立ちて卯の花下し降出さんとなしたるにぞ今宵は此に脚を留め  
 明日にもならば兎も角進退を決せんと思案を定め忠平にも相談して終に此家に宿りを  
 求め頼て一室に通りにて食事そこくに濟せし後お静の茫然と坐しつゝも傍に無我なる  
 忠平が額に煙管杖に於て沈黙りたる有様を氣の毒なりと心を汲んで時刻早けれと牀に  
 就かし我身は跡に只獨り胸の中にて熱々と「ア、如何なれば又是程に物事齟齬し譯な  
 るか今度此地に來りしも尋常一通りのことでは無く病煩ふ人を後に殘し路用は勿論衣  
 服万端旅の支度は悉く松山氏の恵に依りて整ひしものなるを僅か時間の後れしたため是  
 度こそは必らとと樂しみ思へるその人と行違ふて忽ち行方の知れをなりしとは時か運

かは知らされど何たる此身の不幸ぞと懺嘆くに就けて又心に掛る七助が病の容体今頃  
 は如何に惱みて居るやらん若し哀しい事の出来はせぬか松山氏は斯許りに深き情を懸  
 けらるゝも扱何日迄と限りなくその蔭のみには依り難しハテ如何したものであらうか  
 ど思案に結ぶ憂の雲時しも簷よシヨボくと雨降濺ぐ音のして遙かに聞ゆる三絃の聲  
 低き調子の切々と人は徒然の慰め草。我は腸を斷つ心の愁に最と、寂しき旅の宿暗さ  
 行燈の小蔭にて額を疾し居る處へ次の室より一つ二つ咳拂ひして徐か又此方へ進入る  
 一個の男あり年の頃は三十六七にして縞の衣服を身に纏へる未だ何者とも知れざれど  
 馴々しくお静の傍に坐を占めて會釋なし(男)私は二階に泊合せて居り升大和の或る豪  
 家の主人に附て居るものです最前も蔭ながら承り升と貴女は如何か國重龍二郎様  
 をお尋ねなさるさうですが實に私の主人はその國重様とお約束申した事もありて今日  
 より四日の後に此處にて再びお目に掛る筈で御座り升からその事を知らして上げいと  
 主人から申付けましたと云ふにお静は忽ち鎖せる眉を開きつゝ、膝を進め(静)夫と御  
 深切に有難う存じ升シテその國重は何地の方へ行かれたので御座り升(男)ハイ京都よ

り丹波の方に廻られましたので屹と四日の後は此へお歸りになる筈ですから夫迄お待ちなさるが宜しう御座りませうハイ此で又貴女が外にお動きなさつては掛違ふて一寸お逢なされる事は出来升まい(靜)成程仰しやる通りで御座り升ヤレ／＼そのお話を聞かまして大きに安心を致しました情願御主人へ宜しうお禮を仰しやつて下されませと辭つささへいそ／＼と笑を溢せるその様け宛がら萎める花の雨に逢ひ風雨に迷へる海船の燈臺の火を認めしる斯くやとばかりに見ねにける

● 第十五回

庭の縁側に片胡坐お靜に附添ふ忠平が按摩師に肩を挑せながら(忠)確つかり遣つて下さい三十年振りに肩を持つて貰ふから(按)ア、左様で大分久しい話ですナ(忠)家に居ると朝から晩迄掃々除夫に野菜物の畑仕事で辛働い代りに何時も身体は……(按)サアお達者を見て骨組が違ひ升今も奥で挑で来た大阪の俠客らしいお方は丈夫ぢやと思ひましたが貴君もなか／＼(忠)イヤ年を老ると埒はない余等も五十迄は随分一升飯も食兼せ五斗俵一壺は樂であつたダ(按)へー(忠)今はなか／＼爾ンな譯でなく斯うして

一兩日お据膳で暮すと疲勞が出ると云ふものか手足の節々が痛出して肩迄石の様に凝つて……ア、快い塩梅ぢや旦那が平常に旅でさす按摩は煤掃流でトン／＼バタ／＼と遣るのみで一向利かぬと仰しやるけれどお前さんの……ア痛た……イヤ夫でなけりや利かんオ、夫々其七九の處を……ナニ余等かエ余等ア大和から初めて来たが當地の繁昌には驚たせ(按)ハイお蔭で近頃は段々開かゝりまして浴場も今度西洋造の家に改める相談が有て來年の春に出来上らすと云事です爾なりや又……(忠)オ、お客も殖るに違ない(按)ハイその見込で。ナニ湯女ですか。左様々々随分變つた形装を仕て居升が。モシ彼はなか／＼來歴の有る事です(忠)ハア左様かナ(按)その元は建久年中に仁西上人と云ふお方が此の温泉の衰微したを再興しられた時から出来たのでモシその頃は白衣に緋の袴の装束で齒を染め殿上黨を描て高位高官の方々がお出の折に側へ出て琴を弾いたり歌を咏んだりした事さうに聞て居升(忠)成程夫でア、云ふ風をど氣苦勞もなく取々雑話の此方には處女お靜が夫の二階の客に附従がへる男と向合ひ解けぬ不審に眉を寄せ(靜)モシ清七さんとやら色々御深切に仕て下されまし

て夫に前夜は連れて居升者に御酒を戴き只今又簡潔に結構らしいお品を下されまして

○ハイ  
お志の  
程け誠  
に有難  
う存  
升が  
御主  
にはお  
目に  
ら老口  
奈良の  
井田大



二 郎  
云ふ  
お前  
で國  
には  
何い  
お交際の間とも存じません  
から情願はお持歸りを  
前なる折箱を押し返せど清七  
は聞入れおして打笑ひ(清)  
ナニ爾んな御遠慮は入らぬ  
事です主人もその中ね目に  
掛り升が只斯う仕てお出なさるる御退屈でせう私の方には色々草冊子も借つてあり升



ゆゑ讀みなさるなら持つて來ませう併し貴女が青春の幾つにおなりなさるですエ十六  
 で誠に咲掛の花ですナ併し花には嵐月に村雲兎角美人は薄命とか云ひ升からその積で  
 早う身を定めなさるが好しからう誘う水あれば行んと云ふた處で年老てからはモ一婚  
 は明しません。イヤ是は仕たり最前から讀んだ小町一代記が口から出てツイ餘計な  
 事迄喋りましたと云ひつゝ、も尙落着て煙草薫らし動かねばお静は愈々怪しみて最迷惑  
 に思ひながら尙疑を質さんと清七に打向ひ「静」只今も申し升通り卿の御主人が國重  
 どのお交際の如何いふ間で御座りまして又何をなさるお方ですかと問へば清七は例の  
 如くに笑ふのみ委細の告げせ「清」ソリヤ聞なさらいでる此度卿のお爲になる人で國重  
 さんがお歸になれば直ぐ分り升から何も疑ななさるには及びません「静」けれどもその國重  
 も今日は是非此處へ歸ると云ひなされたがモ一夕方になり升に何の音沙汰もないのは  
 如何したのです「清」イエ是も御心配には及びませぬ方一又お歸りにならん處で主人が  
 廻うは致しません「静」夫では歸りの程も確かならんですか「清」何も確かあらんと云  
 ふ譯は御座りませんけれど主人は國重さんと一通りならぬ間ゆる方一國重さんがお歸

秘歌集 廿

でなければ貴女を國重さんの處へお連れ申すと云ふて居り升「静」エ、如何もお話を聞  
 く程分らん様になり升が一体初めに國重とは如何いふ事から如何いふお約束になつて  
 四日目に歸ると仰しやつたのか委しう云ふて下されませと膝を進めて急問へば清七は  
 外にそらし「清」その事もお話し申して宜しいが夫より只今是へ参りましたは主人の申  
 付で今夜は少し遊の趣向を致しましたに就き二階迄來てお貰ひ申せと云ふ事で御座り  
 升ゆゑ夕飯を上らせにお出下されませ別に支も有り升まい是非とも情願ぞ。イエ御  
 辭退なさつては不可ません實のモ一その支度を致して有り升如何か御承知を。モシ黙  
 止つてお出でては主人へ返辭に困り升からは是非お出の返辭を願ひ升と迫込みたる彼が  
 辭にお静は益不審を抱き今迄掛けられし義理のみにあられを堅く心を行かじと  
 定め稍や怒を含んで「静」お進では御座り升が少し氣分も悪いからお謝絶申し升と言放  
 てと清七の押返し「清」サア爾うでも御座りませうけれど一寸でもお出下されませオ、  
 彼是云ふ中日も冷掛ました恰ど是から……エ如何しても否ですか夫なら私だと立上  
 つて無能にもお静の手を取り彼方へ引行かんとしたる折しも次の室より襖引開け入

来る一人ありた静は清七の手を振切りながらその面眺めて仰天し思はを其處に平伏しぬ

第十六回

お静ハ入来る人の顔見るよりハツと驚きながら差當つて爲すべき術もあらざれば此を逃んど立掛るを清七は袖引留め(清)コレお静さん私の主人と云ふたは此大倉健三様まんなざら知らぬ顔でもあり升まい(静)エー井田大二郎どの腹胃の名で此間から深切らしら仕掛たハ詐欺の罠……。(清)ドッコイ逃して堪るものかと逃出すお静を引戻す物音聞て彼方の椽側にて肩を挑せし忠平が遠たゞしう障子の蔭より駆込来て様子見るより打驚さ(忠)コリヤお嬢さん如何しおさつたのですモシ清七ツアん何せ爾ンな事をオ、二階の旦那もお出で、一体何とした……。エーお嬢さん兼て仰しやつた是が大倉ですか……。(清)袖の振合せも他生の縁とか云ふに殊に大阪で話しがあつて十里近くも隔る處で料らも同じ宿に泊り込むとはよく、免れぬ間でもあらうからマア落着て話を仕なさいと取つて握ゆるを爾らはさせじと忠平が身を換はしながら清七を排除んと

して立掛るを健三は手を指延て支留め(健)イヤ騒ぐにや及ばない畢竟今迄名を匿して手馴けに掛つたも話を穩かに極めんため夫に何處迄も片意地張るから此場にとんだのだ(忠)夫では何時かお嬢さんの姿を見て思ついた仕事ぢやな(健)オ、始めて此へ入込んだその時にチリリと見掛けたから尋ねる國重の居ないを幸ひ夫を道具に……。コウ老人の腕立は危険ないワと忠平を傍に突退けお静の袖を引攬みつ、(健)エ、彼是云ふに及ばない此女には金も掛けて別して母親も承知の上だから決して自儘な事はさ、ないぞとお静を引て己が坐敷に連行んとしたるをばお静は必死となつて振離しつ、東邊西邊と逃惑ふ機にバツタリ倒ける袂是幸ひと奥の間へ轉込むを遣らじと續て清七が飛んで入れば其處に居合す俠客めさし大の男が泰然として坐しながら聲振立て、「ヤイ此野郎奴何を仕やアがるとハツタと睨む意氣込に清七は驚ッとしながら(清)イヤコリヤ金の掛つた女で逃してはならんのです(俠)何だ金の掛つたと最前からも様子聞きさや好くない詐術を仕やがつて此時節にも頼着なく手込にでも仕さうなから餘所のこどだが際出してと思つた處へ轉げ込んだが女の僥倖決して手前等の自由にやさ、ない



から爾う思つて歸りかれと  
 突出すを次室に見聞ける大  
 倉は憤然として挨拶もなく  
 進入り座したる俠客を楯に  
 して後に匿る、お静をば引  
 出さんとなしたるを俠客はその袖引留め(俠)オ、お前さんが大倉か仮令誰であらうが  
 彼であらうが一旦駆込んだ此女滅多に渡して堪らうか夫に全体案内もなく他人の借切  
 った座敷の中へ踏込むとは人体にも似合ぬ馬鹿者(健)何だ這奴が入らぬ腕立を任せて妨  
 げするナと取らる、袖を拂はんとしたれど彼方は放さず其處に引撮(俠)へん腕立な



どとは昔の事今は道理づくめで渡されないので(健)ナニ道理づくめだと馬鹿な舌を敵かぞに渡すが好い夫とる彌々(俠)オ、渡さなけりや如何する(健)如何するも斯うするもあるものか金を掛けた上に親迄承知を仕た奉公人だ何處迄も渡さないと吐しや敵倒してゐる(俠)アハ、己こそ野蠻の猪長だ何せ道理を以て向かはないオ、何處迄も此女は乃公が引受けて話を仕て理窟の分らない中は決して渡さない夫とる其方に立派な理窟がありや警察署へでも行って訴へると云へば健三は彌々急立ち(健)言はして置けば機々なことを吐かしあると拳を擧げて打んとするを忠平が次より飛込みその手をグツと取留る此方には又清七が隙を窺ひお静を捕へて引立てんとす處を俠客は己と向ふ途かに突飛し折柄座敷の外に合客始め宿の男女等が如何なる事かと立集ふを見遣りつ、(俠)モシ誰方か警察署へ此次第を言つて下さい逆も道理の分らん奴ですからと云ふ聲に健三は俄かに尻込みして(健)コレ、爾う公然沙汰にする迄もない委しう話をすりや分ることぞツイ手荒に出掛けたは此方の誤の全体お前は此娘に縁由でもある人か(俠)イヤ縁故も何も無いのだが人の難儀を見過せんが固有で……(健)夫ぢやア此話

を引受けて道さへ付ば(俠)勿論筋道さへ分つた上は強て故障を云ふ筈もないが併し夫迄の處は余の手に預るから爾う承知しなさい何だ名前かソリヤ芝辻朝五郎と云つて大阪石町に住むもので明るい處でも暗い處でも名を變へる様な男ぢやありませんと膝の塵を打拂ひ泣臥すお静を慰めぬ

第十七回

お静は兄弟の因のため是は戀する痴情のため其意には異りあれど此に唐物町なる三宅の娘お花も亦只明暮に國重の上のみを兎や角と思ひ續け屢々書状を寄せたれどツイに一度の返言さへなき煩悩しさに此頃は日々の食事も味を覺ゆる何となく姿も俏れつ、亂る、髪と取上るだに懶しとて今日しも夏の初の黄昏頃隣の塙を吹越す風の涼しさは軒の忍草の葉にあらはれ固より狭き庭ながら咲ける杜鵑花の色映ひて目を喜ばす眺へあれ迄立出もせせ垂込め居たるその折柄表へ歸りし母の聲(辰)サア情願ぞお上り下されませ。コレ、お花今戻りました國重さんと御一緒にと聞くよりお花は驚く迄に喜びつ、走り出で(花)オ、國重さん好うマアお出なされましたサア此方へと奥の室に



八十八  
 勝入れ母子は只管茶よ菓子よと款待しつ、中にもお花は始終いそぐとして今しも母  
 の勝手に立ちし間に傍に摺寄り(花)貴君その後は如何してお出なされたのです。何せ  
 妾の方へはチツとも音信を仕て下されません、エ先度櫻の宮へ花見に行て料らぞお  
 姿を見掛ました夫で貴君は那の七助さんの處へお出なされたと聞きましたので跡から其

處へ尋ねて行くと警  
 察署へお拘引なされ  
 たさうで夫はく心  
 配致しましたがマア  
 マア無事にお歸りな  
 されたに結構で御座り  
 ました、エ、貴君  
 知らんと仰しやつて  
 る何も解り知つて居



升那の七助さん處にはお辭さんと云ふ娘があり升ゆゑ私の方にのみ脚が向んのですか  
 些とは妾の心にもなつてお呉れなされませ氣強いにものはどがありませと怨をれ只先  
 頃より無沙汰を仕たりと云ふ外に仔細を解せぬ龍二郎は不審の眉を蹙め(龍)コレ、  
 最前からお前の云ふ處はチツとも知らない上別して警務署へ拘引など、の夢にも覺  
 のない次第で聞く余が驚ろく程だ尤今年の一月お前の方を歸つてから音信を仕なかつ  
 たが是も尾張邊へ出掛けて居たゆゑで漸々跡月大阪へ來た處是も眞の六七日居る中俄  
 かに用事が出來たからその晩に演説會へ出る筈になつてあるのも捨置て大和へ歸つた  
 位だ(花)エ夫では……イヤ、矢張り貴君虚言を云ふて居なさるのでせう(龍)ナニ  
 虚言と云ふ様な事があるものか(花)爾なら貴君は櫻の宮で警察署へお拘引なされた  
 ことはないのですか(龍)念には及ばない跡月此地に居た頃は石町の芝辻と云ふ處に居  
 つたから疑ふなら聞て見なさい(花)爾う仰しやると櫻の宮で見たお方は間違か但しは  
 那の七助さんが……併しコリヤ何で有ると今更仕方も有ませんが貴君又何せ當地に  
 お出ながら妾の方には寄つて下さるんです(龍)ナニ寄付かんなど、云ふ譯はないが

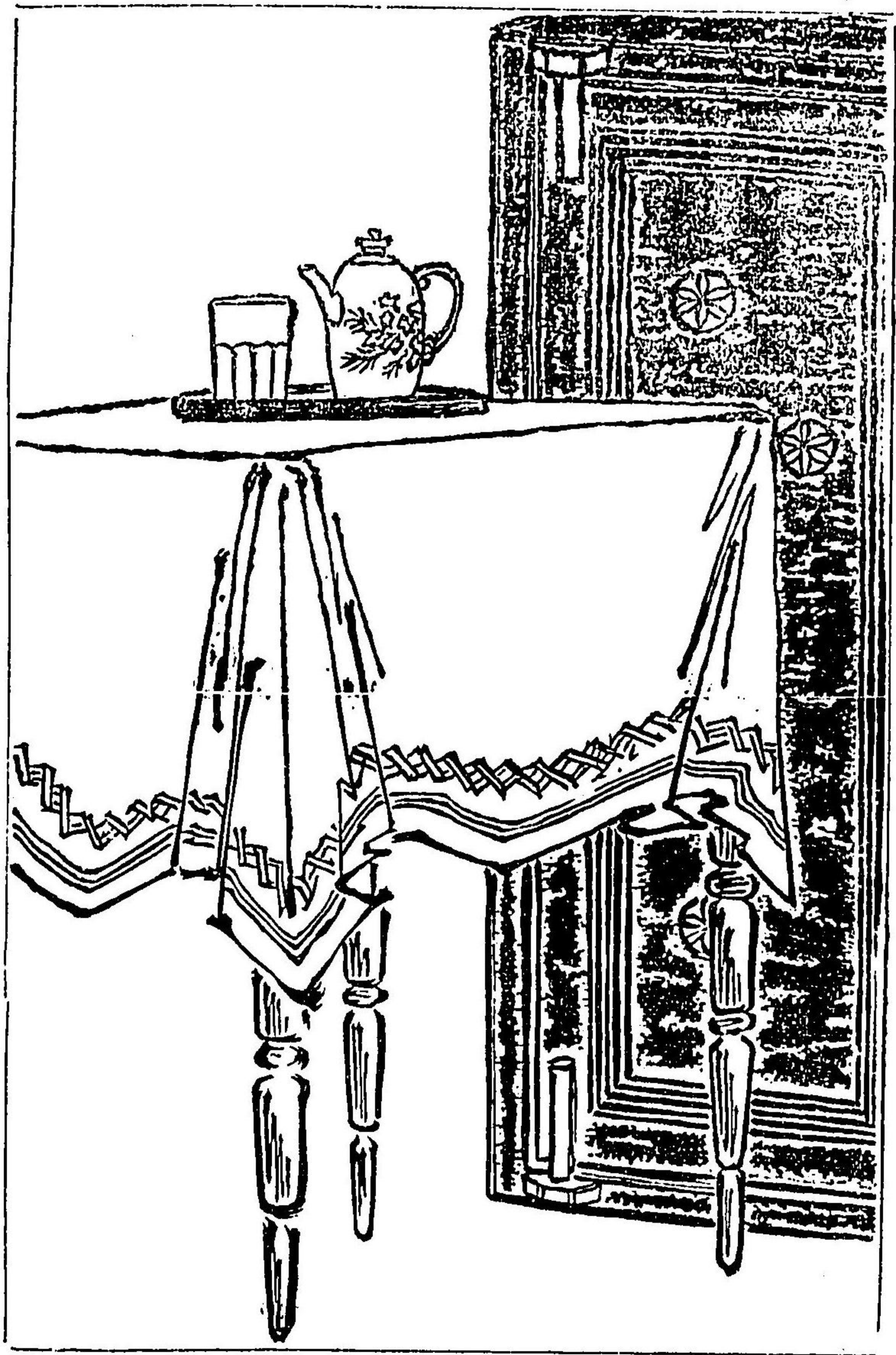
少し都合に因つてオ、今言ふた芝辻は同僚員の男が知つて居て一緒に泊ることに仕た  
 途だから悪う取つて貰つては困るせ(と云ひつ、懐中時計を取出し見て)オ、モー七  
 時二十分だナ。夫ではポツ、行かうかと其處に出したる紙巻煙草入を洋服の側袋に  
 入れなとして歸仕度をすればお花の驚き(花)エ卿モー歸らうと思ひなさるのですか未  
 だ堪てあるお話も仕ませんのに(龍)實は今夜黨員の集會があつて是非行かねばならな  
 いから引留められては迷惑だ最前中の島の公園でお辰リアンに逢つた時にも爾う言つ  
 たのを是非にと云ふから……イヤ明日は又寛くり寄せて貰ふが今夜は免して下さい  
 ……コレ眞途に今夜の會の懶惰す譯には行かない此間から有馬へ行て居つて夫より  
 播州中國へ出掛る筈の處を黨員に大事の相談が起つたから四五日前に俄かに當地へ歸  
 つて晝夜その事に掛つて居る譯だからと留めるお花の手を押し立んとしたるその處  
 へ母のお辰は押敷に二種三種の肴を載せて出來り國重の前に指置ながら(辰)國重さん  
 貴君何で御座り升。來るが早いか歸ると仰しやつて。コレお花お煙を漬て置た見て來  
 てお呉夫で洋燈も。モシ國重さんマア一寸飲つて下されませんか餘り急いで何も無い

のですいエ〜貴君明日來ると仰しやるけれど明日は明日の事に仕て情願寛くりなさ  
 つて下されませ實の娘も年頃で御座り升に何時迄身の片付をせむに置く譯にも参りま  
 せんゆゑ夫に就きまして貴君へお願ひなり御相談申したい事御座り升からと只管留  
 いるその處へお花は又早くも爛せし徳利を持來り共に進めて止まざれば龍二郎も流石  
 に素氣なく振切兼ね心ならせも元の座に復へり一盃二盃傾けしに母子の喜び最老實々  
 々しく待遇す情の濃やかにてお花が折々送る秋波の媚は龍二郎が歸心を止むる柳とな  
 り實に眉の斧の鋭さには鉄石の心も折かる、道理にや始めは淫さたる膝も何時か落着  
 き減んと今宵黨員の會議に赴く身なることさへ打忘れんとしたりしが兎角する中近き  
 邊の學校にて打出す時敏に耳傾け數々ふれば午後八時なり龍二郎のハツと驚き這は  
 後れたり如何にせん率々欠席をして病氣なりしと斷らんかと暫時右に左考へしが頓て  
 の事にイヤ〜時は後れたりとも到底出席せでは叶はじ斯く猶豫ひ居てハ彌々都合宜  
 かるまじと屹と心を決めつ、衣裳整へ立上りぬ

● 第十八回

今日午後の七時三十分を期して北久太郎町第一樓に開きたる自由黨派なる或る部分の  
 集會あり席に並居る會員の何れも少壯の人々にしてその數凡そ四五十名あるべく見  
 ぬ今や議事關にして甲説けば乙駁し言論動もすれば議題以外に駟出さん勢なるにぞ仮  
 に擧げられたる會長は専ら議席の整理に心を用ひ會議の体裁を維持せんことを勉めた  
 れど次第に紛雜になり行て今は腔術なさに及びたるに去る一人が斯くなる上は暫らく  
 議事を中止して酒飯の間に協議せば却て滑かに大体の決定を得ることもあるべきか恐  
 らく各位の腹中に此説にハ御同意なるべしとの動議にて何れも一笑を催しつ、頓て準  
 備の膳に向ひたる折しも此處へ常の活潑にハ似ず何となく悄々として入來る一個の壯  
 士あり是別人ならぞ夫の國重龍二郎その人なり會員は夫と見るより眼を注ぎ中よみ袖  
 引合ふて窃かに冷笑ふも有りたるが忽ち一人席を進めて會長たりし何某に打向ひ(甲)  
 只今議事中に鈴木君が智力金力相待つのお説も御尤ですが全体我々が共議組合は自由  
 黨の一部として成るべく粗暴輕忽の舉動を警めろの政論を社會に擴め自由黨全般の  
 主義に應援し他年國會開設の日に當つて我黨の光輝を揚げ恭しくも聖詔の旨に副ひ

奉らんことを希ふ精神ではありませんか又右の目的を達するには事の艱難は言ふ迄もなく假令身命を抛つる願みないと云ふ熱心ではありませんか然らば今迄費用の事を担当致して居つた泉州の佐田氏が俄かに其任を辞したりとて折角結びか、つた此共義組を解かうか否と云ふ迄に狼狽するとは餘としてるふがひない事で實に嘆息する外はないのですと云ひ掛るを傍の一人が打消て笑を帯び(乙)イヤ長田君は頗り又精神とか熱心とか論じ玉ふが我々の中にも下宿の娘などに懸戀して大事の會議にも遅刻する人があるから最前の如く一旦組合を解いて眞の熱心家のみにて團結せんと云ふ説が出て議論の沸騰した譯だないか(丙)オ、爾う言へば先度も平野町の演説會(丁)成程嬌嬌しい女が尋ねて來た事もあつたさうだナ(戊)ソリヤ一體誰の事だかお名前を拜聴したい子と云ひつ、ヨロ／＼國重の方を見返るにぞ國重の最前より彼等の様子と云ひ今又夫と云はねど我に當つけたる辭を聞き嚇と急立ちつ、も沸立つ胸を撫で口を鎖んで居たりしに彼方には又(乙)だが名前丈は氣の毒だから先或る人と仕て置うが先刻も僕が來掛けにその或る人が下宿の女主人に引込まれたを認めたので決して臆測の話ぢやな



いから困る世(丁)ても何だかお名前が分らないと聞榮がせんから寧ろ暴白し玉へ夫で若し我々の面目に係る次第もありや組合を謝絶せねばなるまいぢやないか(乙)大きに其處もあるから好まないがその名前をど膝立直したる折しもあれ國重の隣に坐したる年は尙二十七八と見えて威嚴は稍乏しく見えたれど容貌沈着にして面に温和の色を表したる一人が席を進めて辭を屬し(巳)イヤ其義の暫らく口外し玉ふナ今晚の會議には少しも關係のないのみか人の一身上に立入つての談話は宜しくないから止め玉へ……併し最前長田君のお説は未だその意を盡されなんだが全体今日熱心さへあれば金力の補助は費用ではない。故に今金力の補助を失ふも憂ふるよ不足らないと云はる、のですか(甲)イヤ本員として費用の道を必用ならせと云ふではなければ畢竟利益會社などを組立るとは格別の別ゆゑ費用と云ふも敢て多額なるを要せせ又元來我々は初めより金を頼みとして結合したるものでないから金力の有無に困つて熱心を消長してはならないと言ふ主意です(巳)成程利益會社など、は無論同僚ならぬは明だが尙是より此組合を維持して演說會に遊説に凡そ我々の主義を實行せんには多少金力の補助を假らね

をならない次第で殊に我々が來月一大演說會を開かんとすることは我全般の黨員は固より反對黨にも知られたる事ではありませんか然るに若し今是等に要する費用の出途を謀らば又全体に金力一途の事を外にして只匆々に斯る精神だから金力を頼まざるも主義を實行し得べし斯る熱心だから目的を達するに金力なきも可なりと云ふ如き漢としたる見解にて議事を了らば將來の目的は暫らく措き眼前來月の演說會をも開き難きに立至らんかと懸念致すのです其處で万或ひは斯の如き事あらんにハ嗤笑を社會に招いて我々自後世人に對して合すべき面目を失はんかと甚だ恐れますが諸君は果して如何なる御意見をもちなさるか若此外に御説明のあらば承まはらうと辭に力を入れて述べけるにぞ會員一向は顔見合し暫らく反對の説を吐くものもなかりしが頼て又一人が進出で(庚)成程君のお説は僕も賛成ですが扱てその金力の補助を得んには如何なる見込如何なる方法があるのですか其處等を充分承まはらない先には……と問掛りたる言に附て大勢が「爾うく其處が緊要の点だその見込がなけりや如何に實着らしい議論でも終に空論たるを免がれないと口を揃へて愕然たりしに此時國重は靜かに席を

進めて夫の會長の職を取りたる何某に打向ひ(龍)今晚播者は少し事情あつて出席延引致したから初めの議事の如何であつたか承知致さんのですすが到底只今の景況にては諸君の意も金力の補助を得るを必要とする説に傾きたる如く察しますから後來永遠の事は勿論差當つては來月開會すべき演說會の費途に充つる金調は此國重が負担で屹と用立て升イヤ充分目的のある事ゆゑ御安心なさい尤此席中……否世間には往々皮相に現はれたる所のみにて妄りに口喧ましく人の批評などを仕て實際の事には一向埒の聞かないものあり升がイヤ如何も正可の依頼にはならないのですと一座を見廻し言放ては何れも目を側て、此方を眺め今迄寂しかりし國重の座も俄かに衆人の献す盃にて埋まりつ、只管その盡力を依頼せしは最心地好くぞ見ぬにたる

第十九回

此に又處女お静は夫の芝辻朝五郎が俠氣にて迫れる難儀を助けられ今日しも大阪に歸來てその家に伴はれしが住居は勝手と共に三室にして二室ばかりの二階あるに過ぎざれど處柄逆眼下に滔々たる大川の流を見おろし對岸は天満の市街を並べて魚鱗を煙み

造幣局の烟突の上空に聳立ちて烟を吐きたる宛ながら黒龍の閃めき躍るかと疑がはれ左右遙かに眼を寓すれば網島野田の村里より中之島なる公園までも見ぬ渡り市城豪華の風光に漁村蟹浦の趣さをも一眸の中に集めたる眺望最も面白けれど愛事續く身の不幸お静は始終頭重げに萎る、を主人朝五郎は懇ろに慰めつ、朝モシお静さまモ一決して御心配なさい升ナ假令何處の人だと云ふ事が分らなくても粗器にする譯はないのですが別して昨夜からも云ひ升通り貴女が大和の松山さんにお世話なつて居なされるか方とは不思議な事もあるものでその松山さんは大阪にお出になる度私の方を下宿なさる事に極つて居るので御座り升から尙更貴女を悪うは致しません實は右の譯ゆゑ一旦の處は直ぐ大和へお歸りなさる様に執計はねばならない筈であり升けれど何分那の大倉より今日明日には是非何とか掛合つて來るだらうと思ひ升から其應對を詰て仕舞ふ迄は貴女が居て下さらないと不都合です尤も此次第は松山様の方へ早速手紙を出して置き升ゆゑそのお積で居て下さいませ(静)實に段々の御深切有難う存じ升夫はモ一お辭異論のある筈も御座りませんが妾一人でもなく忠平のどと云ひ此上ながらの御

厄介は何ともお氣の毒で……(朝)ナニ爾んな事に頓着はありませせん實の忠平を  
大和に歸して委細を旦那に話して貰へば誠に便利ですが是迄貴女のお身には段々故障  
のあつた事ゆゑ今忠平を歸しては不安心にも思ひなさらうし又有馬であつた事の  
體八にもなる人です……是より大倉より話しの模様にては入用の事もあらうと思  
ひ升のぞ併し昨日以來のお話しを聞くに假の爺御の大病と云ひ尋ねなされるお兄様  
は掛違ふて逢なされる事の出来な上大倉からは強て望を遂げやうと云ふ次第だもの御  
心配も無理はありませんがイヤ餘りな氣にお悪なさんな斯うして私が引受けた上は何  
處迄も萬事力になつて上げ升(靜)幾重にも宜しうお世話下されませ何分本町橋で危険  
ない所を摺脱けて夫から今の親爺と一緒に連立つて家はありながら立寄る譯にも行き  
ませんでその儘大和の方へ参りましたゆゑ少しの時蓄もなく何から何迄松山さんの  
お世話になつて目を過して居り升又同じお方を御存しの貴君の御厄介になると好  
く因縁のある事と存じ升(朝)オ、今のお話で思出しましたが本町橋で危ふい處を  
摺脱けたと言ひなされるのは四月廿六日の夜の事と處は橋の東詰で雨の降りさうな

時ではありませなんだか(靜)ハイ廿六日の晩で處も天氣も言ひなされる通りで御座りま  
した(朝)オ、夫ぢやア彌々思つた通りだが如何も不思議だナ。實は夜前も右のお話  
を聞いた時に爾う申さうと思つて居ながら外の話に紛れて云ひませなんだが夫ぢやア  
那の時跡を追掛けた假りの母御を取り留めたは外でもない此朝五郎です(靜)エ留めて  
下さつたのが……(朝)アイ那の日は少し人から頼れた掛合とかがあつて晝より家  
を出て船場へ行く途中で勿論その時は誰とも分らせ委しい仔細を知る譯もなかつたの  
ですが料ら老貴女の難儀な場に行合しましたから引留て様子を聞かうとするにお虎さ  
んどかの私の云ふことを聞かずに那の娘は金にするのぢやと狂氣の様になつて居られ  
るからコリヤ逃げる人を首尾好う走らすが好からうと思ふ中に貴女は隙さを逃延びな  
さつて姿も見ぬない様になりましたからその儘相手を突放したのです(靜)夫はマア那  
の時救助けて下さつたお方も亦貴君でありましたとは誠に思ひの外で御座り升と呆れ  
るばかりに奇遇を感じしその折柄忽ち表の方へオ、此方ぢやくと云ひながら兩個の  
男が入來る様子に朝五郎は忙しく立上つて彼方に出づれば入來し兩個は外なら老夫の



有馬に  
て大倉  
に附  
へる  
人の手  
代清七  
と唐  
町な  
手傳ひ  
聯安五  
郎にて  
彼等け  
碌々様



捲るせせり小口に  
腰掛て安五郎が先口  
を開き安 オイ朝五  
郎さんお前にや今迄  
逢つた事もないが何  
のお静の事又就ちや  
余は暫らく那の娘を  
預つた事もあつて今  
日大倉さんから頼  
て此清七ツアんと  
道で出掛けて来た  
その用事は外でも  
い有馬で話を就けて



お前から立派に返さうと云つたお静の支度料に遣つてある十圓の金の事だが如何ぢや渡して呉れるか(清)大阪へ歸れば直ぐ又埒明ると云ふたゆる今受取に來たから渡して下さいと憚もなく大聲に言出すを朝五郎は膝を進めて制しつ、(朝)コレ静にしないか有馬で爲る丈の話は仕て了ふて只金の事ばかりだから今更をしく出掛て來て喧ましく云ふにも及ばない金さへ出來りや此方から持して遣る積りだ(安)ソリヤお前の方に脚鞠なく金の工面が出來ると思や棄て、も置くがコレ去る處で聞て見ると今のお前の手元でなか／＼纏つて十圓の金を拵へるなど、は難かしいと云ふから斯うして出來たのぢやオイ有馬で随分立派な口も利て大倉の旦那を言込めて只金丈の話に追詰めたはなか／＼の手柄であつたが金の一段は口程にや行くまい夫共出來りや今此で渡して貰ふかエ何ぢや判然り返答せんのは工面が附かんのであらう夫なら寧ろ奇麗に話を元に戻してお静を乃公等に渡した方が宜からうせ(清)成程夫が一番好かりさうぢやコレ朝五郎さん然ら仕なされ。お前さへ今云ふ様に温和しう出りや金の催促は扱置て主公の方より相應な挨拶金の出る事あらうから是非安五郎さんの云ふ通りに……

と迫り込んだる辭を聞て朝五郎の憤然として聲を屬まし(朝)エ、黙止つて居れば様々の事を吐す奴だオ、今は有合せないが今夜迄には屹と拵へて渡して遣るワ何の十圓位の金だぞと言ふと外聞が悪いわいと斷然り言切つたる意氣込の最も凄じく見られたれば兩人の思はせ尻込して暫らく返す辭もなかりしが奥にはお静が最前より此有様を漏聞て忽ち起る心の疑扱ては此處の主人も肌身許すべき者にはあらせ今兩個との話しの様子は是迄聞ける次第と相違ある上辭を大倉との應對に假拵けて我身并に忠平を大和へ歸さぬも何か仔細のある事ならんかオ、那の十圓の金を大倉へ返した後は又難題を背掛られるのではなからうかと今迄は頼み切つたるその人も俄かに恐しき心地して覺ぬ身身の毛を竦立てつ、如何はせんと狼狽しぬ

● 第二十回

我家の中に只獨り手傳安五郎が火の無き火鉢掻きかして舌打しつ、熾寸摺出し煙草一服二服吸ふ處へとつかはとして歸り來れる女房お勢庭口より夫を見て(勢)オ、戻つて居てか割合に早かつたナ夫で石町の方は(安)エー爾んな事より火鉢に火もない様な事

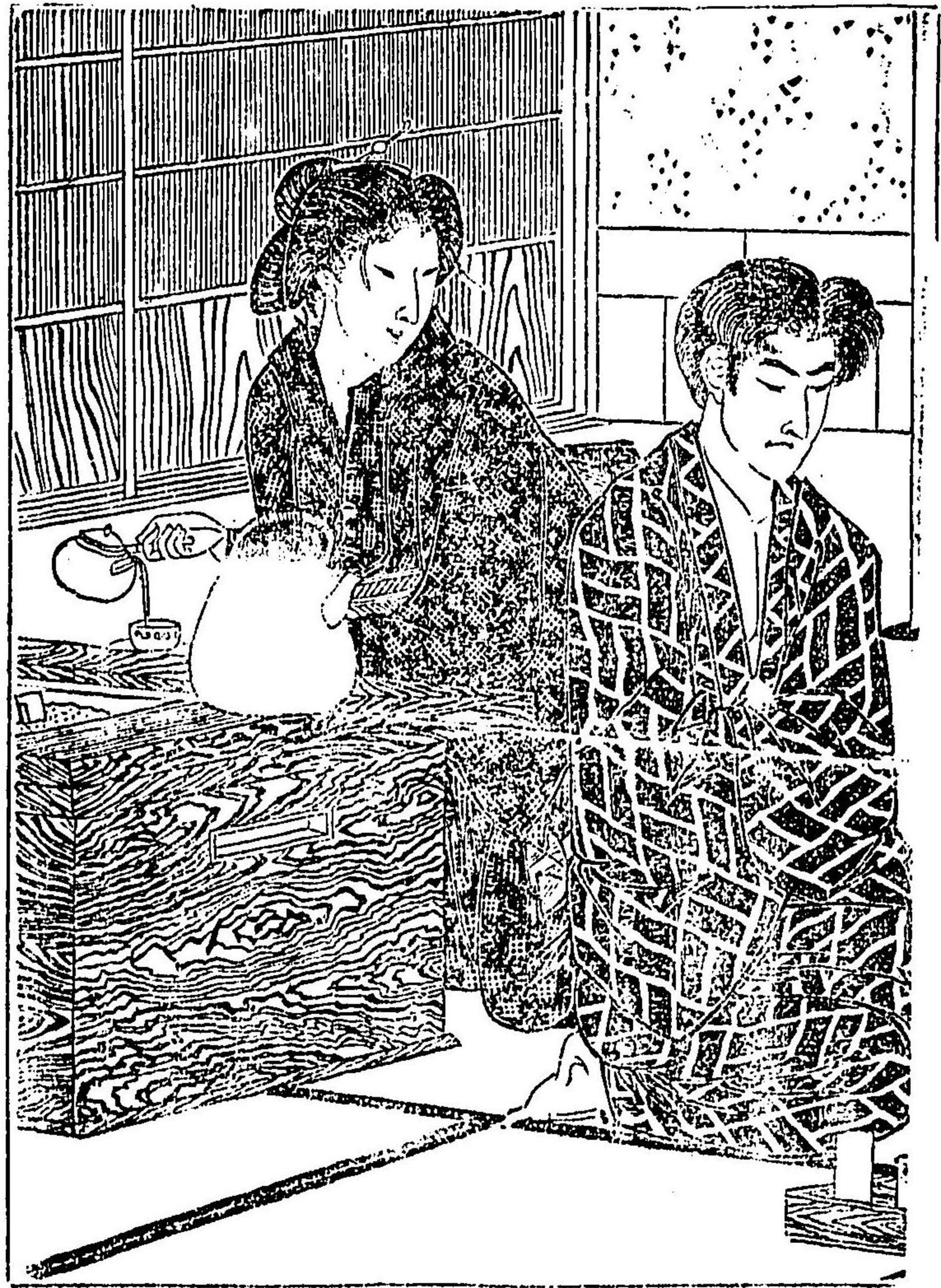
を仕て何處へ行たんぢや(勢)何處へ云ふて不足らしい。先度から喧しい天満の吉兵衛さん處へ今朝お前から受取つた頼母子の金の内入を持つて行たのであるがナ(と云ひつゝ、火鉢に炭添きながら)併し那の吉兵衛さんなかく難つかしい人で今も亦ドツサリと小言を聞て來たが何とかして那の方の負債は早う濟したいナ(安)ソリヤ云ふ迄もない乃公も段々工夫を仕て見たが何分先度お静を種に仕組か、つた一件はお虎婆さんが不意に横合から手を出して無茶苦茶に仕て了ふし出入先を頼み廻つても一向確かり取合ふて呉れる人はなし漸々廣田の源介さんに縋つて一旦お静の事に骨を折か、つたと云ふ麻で大倉さんから石鹼製造場の土木の内を受負して貰ふて此間渡した枕の金と夫から以來(今日とるに二度に拂ふた内入金)を融通したか精一杯で逆も急な事に(勢)けども今日は又お静さんの一件で家業迄休んで石町へ行たのでないか爾んなら大倉さんの方でもチツとの無心の聞て下さりさうなものでやナ(安)サア汝は爾う言ふが未だ彌々話が詰んでないから今言ふて今無心の利く譯にや行かんワ(勢)フン話が詰ると云ふの、彼方で渡すと云ふた金が出来んのか(安)イヤ出来んと云ふ事に極りや却て

話が面白うて如何かしてお静を此方へ取る應對の仕様もあるが那の朝五郎奴の内證の見透して逆も今金の工面は難しいと思ふのに最前も立派に今夜迄金調して屹度手渡すと云ふからマア一旦歸つて來た……ナニ金の催促に行て先が工面を附けると云ふを残念がるのが可笑しいとか。氣樂な事を云ふな世の中の事は皆斯んあるので思ひも寄らん意氣合の出來るものぢや。其處で那奴の事は汝も是迄聞て居る通り今でこそ子分の奴等に段々損を懸られたり不事が入つて乃公と一緒に窮々言ふて居るがなかく面の廣い奴で官衝向に出入して人足の御用などを聞き朋友の話では今度有馬へ行たのも去る官員さんから頼まれて彼地に湯治中のお人へ使ひに立つた事さうなから又如何いふ處より金の工面を附て來るか知れんゆゑ實は如何ぞして今夜の間に合はんやうに仕たいと思ふて居るのぢやと云ひつゝ、煙管をボンと打はたくその處へ表よりツ、と入來る朝五郎。安五郎は夫と見るより居直りて(安)サア此方へ上つて呉。流石朝五郎ぢや金の都合が出来て持て來たのか(朝)オ、金が出来たと云ふんだないが今日中と約束を仕たから(安)ハ、ア夫では斷りか(朝)イヤ斷りと云ふてもない話さへ分りや今

此處で(安)矢張り金を渡すのか(朝)ナニ貴様の家から出して貰ひたいのがあるのだ(安)エ乃公の家から……カウ馬鹿を云ふな何處の世界にか金の催促仕られたものが催促の仕人に物を出せと云ふ様な事が……(朝)マア黙止つて乃公の言ふ事を聞くが好い。出せどは外でもないお静さんの残して置れた品物だ(安)アハ、何を云ふかと思へば爾ンなものかソリヤ一枚二枚の衣類もあつたがお虎婆アさんが皆持つて歸つた(朝)イヤ着類ぢやないお静さんが此處に居た中借りて使



ふた針挿  
 の中に入  
 れてある  
 品を出し  
 て貰ひた  
 いのだ  
 安)針挿  
 の中にコ  
 レお勢何  
 か残つた  
 ものでも  
 あるか  
 勢)サア



那の娘に貸した針挿はその儘押入の隅に放下であるが何ぞあるかいな(朝)兎も角見て下さい(安)如何で碌なものぢやなからうが(勢)マア出して見ませうと襖を開けて取出す針挿朝五郎は膝を進め(朝)確か上の小さな抽斗にあるさうだから其處を見て下さいと云に随ひお勢は抽出し打翻せば絲屑小裂のある中より現はれ出る紙幣一枚紙面も殊に新らしき十圓札にてありければ是はと驚く此家の夫婦朝五郎は扱こそと打點頭さ(朝)ウン是さへあれば最前からの話も手間入らそその金その儘に渡すから大倉の手代を呼んで来るが好い。コレ爾んなに驚くことも入らないけれど但不思議な事にや此紙幣は品も變らそ大倉が先きに渡したものだせ(安)エ爾うすると兼てお虎婆さんが紛失なつたと喧しう言ふて居た大倉さんから貰ふた支度金はお静が奪つて居たのか(朝)イヤ奪つたのぢやない先度俄かにお静さんが此處へ送られて来たときに持つて来た者類の袖から出たんださうで如何もコリヤその日大倉から受取つた儘をお虎婆さんがチヨイと鞆筒の中へ隠したやつが袖に入つてあつたと見ぬるだど聞て安五郎の返さん辭む知らせ暫らく呆れて居る折しも又もや表より入来る一人誰かど見れば大倉の手代清七

にて(清)オ、是は朝五郎さんもお出か前の話は何ぢや斯うして来て居るのは斷りか(安)イヤ金が出来たせ(朝)今茲で奇麗に金を渡すから(清)エ、出来るとも……と口の中にて何事か吻さしは如何にも本意なげに見ぬにける

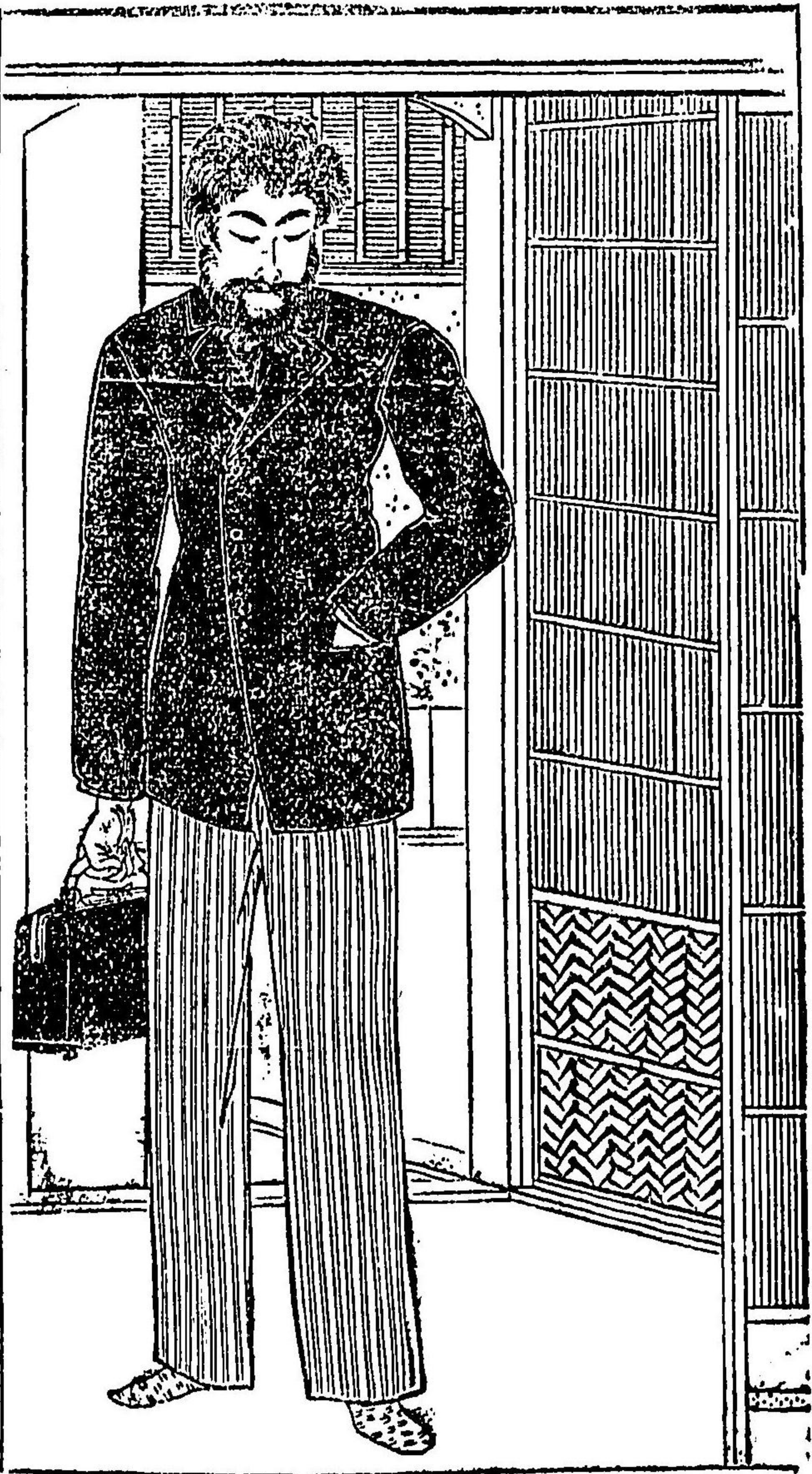
第廿一回

此に大和の國吉野郡唐戸村に住へる服部良一と呼はる、人あり家は固より裕かにて山も畑も多く所有して大勢の耕丁を抱へ年の頃は三十六七なるべく人品骨柄賤しからぞ生育よりの農人とも見ぬねと去進士族と云ふ肩書のあるにもあらそ性質沈着にして最も思慮に富み煩る人望もあれば兼て府會議員にも擧げられしと云ひ現に村會議員にて學務衛生などの委員をも兼ね常に人の出入も繁けれど但如何なる譯にや政黨にみし書生輩は道中門に靴を入る、も延れて正堂に上るは少なかりしとぞ夫は扱おき今日な人主人良一は先程より或る客人を居間に通して對合ひ最打寛いだる有様にて(良)時に國重君近頃奈真の景況は如何ですか大分久しく行さませんが定めて段々寂しくなる一方でせうナ(國)ハイ余は平常出歩行て計り居るので委しい事は分りません代りに表面

百十二  
 に現はれた處の模様は他所へ出て眼を新らしく仕て歸るから好く分り升が如何の日々  
 衰微の方で困つたものです(其)如何にも爾うであらうと思ひ升がイヤ何處も不景氣々  
 々々と云のみで實業の起らない  
 は歎息の至りです(と云ひつ、  
 續て出る辭を轉せし様子にて)  
 併し君と斯うしてお話するは  
 ……一年足らぬ……イヤ一  
 年半にもなり升(國)中の島の  
 自由亭以來ですが近頃大阪にお  
 出掛けの御座りませんか彼の地  
 も追々様子の変つた處があつて  
 中にも政黨の氣焰の頗る盛んで  
 一般に政治思想の發達する雨を



● 花 吹 雪 十 五



現はしたの何より頼もしい事です(其)夫は爾うと去年に拵へた茶園で今度始めて新茶  
 を取りましたが後で散步旁々御案内しませう(國)夫は結構です定めて培養にお骨が折

れましたであらう。目今有志家の政論に熱心なる豫じめ人民の政治思想を培養し國會開説の曉に……(良)無形の中に好結果を得て樂むのもその人の欲する所だが余は田圃山林に形のある品を收獲するが何より嬉しく平生の希望は全く此一邊にあるのです君若し實業に心を傾け玉は兼てより申す通り幾等かのお補助は何時でも(國)御厚情有難う存じ升が僕一己人を惠まる、所にて寧ろ公衆のために移されなば……と機會を外さず口を開き覺ゆる總身に力を入れ返答如何にとシツと主人の顔を見詰めたるに主人は左右を顧みて手を打敲き下女を呼んで茶を命じ囁て突然此方に向ひ(良)君は始終方々を遊歴し玉ふ中多くの大阪に居られるが下宿料は一ヶ月何程ですと意外な尋ねに龍二郎は驚きつ、這は失敬なりと心に怒れど如何にせん背後に黨員のため金力を返る依託を負ふて前には又此人に就き大いに望む所あるが故氣を忍びつ、辞少な(國)ハイ一ヶ月四圓五十錢より五圓迄です(良)ハ、ア成程五六圓金を一ヶ月に費し得る融通さへすれば晝夜千万言を政論に發して餘りある譯ですナ。シテ見ると我輩如き幾許の不動産を辛苦經營して僅かに一地方の經濟か一郷一村の利害を請し得るとは資

本得益の大小に甚だしき差ひあり升ナ(國)君若し其處に遺憾あらば我政黨に入り玉へ縦横の辯時に危禍無と申されぬが一般の人民をして他年庶々たる立憲政治の下に鼓腹せしむるは樂の尤も勝れたものではありませんか(良)イヤ人民あつて政治ある譯で殖産の業は國の本に論なくして取る直さを文明の花は鋤を揮ひ算盤を運らす中より咲くものです(國)成程君がその見識を以て實業に取掛らる、め結構で兼て又一種の議論を持つお人とは承知致して居升が併し今日の時勢。政黨の團結は最も有志者の熱心すべき所ゆゑ少しは政論にも身を委ねなまつて宜しからう……ソリヤ縦ひ御閉眼がなくと一臂の力を貸して下さいならば夫で重疊です實は僕が今日出たのも此事を願ふ積で(良)イヤ君の胸中は好く分つてあるのです。一體君にも似合はない何せ辭を迂遠くせお金力を假りたいと判然言ひなさらん(國)爾うお察しがある上は何をか申さん只我政黨のため且は僕一身のため將來結黨に要する費途に就きまして御相談を願ひたく祝ては又差當つた入用のお取替を御依頼致したいのですが情願か御承知下さるまいか實に僕生涯の懇願ですと膝を進めて熱心に問掛しも主人は冷笑ふて取合を余は兎角政黨に

就ての談話には耳が遠いのですから如何に君が言を盡されてもその事はイヤ言ひ玉ふな無益です(國)夫では到底聞ては下さらないか(真)如何にも左様です(國)如何も聞かない人程嫌なるものはないものだ(真)オ、無縁の衆生と諦めらるゝが宜しからうと言放せば國重は勃として面色變ゆる彼方には主人は莞爾り笑ひながら(真)併し今に夕飯が出来升久し振りに余の手作りの野菜で一盃酌うぢやありませんかと又もや手を打敲て下女を呼び何か悄悄言付るにも拘はらる國重は斯る様子に愈々怒を含みツ、と座を立ちその儘暇を告げて退でける

● 第廿二回

頼む木の下雨漏りて心も濡る國重が今日大和より大阪へ歸りながら扱てし何處に脚を向くべしとの目的定まらねば人力車に乘らんる方角立たせ只茫然として松屋町を南より歩來しが稍や思定し所やありけん農人橋通に差掛りて忽ち西の方に瞳を曲げ十歩許る進みたる折しも對頭より脚早に來る一個の壯士國重の指條向きて氣づかねと彼方は早くも夫と見て(壯)イヤ國重君何時歸つたのだと聲掛られて初て頭を擡げ(國)オ、

中山君……何時と云ふて今歸つた處で未だ何處にも落着かないのだ(中)夫で彼の服部どかへの金談一條は調無つたか(國)イヤ如何も困つた次第で(中)フヤ出來ないカリリヤ困るナ(と眉を纏めて暫らく辞なかりしが頓て溜息吐て)其處で君や別に目的がある譯か甚だ懸念だ(國)サア外又好い見込の先が無いから實に困難を極めて居んだ(中)ソリヤ爾うだらう此間第一樓で僕が預讀より君が資金を借る一事を負擔したから彼の折の集會も頗る好都合と局を結んだが扱今の話しでは眞當に困るナ若し目的が達しないでは君の名譽は忽ち……(國)左様サ一身の事は暫らく措て我組合の運命にも關係するから(中)君が大和へ立がけの話ぢや必らず出來さうだつたが……併し今爾んな事を言つても初まらないア、何ぞ別に好い先がありさうなものだナ(國)斯ういふ時に憂を分つて呉れるハ只君一個だ如何か又考がられれば云つて下さい何れ今夜でも君の處に行かう(中)今と云つて思案も出ないが兎も角一緒に來玉(國)イヤ僕は是からチヨイと(中)何か又少しの目的でもあるのかナ(國)逆も將來の處迄は出來ないにせよ差掛つて來月の演說會の費用丈でも話して見やうと思ふ先が無いでもないが實ハ甚だ好



まない事で罷  
は、最期の策  
零だ(中)ア、  
爾うか……  
併し随分盡力  
し玉(一國)此



場合に些少の階位は言  
つて居られないが……



如何又しても(中)眞に  
氣の毒だ子(一國)夫ぢ  
や中山君(中)何れにせ  
よ後に來玉(一國)ヨシ  
必ず尋ねやうと首捨て  
、此に袂を分ち進まぬ  
脚を曳きながら橋を渡  
りて濱通り曲灣の方に

入込みつ、到着しは何方なるぞ是外なら老夫の唐物町一丁目なる三宅お辰の家なりし  
が頓て國重は表の寶戸を引開けて家内に入れば其處に居合す娘お花此程より日夜只此  
人の上のみに心惱まし居たるなれば國重の姿見るより飛立つ許に打喜ひ早くも延て奥  
に通せば母のお辰も出來り(辰)貴君先夜は必ら老妾の方へお歸りを存じて居ましたに  
到底の儘で……(花)那の晩も大体待つた事ぢや御座りません(辰)一体此二三日ハ

何地にお出でなさつたのですか花も妾も門前に靴の音がする度に貴君かと思ふて居たのです(國)夫は如何もお氣の毒だつたその代り今日は少しお話もあれば寛つくり遊せて貰ひ升(花)オ、左様ですかと面に現はる、喜の隠すに由るなかりしを母は見返り打笑みつ、(辰)恰ど今日は仕事も暇であり升ゆゑ情願緩々お話下されませ一寸お茶でも拵へて來ませうと立ち掛つたるその折しも表に音信る、人の聲お辰はその儘立出しが忽ち聞ゆる彼方の談話(辰)オ彌兵衛さん何ぞ御用で……(彌)イヤ何ぞ御用と云ふて此間からの一件であるが先方は如何でも期うでも成る様に話を附て呉れと云はれるので……併し立ちながらでは都合が悪い一寸御免と牀上にあがりし様子なりしがお辰の澁々煙草益杯出しつ、(辰)サアその事で御座り升が此間も申した通り妾の方の娘は少し考へが御座り升から入婿は致しませんハイ外へ嫁入らす積で家は妾の姪又繼すのです(彌)サア其處をお話するので彌々貴女の方では外へお出しの事なら入婿の持參金を嫁取の支度金に振替へても宜しいので勿論先方の御存じの通金に不自由のないお家ゆゑお花さんを引取つた上の直ぐに婿さんを分家さすと親御のお話もあるのです

(辰)其處迄の御懇望は誠に有難う存じ升が何分お話は……(彌)オ、貴女が爾う言ひなさる仔細も御近隣の風説を聞いて凡そ察して居升がモシ貴女の娶あはさうと思ひなさるのには兼て此に下宿を仕て居た書生の様な人でせうがナ併し好う物を考へて見なされ是と極つた役も商賣もなしに一年中ブラ／＼仕て居る人を婿にして未始終の見込があり升か(辰)イヤソリヤ又妾の腹もあることですから(彌)マア聞きなされ兎角ア、云ふ連中は資本のいらん口をかり上手に敵て一寸見の智慧もありさうで政黨ぢやとか國會ぢやとか大きな事ばかり云ふて居るが身体には一文の儲めあうて。イヤ、エ國の政事處か其身一つが暮し兼如何やらすると金の無心を言ひたがるものですと最前よりお辰が心を奥に兼國重の耳に入りてはと氣を挑みつ、言ひ消さんとなしたれど彼方は少しも頓着なく尙も辭を續けて(彌)如何してもコリヤ余の言ふ方に乗替なさるが第一お花さんの身のためぢや若し迂ッかり那んな書生さんに遣つて見なされ御先代から持傳へて斯うして結構に暮して居なさる身代も何時か没なつて仕舞ふ様な事が出来升と憚りもなく言ふ辭を此方に漏聞く國重は胸は釘思はせ背に汗を流せしがお花の聞くに聞き

兼てか腹立ちさうに座を立つて次の室より母の袂を密と取り強て内に引入れしに早國  
重は歸支度して勝手に出で靴履しめつ、母子の驚留めるも聞かぬして俄かに用事出来  
たりと云ふ辭さへ匂々に何處ともなく出行さける

● 第 廿 三 回

近頃江戸堀に住居を定めし夫の大倉健三は根元の配劑法は何處より得たるにや確なら  
ねど龜鶴延齡丹とか云へる賣藥を仕始めその傍に石験の製造業をも開かんとの心構  
をなしその場所を北野邊に建築中にて今日其上棟の式を行へる祝賀に迎知る人々を招  
き正午より酒宴を催し、が其夕方には次第に客も散じ今は取持方に頼まれし例の廣田  
源助のみ居殘れるを相手として主人健三跡座敷に盃傾々つ、(健)時に今日は貴公の  
幫助で床の飾付万端都合好く行つて殊に辯口旨く取持つて下さつたから客入も大壯滿  
足の様子だつたが例の櫻の宮の花丈は……(源)ア、又お靜の一件ですか。如何も  
大不手際の大失錯此間からツイ御無沙汰を致しましたも那の事の面目なさど又一つは  
(健)面倒を避けたと云ふ譯だらう(源)ナニ滅相な面倒など、如何して爾んな事があ

り升ものか商賣用が急しいからで御座り升(健)多用多忙は無沙汰を辨解するの定文言  
餘程古いぢやないか(源)是は仕たり何も爾う追つ詰いでも宜さ、うな實に貴君の口に  
は往生仕升併し夫程仰しやる辨舌がありながら有馬で石助の朝五郎とやらに脆う遣込  
られなさつたの如何したものです若し私が居りや素手では歸りません屹とお辭を遣  
て戻つて来るものを惜しい事でした(健)アハ、如何に商賣柄だと云つて私が居りや  
と云ふ様な古い言種は受け悪いせ(源)何ぞと云ふと商賣を引會に出されるの困つたも  
のです(健)イヤ踏躓は措て有馬の一件は畢竟彼奴等を相手にして彼是事を荒立て、今  
折角當地で商賣を始めやうと云ふ矢先に不人望を取つては何かの妨と思やこそ始終穩  
かに話を仕た譯だがコレ源助さん尙此後の處を何とか仕様なからうか實は那の手傳  
の安五郎も是迄二度も遺損ねた代りに何でも一つと云ふて居るが貴公もその積で骨を  
折つて下さい。サア一つ行かうと盃源助にさしたる折しめ次の室より下女が手をつか  
へ(婢)主人公。最前から店にお出のお方が是非御主人にお目に掛りたいから何時迄待  
つても宜しいがモ、お客さんもお歸りなさつた盃梅だに何んの沙汰もないは若や忘れ

て居なさるかも知れんゆゑ今一度然う言つて呉と仰しやり升(健)エ、尙居るか懶惰い  
 奴だト何とか歸る様に言つて見て呉れ(婢)ソリヤ今も爾う言ひましたがなかく動て  
 ぢや御座りませぬ(健)チヨツ困るナ。併し逢はねば何時迄も歸るまいから四疊半へ通  
 して置け  
 と言付て  
 頓て彼方  
 (立出る  
 に訪來し  
 男も下女  
 に引れて  
 入來り初  
 對面の口  
 散手短か



に演べ了  
 りて膝を  
 進め(男)  
 御多忙中  
 御面倒を  
 願ひまし  
 たが實寸  
 今日貴君  
 に紹介を  
 致し呉れ  
 た村田よ



り尙此書面を貰つて來て居るのです是には僕の出た趣意も察認めてあらうと存じ升か  
 ら御覽下さいと云ひつゝ、懐より一封の書狀を取つて指出せば健三は不勝々々手に受取

り封押切つて讀下しながら漸次に氣色を損じつ、終に至つて側に抛棄て彼方が何か言  
 出さんとするを押止め(健)イエ中山さんとやら成程此書面にて御來意の好く分りまし  
 たが如何もお話は出來兼升(中)デモ尙一應僕の申す處をお聞き下さい(健)イヤ余も當  
 地へ來たに就て段々交際も廣めたいのですが政黨杯と申すものは商賣上に頼と用立  
 たを謂はゞ摺違ふても損の行くもので已に此通り初めから金の無心……オ、是は粗  
 勿貴君も自由黨の方であるに失敬な事を云ひました併し兎角余は思ふ丈を言つて仕  
 舞ふ性質ですから腹を立てても如何かお歸り下されたい。ハイ最前からも御承知通り  
 今日は何分客來で取込んで居り升ゆる長うお相手の出來ませんと最も不敬な待遇せど  
 中山は落ついで(中)アハ、君の聞たにも似合はせ願る見聞の狭い事を言はれるお人  
 ですナ今日は商業をすれば逆名望を世間に賣らねばその品物も亦賣れぬ道理察るは取  
 ると云ふ事を御存じないのですか殊に同じ自由黨でも僕等は別に一つの組合を立て、  
 専ら輕忽過激の所爲を避けて眞實政論に熱心なるものを團結致す目的にて追々人数加  
 はつて他日強大なる勢力を占めるは目に見えてあるのですが料を目的に致して居つ

た費用に差支を生じ就ては黨員中にも最も僕と親密なる國重龍二郎と云ふ男が其の金  
 額を担當して……オ、貴君國重を御承知と見ゆるナ……夫で其國重が段々盡力致  
 した處如何も思ふ様に行きませんから御無心を申すのですハイ若し此事が遂げられない  
 と一身の名譽も夫が爲没くならうと云ふ場合で實に看るに忍びないのですから如何か  
 御再考を願ひ升と事情を述べて云ふ辭を熱々聽て健三は頻りに點頭さ(健)ナニ國重氏の  
 全く知らぬ人ですけれど成程此前から演説會などの廣告に折々名前があつたのですナ  
 ……一向今迄夫とも氣づか……イヤ爾んな事は如何でも好いとして確か那の人に  
 は妹がある様に思ひ升が然うですか(中)ハイ兼てより分れて行方の知れない兄のある  
 様にも聞て居らのですから或ひは尙妹もありません(健)ア、左様ですか夫では最前か  
 らお話しの際第おれば(中)御承知下さり升か(健)大体の御懇談は承知致しました  
 (中)是は、早速の御承諾有難う存じ升然らば差當つて二百金だけお取替を(健)如何  
 にも承知致しましたが何れ國重氏にお目に掛つてからと云ひ掛つて暫らく何か考(一  
 イヤ、夫にも及びません此話は貴君が村田氏から紹介にてお出なされた譯ゆゑ後程

村田氏に逢ふ筈の用もわり升からその時好くお談じを仕て出金致しませう(と云ひながら又々何か考へて)一寸お待ち下されませ夫に就て相談を致すものがと忙しく立上り以前の坐敷に走歸り今尙手酌に盃傾け居る夫の源助の傍に立膝しつ、耳に口寄せ何事か聞けば源助は忽ち撲と手を打つて(源)ソリヤ最も妙です待てば甘露の雨とやら(健)爾なら彌々貸すことに仕やう(源)併し今度は喰違のない様に(健)夫は勿論だが併し金を渡した上の都合で今一度貴公を勞したい子(源)ア、又……。○ではない精々遣ませうと点頭けば健三のホト〜喜びつ、脚下なる盃洗蹴かけしに氣もつかせ再び小坐敷さして走行さしは最粗勿には見ぬたれと胸の中には如何なる思案のあることにや測兼たる次第なり

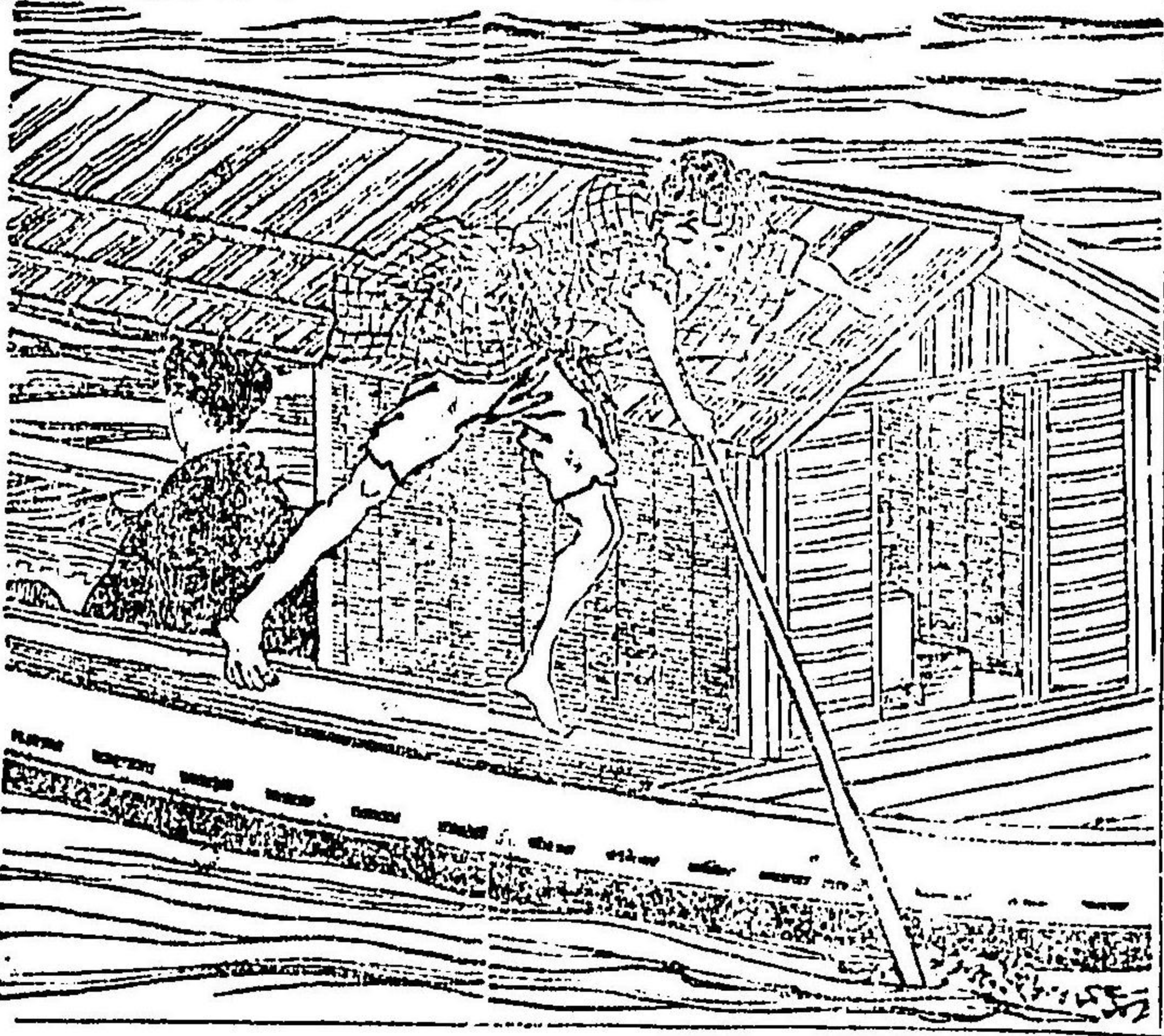
● 第廿四回

櫻の宮の花は疾散失せて今は新緑の蔭も老ひ午時は暑さを厭ども夕日傾く頃よりそよ〜と吹く川風の最も肌によければ尙納涼の時には早ければ遊船の往來も少なからで夫が中にも最前より殊更一艘の投網船を引連れつ、備前島邊り川崎造幣局の濱邊杯

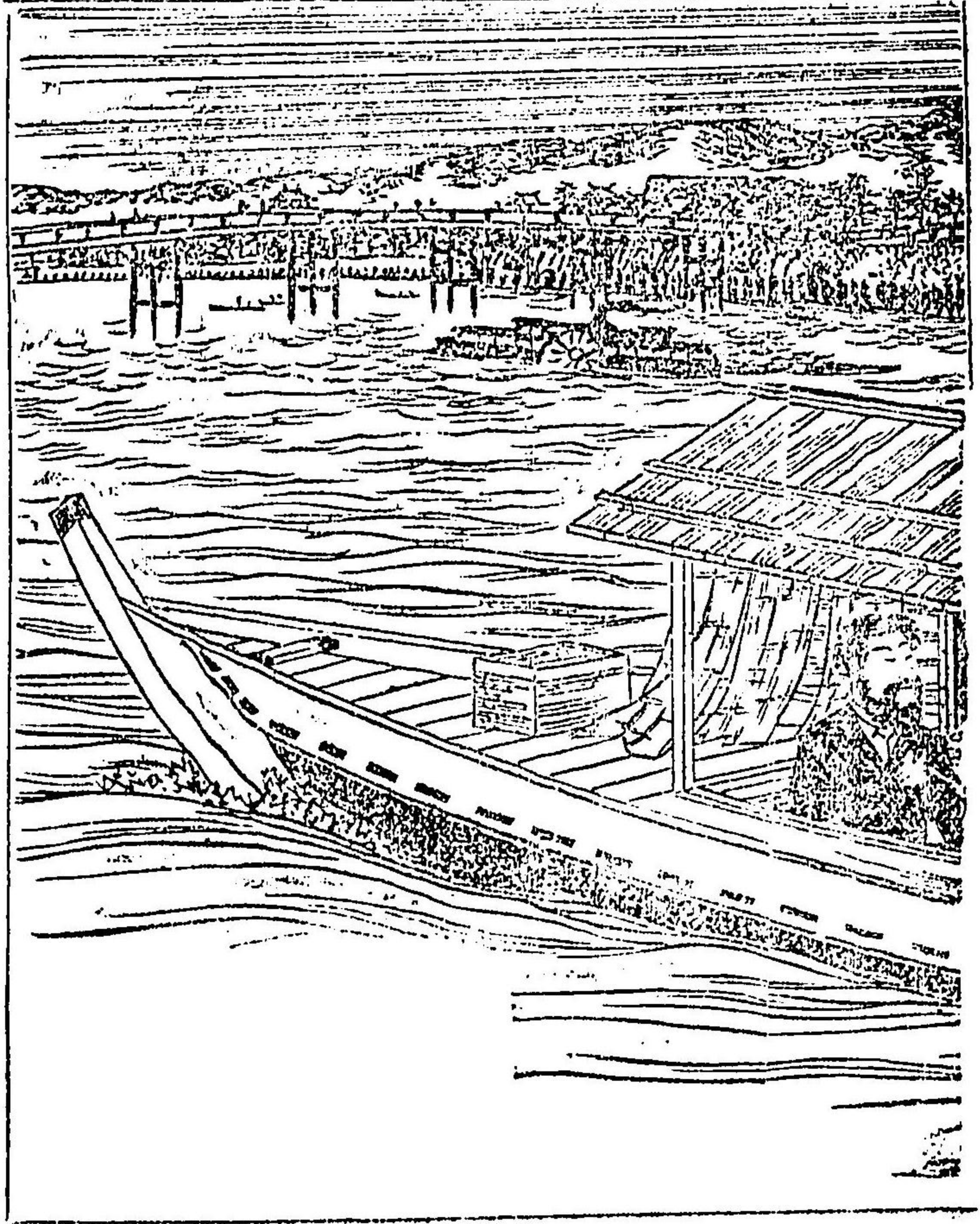
● 花吹雪 十六

を東首西首と漕し廻れる小屋船あり中なる客は兩個にて是なん國重龍二郎と大倉健三その人なりけるが今しも夫の投網船にて大きやかなる鯉打入れたれば其處に乗りたる廣田源助が躍上つて喜びつ、此方に向ひ(源)モシ廣田の旦那大したものが取れました何にしても前兆が宜しいせはと云ふ……ドッコイ危険い……畢竟此廣田の指圖が好いからですコレ〜船頭さん爾う動搖しては如何もならんイヤ流石の船將も閉口ぢやと履踏く脚を屈縮る姿を眺めて國重之笑ひながら健三に打向ひ(國)如何も今日はお蔭で愉快な遊を致し升昨日迄は彼の一件で必死と心痛許り致して居つたのですから實に一段面白い様で御座イ升(健)イヤ恰も催しを致して居る處へ料らぞお出下さつたのでお伴した迄一向何の御馳走もありませんが御覽くりお遊下されませ(國)有難う。併し親友の中山から突然御無慮を申した金子調達の事を早速御承知下さつたのみならぞお禮 旁上つて却て此御懇待に預るとは如何にも恐縮です(健)ナニ以後役員方にも御交際を願ふ手始めと云ふもので御座イ升(と云ひつ、遙かに源助をさし招き)オイ今の獲物で何か一つお下物を……エ今一綱ぞか。爾う懇張らせと船を此方へ寄なさせ

い(國)ソリヤ結構ですな最前から色々  
御馳走に預りましたが如何か早う頂さ  
たいものだアハハハハ、(健)ソレ國  
さんもア、仰しやるから早う……(源  
エ氣の忙しないお人ぢや。ナア船頭さ  
ん今一番此で打つと二三匹一緒に取れ  
るに違ひないのに……チヨツ仕方が  
ない彼方へ寄せて下さいと云ふ中船は  
早く屋船に摺寄れば源助は取りたる餌  
を引提げつ、此方へ乗移り尙見せ術か  
して船頭に料理を頼み置き健三の側に  
坐りて馴々しく(源)モシ國重さん一つ  
頂させさ確かそのお猪口は最前私が



細船へ乗つた時  
からその儘ぢや  
ありませんか。  
ア、盃洗に明け  
なとして何で御  
座り升(國)イヤ  
如何も大壯辭ひ  
ました(源)ナニ  
今頃から爾んな  
事を仰しやつて  
は不可ません。  
コレはくお附  
を勞して恐れ入



り升ハイ私は伏見町で骨董を商ふて大倉さんには平常お出入致し何かのお世話になつて居り升ハイ〜至つて汚穢しい狭い家では御座り升が店の隅に一寸茶室擬似のものも拵置きましたゆゑ御遊歩の節にでもお立寄下さり升なら粗茶位はさし上げ升何分にも是を御縁とお心易う。オ、御縁と云へば誠に不思議な事が御座りましてハイ外でもありません實は貴君のお妹御とも存せ先達より此大倉さんが……(健)コレ〜爾ンな事を今日初めてお心易うなつたお方に申すは甚だ粗忽だ(源)成程コリヤ誤りましたかモ一言出して今更取返しもなりませんから寧ろ何も歎かお話し致さうぢや御座りませんか(國)エ僕には全体から爾ンお妹などはありませんが一体夫が如何致したのですと眉を擡めて怪み間に源介は打笑ひ(源)貴君何もか隠しなさるには及びませぬ成程今日之處でい未だお曾なさらんか知りませんが兼て櫻の宮の七助と云ふ男の方に居られました折料らぞ此大倉さんのお目に留り夫から此間には有馬迄貴君を尋ねてお出たさうでその時恰ど又大倉さんが同じ宿に泊り合して居なかつたから兼て御容貌と云ひお氣立と云ひ懇望の至りより如何かして手に入れたいものと。アモシ必らぞお腹立下され

升ナ實はその節は貴君が斯うして立派な政黨に入つてお出なさるお方杯とは一向心づきませせその上伴に附て居りました手代の者が只主人の爲と心得まして如何か失禮をお話も致したさうですがハイ其時は何の體もつきませせ是る泊り合はした石町の芝辻朝五郎と云ふ男が引取つて只今も尙お妹御は朝五郎の方にお出なさる様子で御座り升(國)フン夫でその女の名は何と云ひ升(源)ハイお静と仰しや升が只今も申す通り何分大倉さんは始から貴君のお妹御と知らせ一圖に懇望しなさる處より今日になつて見れば甚だ失禮な事もあつてれ氣の毒でならないが國重さんのお妹御と云へば愈々思捨るとは出来せ夫よ就ては幸ひ無妻でもあれば改めて立派に婚姻の御相談を願ひたいものだとお話もあつた次第で御座り升ハイ〜御當人を前に指置て斯様に申し升と如何らしう聞かせせうが大倉さんはお身柄も好しその上貴君が御心配なかつた金子も今云みて今お出しなされるに差支ない程の御身代情願お妹御にお逢ひの上宜しうお諭し下されまして一日も早う御婚禮の出来る様に……サア今迄のお話を致せばお顔色をお變なされる御尤とは存じ升が話り何事も執心の餘からで決して悪がせに仕られた譯で



ありませんゆゑ機重にも以前の事は取捨なさつて今改めて此話をお聞取り下されませと意外に出でたる話の次第に國重の只管 鶴呆れ夫のお静が腹變りの妹なりとは夢にも知らざる事ながら只七助と云ふ名前には聊か記憶のし所もあり夫に就ての大倉が始め止めし辭にも似せ源介の言ふに任し傍に在つて知らぬ顔して居る様に胸の中も凡そ夫ぞと察しられ正直一徹の心には甚く彼が心術を憤り已に聲を罵まし言罵しらんとなしたれど又俄かに思變へ何を云ふにも今の我身は彼に恩あつて特に借りたる金は今朝早く黨員の會計主任に手渡したれば今更如何とも詮術なし兎角此處は忍ぶに如何とシツと胸を壓へ(國)如何も今のお話僕に取つて一向覺の無い事ですが兎も角その朝五郎とかの方を閉合した上何分のお返辭を仕ませうと開き兼たる口を開いて答へつゝも尙心中は怒りに堪へせや頓てツ、と舳先に立出で、折柄船の網島ある岸邊近くにあると幸ひ何氣も見せせ船頭に意を傳へ船を彼方に寄せさし閃然りと陸に跳上りて忽ち後を振返り帽子を取つて大倉に駈禮施し昂然として立去りぬ

● 第廿五回

此に又石町なる俠客朝五郎が許に身を寓する處女お静はその後六七日の日を送り主人朝五郎が深切に乾兒等にも含して國重龍二郎の所在を彼是搜れども只大阪に脚を止めし摸樣のみは見ぬながら今に何處とも知れざれば夜に日にその事の心懸りなる上に一日二日と口を重ぬるに就ては又長く此家の厄介となる事に氣を兼つ、最前より女房お徳が湯に行ける不在を守り一室に在つて何をがな手助にと火鉢の廻りを清らかに掃除しつ尙も軒先に干したる衣を取入れて畳みつけなぞする處へ忙しく歸來れる主人朝五郎首筋廻りの汗さへ拭敢へせツ、と此方に通(朝)オ、貴君お獨ですか實は今國重さんのお出なさる先の事に就て急いで歸つて來ました(靜)エ、夫はマア嬉しい………爾して何處に居るので御座り升(朝)イヤマア一寸私の言ふ事をお聞下さい兼て貴女のお話から若やと思ふて此間尋ねて参りました唐物町のお辰ツアンの方へ今日も亭に寄りました處一昨日の午後又國重さんが妾の方にお出になつたと云ひ升から(靜)オ、誠に好い都合で御座りましたナ(朝)處が何か都合でもあつたと見ぬて落着て話せせ頼て何處へか(靜)エ又行方が知れん様になつたのですか(朝)イヤ夫から那のお辰ツアンの

方でも氣に掛て段々所在を捜した未國重さんの平常お心易い中山と云ふお方の下宿へ尋て参つた處其宿での話に國重さんは一昨日の夜から私の方にお泊なされましたけれど今朝早くより外にお出になつて如何か又夫なり遠方へ御出立なさる様子に聞て居ると云つたさうですが如何も生憎な事ぢや御座りませんかサア貴君の本意ないは御尤私も實にガツカリ致しましたがお念のため今夜中山さんとかの下宿に行つて委しい様子を聞く積ですから爾う又力を落したものでありません(静)ハイ如何か此上ながら其處等を宜しうお開合を願ひ升その中山さんとかお友達である上げ若又行方を御存じか(朝)オ、左様ですとも必ら老何と分かりませう併し出掛よ申した通り大和の方から此間来たお手紙で二三日の中には必ら老行くといふ事で御座りまして忠平どのを歸つて貰ふたがモ一昨日になり升のに如何した譯で音沙汰がないでせうと眉を蹙めて思案なしたる折しおれ忽ち表に足音して此方の出迎へるをも待せ靴脱捨て、ツと通り来るその人をお静朝五郎は見ると齊しく座を離れ(朝)オ、旦那(静)松山さん(朝)サア此方へお通り下されませ實は只今も貴君のお噂を申して居た處で御座りまし

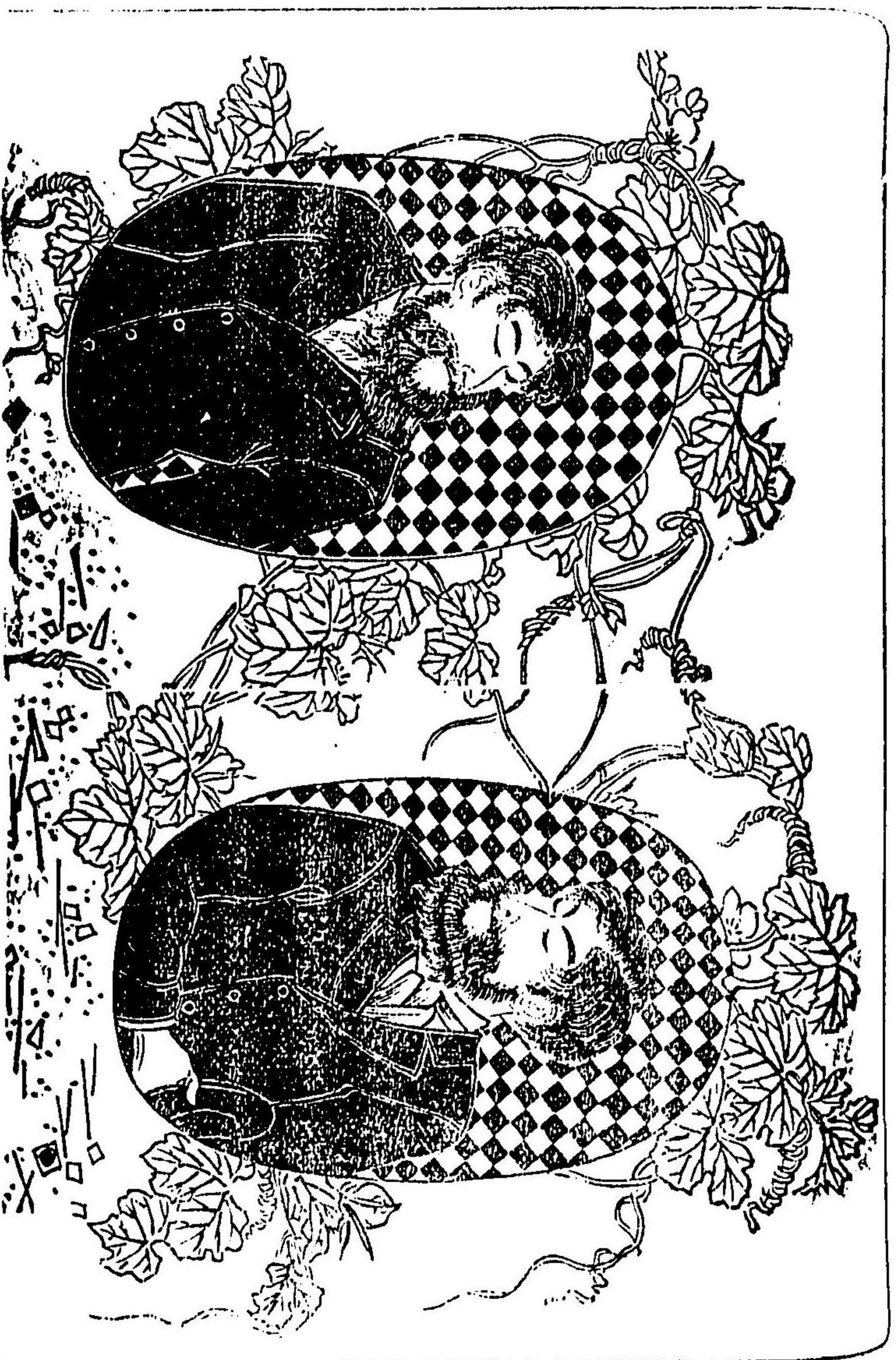
たサア情願と上座に請上すその暇にお静は早く火鉢の側に走り行き茶を汲來りて進めつ、慇懃に手突て(静)貴君何時も御機嫌好う。先達ては段々のお慈愛で有馬邊迄も参りましたに思ひの外な事が出来ましてと云ふもなつかしさの餘りにや聲曇して後の辭を出し兼坐る涙に暮れたれと松山の元氣よく打笑ひ(松)イヤ其次第は忠平が立歸つての話して委細に聞きましたナニ今日となつては幾等云つても役に立たない事ですから爾う哀しむも及びません併し朝五郎とん例もながら義侠の程感心の外はなく夫に就てはお静さんも不幸の中ながら斯云ふ人に行合されたは未だく幸運と云ふものです(朝)イエ如何致しまして一向お世話を致した甲斐もなく未だに國重さんのお出なさる先も分らない様な次第で御座い升(松)オ、夫に又彼の大倉との話を斷るに就て兼てお静さんの養母の方に受取つた支度料を返す一條は意外な處から金が出て容易く調つたさうだが何も遠慮のない譯もゑその以前に一寸余の方へその次第を言つて下さつても好かつたのだ(朝)ソリヤ誠行かなけりや爾うも致す積りで御座りましたが有馬で大倉に話を付ました時にや私の留守中にも外から受取る金の目的がありましたから一

体此頃は大きに不手廻りな中ですけれは腹を括つて後は兎もあれ万事貴君のお世話になつて居られる中へ爾んな話をお聞かせ申して餘計な心配をさすでもないと思へてお静様には別に金の事をお話致しませなんだが扱歸つて見ると思はく違ひで大倉より喧しく催促受け一時私が當惑したのみか後で承り升とね静様も前に此事を御存じなかつたから何か私に悪い心でもある様に疑ふて御心配をなさつたさうで御座り升(松)オ、其事も略忠平が言つて居ました併しお静さん七助さんの病氣も此程の書面に認められた通り段々全快に向ふて来て當人も是非大阪へ行きたいと云ふ望ゆゑ實はそのため一日二日と見合して大休なら同道する積で大きに暇取つたのですが何分老人の事で拙々しく行きませんから兎も角今日は余丈け出て來たのです處で最前も國重氏に如何やら遠方へでも行かれるとの話もありましたが夫は暫らく措て今途中で國重氏と同じ政黨の人に逢ふて聞て見ると國重氏は實に意外な處に行かれた様子です(静)エ何と仰しやり升意外な處とは一体何處の事(松)イヤ外でもない大倉へ(静)アノ大倉健三の處に……(松)而かも黨員のため金子の調達を受けてその謝禮に(静)朝)エ夫は又如何した

事で御座り升か(松)勿論此方の事は知られんからでもありませうが(静)夫では妾が國重を尋ねる様子を承知の(朝)成程コリヤ亦彼奴が恩義を掛け兼ての望みを遂げやうと云ふ下心でせう(静)若夫ならば彌々巡り合はしたの上では忽ち兄へ迷惑かけ妾も亦幾等かの心配をせねばなり升まいか(朝)ア、困つた事が出來ましたナと思はる彼是面を見合して嘆息すれば傍に松山も慰め兼ねたる眉を鎖り指向いて辭なかりしが斯る折柄表の方に人あつて芝辻朝五郎と云ふのハ此家ですかと聲高やかに音なうたり抑も此人は誰なるぞ次回に至つて自から分明なるべし

● 第廿六回

登時朝五郎は音なう聲に應じつ、座を立んとする處へ折しも歸來れる女房ね徳が取次いで訪來し人の名を尋ねると思ひ設けぬ國重龍二郎とありければ何れも早く聞取つて是はと驚く其中にもお静は幾んど夢見る心地主人の後に引添ふて立迎しが朝五郎も思はる喜びを溢しつ、(朝)是はく國重様ですか大和の松山様も恰お出での處で色々お話申上たい事も御座り升サア此方へと思ひの外ある待遇しに國重は怪しみながら延



々しき景色もなく一通りの挨拶済して松山は勝を進め  
 松)時に君は先日僕の處をお尋下さつたに生憎不在で甚  
 だ遺憾でした(國)イナ那の時は序ながらお尋申した迄を  
 すが今日此でお目に掛ると思掛けませなんだ(松)實に



かる、ま、奥に通り朝五郎が引合にて松山と對面し會ふ  
 は今が初めてながら兼て名を知り合へる間なれば互に初

四四十一

意外ですナ(國)情願以後は心易く(松)勿論御懇信を願ひ升併し君が御來訪は定めて令妹の事を御承知で……(國)オ、君迄が然う言なさるか。是は如何も不思議な事だ……併しその妹と云ふのは全体何處に居るのですかと怪しみ問ふに松山は朝五郎の傍に座したるお静の方を振り返り見て(松)何處にと云迄もない君が令妹は君が眼前に居られるのですサアお静さん兼てより辛苦に辛苦を重ねて尋ねなされたお兄様へ早くその次第をお話しなさらんかと云はれてお静は今迄指俯向ける頭を擡げ松山國重が年頃の容貌の極めて似たるを彼是眺めて驚きつゝ、少しく膝を進めたるに國重は形を正して(國)イヤ松山君々が此女を僕の妹だと言ひなさるからは必らき證據のある次第だと思ひ升が僕に取つては少しも妹のある筈はないのですから兎も角その事よりお聞かせを願ひ升(松)成程御尤だ實ハその事の證明人は別にあり升が今此に居りませんから僕よりお話しませう併し夫に先つてお尋申すのハ全体君は元水戸の御出身で御親父のお召仕になつた僕に七助と云ふ男がありましたか(國)ハイお尋通りです尤もその七助と申すハ何分僕が幼少の頃に居つたもので亡父が武田藤田等と一緒に國を出た時より其方

は附て参つたから一向容貌などに記憶はありませぬ(松)夫で又君には尙御一人の令兄がおありなさるさうですナ(國)如何にも左様ですが是は又亡父の出郷後母なり僕なり一同親族の方に潜伏致して居つた處を反對黨が殘酷にも殺害せんと或る夜不意に押掛けて來ました折兄は久しく召使つた空造と云ふ家來を連れて他出致して居り僕は母に附添つてろの際來合し居つた近在の吉右衛門と申すものに手を引れて裏門より十歩許り退出した處で母は俄かに亡父の大切な書類を入れた手箱を取殘したと云つて跡に歸りましたが……是が母の聲と容と面ながら僕の耳目に觸る最後の期で……實に母子一生の別れとなつたのですと愀然として眼を屢叩けばお静を初め一座何れも容を歛め女房お徳も次の間にて様子洩開き思はせ息を詰め此方をマツと見詰たり其時松山は膝を進めて腕振り(松)オ、幕府末路の紛亂時代とは云ひながら如何にも慘ましき次第ですな……夫で御母公は如何なさつたのです(國)ハイ母が跡に取返して恰と手文庫のある邊に行きました頃反對黨の奴等が裏手に廻つて來てソレ逃すなど走り掛る勢に吉右衛門は大壯驚きまして僕の手を取り無暗に畑道を走り出し升から母は如何しな

さつたらう捨て、置てはならないと云ふのも聞かき此の場合に如何仕様があるものか  
 貴郎が飛出しても奥様のため又は少しもならない兎も角私の方へと云つて忘れぬ仕  
 せんボロ／＼雨が降つて其處等の暗かつたに紛れ到底毒手を避れてその夜を吉右衛門  
 の方に明し扱翌日になつて聞て見升と母は前後捕へられて無残の刃に命を落し……  
 兄も途中で縛せられたと云ふ風説さへあり……(松)如何にも當時の境遇お察し申し  
 升(國)何を云つても法律が眼を塞いで暗黒世界の事ですから尋常に正理を伸さうなど、  
 云ふ道はなし親戚朋友も連累を恐れて容易に寄付けないのみか或ひは其執る所の主義  
 又因ては仇敵の地に立つものもあり升の例の吉右衛門は農家に似合ハる思慮もあり  
 又可なりの生活でもある處より此の景況を察して僕を江戸の知る邊に送つて呉ました  
 から夫より又手寄を求めて去る幕臣に使はれ維新の後主人が元堺奉行を勤められた所  
 縁にてその地へ引移るに附從ふて十年前迄同家の厄介となり爾後堺縣に奉職して奈  
 真の支應詰を言付られ先年堺縣を大阪府に合併せられた時より官途を退いた次第です  
 が其中にも父と兄との成行を探つて見升又兄は幸ひ風説と違ふて難を免れた様子です

花水書十八

が一向行方知れず父は又京都で悪徒のために暗殺に逢つたさうでと云ひつ、涙を呑ん  
 で溜息吐けばお静は忍び伏沈み空よ知られぬ雨車坐るに袖を濡はし、が松山は少し  
 く席を進め(松)成程尊父が暗殺にお逢ひなされたは實事にてその折お供を仕て居つた  
 が例の七助なる上此令妹を今日迄養育仕たも同人ですハイ是より君が御得心の行く迄  
 に令妹のお身の上を話させうと一つ二つ嘆きたるその折柄表の戸口より「唐物町  
 の三宅から参りました此方に國重さんはお出で、御座り升かど大聲よ尋ぬれと國重は  
 ハツと面色變へお静清五郎も諸共に思はせ彼方を見遣りける

第廿七回

是迄は相違ふ事の難かりし兄と妹との兩個連今の時來て國重龍二郎が妹お静を伴ひつ  
 、唐物町なる三宅の家に訪行しに主人お辰は出迎へ(辰)是は好うお出下されました夫  
 に又お連はお静さんでは御座りませんかと云ふ折娘お花は奥の方より走出で國重を見  
 て喜ぶ中にも傍に居合すお静の姿に眉を凝せ辭はなくてつひ居たるがお辰の荷も辭を  
 ついけ(辰)今も云ふて上げました通り服部さんからの話に就て方々をね尋申したに

知れませんで那の朝五郎さん此間から貴君を捜して居なかつたゆゑ万一分る事も  
 あらうかと使を出しました處恰と好  
 い都合で御座りました(國)併しお前  
 さんの方に服部君の來られたと云ふ  
 は甚だ不思議に思ふのだが全体是迄  
 知る間ですか(辰)ハイ知る間處ぢや  
 御座りませんで死ました良人の御恩を  
 受けたれ方で妾等こそ貴君が服部さ  
 んと御懇意なを今日初めて承まはつ



ひきかへ



て誠に不思議と思つて居るのですがマア情願お上り下されませ(國)夫で服部君は…  
 (辰)モ一夫大和にお歸りなされませましたが段々ね話申さねばならん事御座り升サアお静

さんとお通りと奥の一室に請じ入れんとする折しも表より突然入来る一人の老婆あり  
 雪を戴く頭髪の蓬に亂れたる手足の垢に塗れて身に纏へる單衣の汚穢しき只見るさへ  
 も厭はしきに尻切草履脱棄て、ツ、と牀上に入り是はと思ふ際もなく忽ちお静の袖を  
 捕へて疎らなる齒を剥出し(老)ヤイお静一体今迄何處に居おつたコリヤ己が言ふ事を  
 聞かぞに逃廻つた爲余は到底斯う云ふ身体になつたエー又逃げやうとするかグツグ  
 せぞと這地へ來いと引出さんとする有様にね辰母子は驚くのみ如何はせんぞ周章ゆる  
 に國重は獨り點頭き突と身を起して老婆がお静の袖取る手を引放して間を隔て(國)コ  
 レ〜爾ンな手荒な事を仕なくては好い今の様子ではお前さんは此お静の仮りの母親  
 お虎さんぢやナと云はしる果てきお虎の囁かれたる聲振立て(虎)イヤ仮りの母との謀  
 の事ぢや腹こそ痛めね此お静は世間へ通つた立派な娘親が子を連れて行くに他人が彼  
 是云ふ筈はない。ハ、アお静奴が兼て大倉へ行く事を嫌ふたも……オ、讀めた。罷  
 を生したりして四角張つた顔にも似合はぞ何時の間にかやら家の娘を誘かしたのぢやナ  
 (國)エ何んだと……(虎)コレ何もお前が差出る場でないから其方に引込んで居るが

好い。イ、エ此畜生が言條に隨ひ居らんから折角附さか、つた金の藝は断れて仕舞ひ  
 先度本町橋で逃出したのを追掛る時蹴欠いた爪先に湯が滲入つて脚は腫れるし。敵は  
 出る。到底夫が存病付で名も分らん長の煩ひお負けに此間盗人に這入られて衣類諸道  
 具素ツかり奪られて少しの田地も質流で今は我でにも愛相の盡た汚穢い形容となつた  
 のぢやサアキリ〜余に附て來て長の年月養育て、遣つた恩返しを仕居らぬかと又も  
 やお静の帯先取つて引立んとなしたれば國重は尙も身を以て遮り留め少しく聲を勵ま  
 して(國)年老だと思ふから容捨をすれば様々の事を云ふのみか無法な所爲に及ぶとは  
 不埒な奴だコリヤ氣を鎮めて此方の育ふ所を(虎)何ぢや仔細らしい口上を捻操つたテ  
 親が子を連れて歸るに難が打て、堪へものか(國)サア汝は頻りに親だ子だと親風を吹  
 して居るがお静から聞きや親子と云ふハ私事戸籍の表は七助諸共同居の名義何處に親  
 子の證據があるか(虎)エ夫でも現在(國)イヤ爾ンな事は通らないと云ひつ、其處に押  
 据れば流石の老婆も道理に楯つく術なきにや今迄の勢折けて見ぬながら尙も齒を食し  
 ばつて憤怒に堪ぬ眼ざし鋭くお静の方を瞰付るにお静は恐怖で辭み出さぞ兄國重の



後に隠れ身を震はして居たりしが國重は片膝ついて辭を和げ(國)コレは虎とやらお前は定めて脇から口出仕たを餘計な事をするものだとか又今もね前の言ふ通りお静を誘かしたものだとか色々疑念を抱くだらうが全休余はね静に取つては斷つても切られな  
い兄である。オ、斯う計り云つても分るまいがね前が今迄久しく連添つた七助と云ふ  
の(以前使ふた家來で今よりの十七八年前仔細つて我父の供をして京都に来て居つ  
てその中父が或る女に生したが此お静だ。處で父の悪徒に暗撃仕られ余等も郷里で難  
に逢ふて行方知れせになつたから七助は據るなくお静を我子として養ふて居た譯で實  
は是も先刻石町の芝辻と云ふ處で不思議にお静に巡合して初めて知つたのだがと聞く  
よりお虎は俄かに顔色變へ尻込しつ、こそくと逃出さんとする様子に國重は點頭さ  
ながら引留め(國)ア、コレ今言ふた芝辻とは夫程恐れる芝辻でない併しお前が禁物  
の芝辻も同じ石町だが余の話した芝辻とは昔の知らせ今の處は因みもない中で主人は  
清兵衛と云ふであらう。イヤ如何も悪い事は出来なないものだ其清兵衛の方には此春朋  
友と一緒に暫らく下宿を仕た事もあつて開て居るがお前は那の清兵衛の妹でありなが

ら利害の事を仕向けたさうだナ畢竟清兵衛の心が優しければこそその儘に濟んで居る  
が万一那の男から洗立をする時は逆も安穩では居られまい(虎)エ、(國)と云ふて今夫  
を訂く積でもないが(虎)イヤモ一何も云ひません情願ね免し下されませ何も歎も妾が  
悪かつたので御座り升と云ひも敢へせ取らる、袖を振切つて表を指して驅出づればお  
静は又今更に此様を見過し兼てや思ひを續て身を起すを國重が暫らくと呼留めたる傍  
にお花は初めて莞爾り母に向ひ(花)先度國重さんが石町の芝辻に下宿を仕たと仰しや  
つたに此間那の朝五郎さんのお出た時開て見ると爾んな事はないとの話ゆゑコリヤ矢  
張り妾に虚言を吐て居なさるかと思ふに就て(辰)オ、余も夫で言ひを語らせお静さん  
との間を疑ふたが今のお辭で素ツかり疑が晴れましたと胸撫下して喜びぬ

● 第廿八回

登時國重の妹お静を引留め(國)イヤ那のお虎は假令此程より胸に對して好からぬ仕向  
を仕たにせよ年頃仮りにも母と云つた義理もわり少しは又恩がないとも云へないから  
何れその報酬だけはする積だが今日は兎も角此儘にするが好い(靜)爾ら聞き升れば妾

も安心情  
 願望し  
 様にお尋  
 ひを願ひ  
 升と元の  
 坐に連れ  
 ばお辰す  
 立つて吉  
 の貸戸  
 録香せ置  
 き娘と共  
 に國靜を  
 延いて座



花吹雪二十九

敷に通し改めてお尋に  
 挨拶なき仕て懇ろに待  
 遇す中にもお花は兼て  
 片心に掛りたるお静は  
 事の辨解けたれば一入  
 喜ばしげに見わたるが  
 國重は頓て朋を促しお  
 辰に向ひ(國)時に例の  
 服部君の話しは如何で  
 すか僕も今服部君の事  
 に就き或る人より聞いた處に少し  
 前さんは是迄に服部君は元より大和の産であるか又何處からか  
 つて居なさるか(辰)へい、養子に來たお方で御座り升(國)ウん夫では水戸の出生で



(辰)イヤ爾うは聞て居りません元東京のお方で横濱に長うお出た事さうです(國)ハテナ夫では違ふかなど少しく失望の有様にて俯向くにね辰は辭の端を改め(辰)夫は爾うと貴君も亦如何したもので御座り升先度からお金の事に就て色々御心配なされたさうですが何せ妾には御相談を仕て下さりません併しコリヤ先日お出の時那の彌兵衛と云ふ人が来て色々な事を喋つたのですから何ぞ又妾の方の氣でも變つた様に思ひあさつてか(國)イヤ爾う云ふ譯でもないが何分言出し悪く、つて……(辰)夫も貴郎がお遊蕩過ぎなされたとか云ふ様なら格別ですがお朋黨大勢の爲めに調達を引受なされた譯ぢや御座りませんかハイ妾も女でこそあれ男子達のお身の上には時と品とで難儀と知りながらも退引ならぬ事のあるは好う存じて居り升ゆゑ方に叶ふ譯であれば何の貴君辭退を致しませう(國)夫は如何も深切の程辱ないが先一時の處は調つたから(辰)サア夫でも貴君その先を何と思ふてお出なさり升(國)エお前さん何時爾んな事を聞きたつた……那の大倉よりお静へ掛る事のため金の調達が出来る以前よりも一層勝つた心配仕て居るのを知つての事であらうが是は尙朝五郎の方で話合ふた人の外は知る

べき道理もない筈だに……(辰)イヤ今仰しやる處で成程と思ひ合す所も御座り升けれど一体妾の云ふのは外でもありません兼て貴郎が妾の方にお出なされたことを御存じで先刻故々服部さんが見ねまして昨今當地へ来て料らお貴郎が大倉から金子をお借りであつた事をお聞なされたに就きその大倉と云ふのはなかく一通りや二通りの男でないから那んな者より恩を被せられると後に迷惑が掛るであらう畢竟彼等が金を出すの何れ夫を道具に使ふて何か事を仕様と云ふ考へだと思ふから余は政黨などに少しも關係はないが國重氏が名義に係る様な事があらうかと大壯心配をすると思つて……(國)イヤ如何も流石の服部君感心だ。併し先日大和へ行つて依頼したに少しも取合つて下さらなかつたが(辰)サア左様で御座りましたさうなが何分右の次第を聞て見ると捨て、置かれなから今國重氏の居處が知れども好く捜して見て兎も角大倉より借りた金丈を取換へて渡して置て呉と仰しやりました(國)エお前さんから取換て余に渡せど……(辰)ハイ夫故先刻から用意を致して置きました。お花最前のをど娘の面見ればお花は心得次の室の簞笥より一包取來り母に渡せばお辰は手早く風呂敷

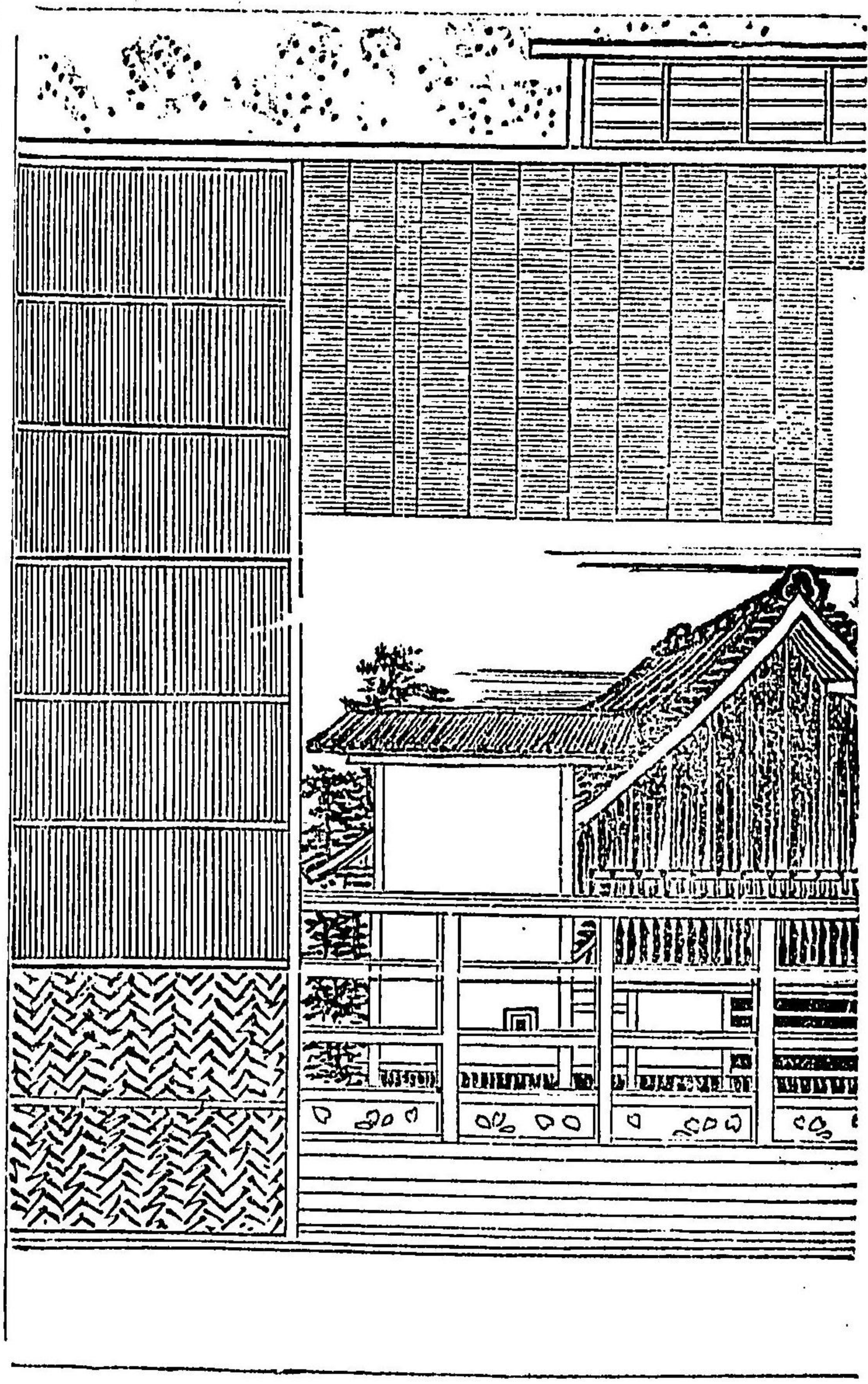
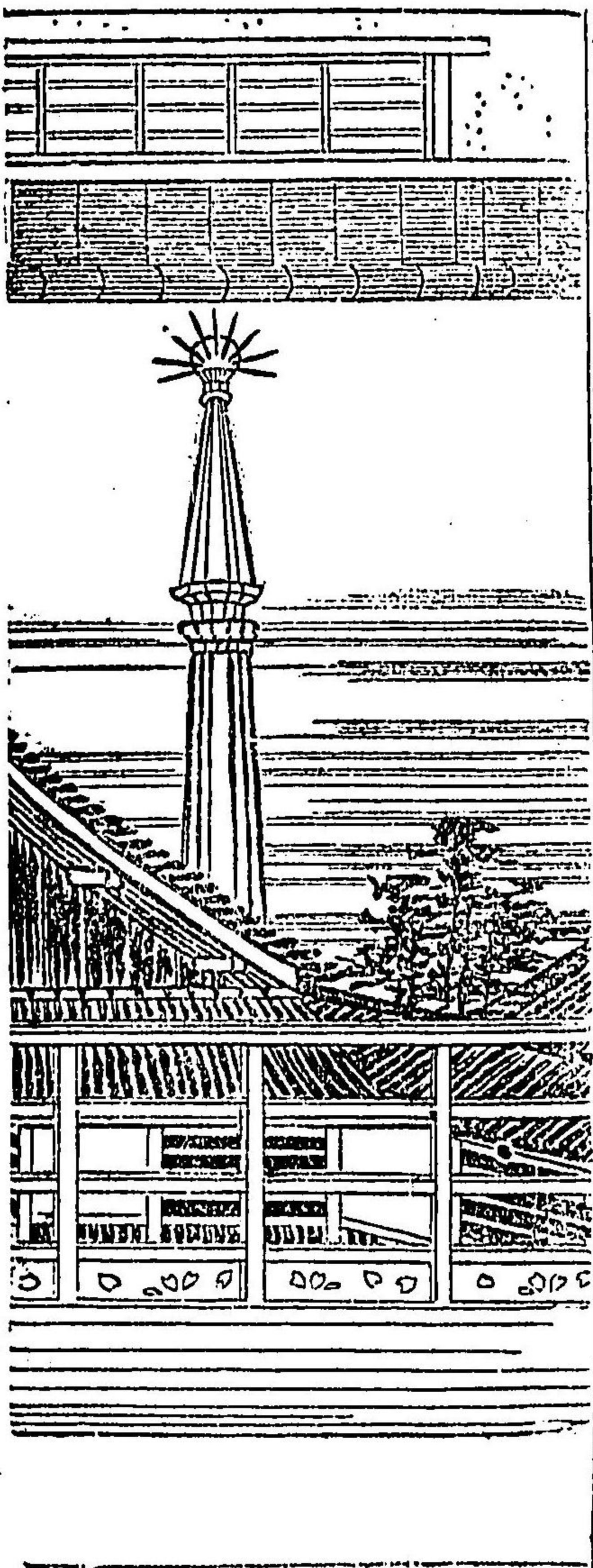
引放解さ中より出す紙幣二括恭しく國重の膝元に差置て(辰)是は恰ど壹圓紙幣にて二百圓と利息などの入費のため別に十圓紙幣一枚御座り升情願改めてお受取り下されませと意外な此場の有様に國重は呆れる迄に驚きしが頓て形を正し(國)實に服部君の厚誼お前さんの心入何れも淺からぞ思ひ升が併し余より御依頼致した事もないに少なからぬ金子を貸して下さる上その趣意も充分なり兼る所もあるから如何も是は此儘受られません尤先達てお花さんが余と見違へた松山と云人より深切に話して呉られた所も有る事もある……(辰)イエ貴郎御辭退さつては悪う御座り升折角服部さんの御思召で……オ、妾と仕た事が肝腎服部さんがお死しなかつたを忘れて居ましたと忙しく立つて床の地袋より一通の書状取出し手に渡せば國重は表書眺めて忽ち封を切つ讀下しつ、思はせ出る獨言(國)オ、「此金は決して政黨の故を以て黨員諸氏のため又は貴下のため御用達候には無之畢竟貴下一身上の御困難を見るに忍びを兼て謝絶致したるにも拘へらぞ平生の厚誼を表する迄に有之候」成程爾うか夫で又「併し此度貴下の御困難は是に因て世故經驗の二級を進められ候事と信せる上恐らく新たに御理會な

され候處あらんと察し候果してその事有之候は、何時か一たび拙宅へ御來訪下され度候方一何たる義も御理會參らざる次第ならば目今御用達候金子は交誼永絶の儀物とお見做下さるべく候」とハテ是は如何いふ積だか……例みながら……一種のと暫らく思兼ねたる額を探めしが忽ち撲と膝を打ち獨り屢々點頭さたり

● 第廿九回

中の島公園地の傍なる銀水樓の一席に打集ふたる男女の客あり是なん夫の松山幾之助が昨日國重兄妹の會合したる喜びを表せん爲めに龍二郎以下の人々を招き已東道となつて晚餐を饗應するにぞありける只見れば國重龍二郎は客席に裕か又坐して其右手に妹お静三宅の娘お花あり左の方少し離れて芝辻朝五郎膳を扣へ之に向ふて坐を占めしは松山幾之助なり折柄夕日も己に西山に落んとして庭の打水樹々の葉に玉を綴り絲を垂れたる柳の隙より吹越す風の肌を涼しくて殊に龍二郎お静の兩人は未だ長なる兄が行方は知れされどその身兄妹此に相逢ふたるその上に大倉より借りたる金と諸共に柵かけられし義理の柵に意を苦しめ如何はせんと當惑せしめ料らぞ服部の好意にて其死

さへ解くべき術の出来れば打寛いで話合ひ笑ひさぐめくその様は春の宵にはあらざれど實に千金の價値あるべく見ゆるが今しも國重は廻來れる盃洗ふて松山の前にさし(國)實に君が此度の御高義は謝するに辭なしで妹が一方ならぬ御懇情を蒙つた上今此通り兄妹一席に列なるのも畢竟君の賜だも尙父厚い御饗應に預つて何とも恐縮の至りですと感謝の意言述るをお靜が承つぎ(靜)始め事の間違から大和へ尋ねて行きませしが緒で親族の者も及ばぬ程の御深切妻一人さへ御座り升に病患ふ老人が長い間の



御介抱此御恩は生涯忘れは致しません(松)ナニ爾う云ひなさつては却て赤面の至です

併し國重君西哲の辭に實事の奇なるは遙かに小説の奇なるに過ぐと云つた通り今度君が令妹と遭遇なさつめその源は僕が好事の一癖より七助老人を櫻の宮に訪ふたに起因て次でお花さんが僕を君だと見違へられたが最も力となつた譯で取も直さず君が今日の歡會は當時の齟齬中にその機を胚胎んだと云ふ譯ですナ。イヤ如何もお互に小説中に身体と置く標ぢやありませんか(國)如何にも耐うです。夫に就ては尙僕等兄妹の尋ねる兄に逢ふ迄には定めて又幾等か……(松)必らず奇事がありませう(國)イヤ何程奇でも妙でも最早小説中の境界は早く脱したものですアハ、ハ、ハ(松)夫も御尤だ併し先刻にも申した通り此程夫の服部家の親族の人より料りを聞いた所では今の良一君の君と同郷の出身で如何か所在の知れない舍弟がある様に云つて居られた事があるさうですから大体は違ひ升まいが但一つ分らないのは果して僕の推察通だつたら疾くに向ふより君に何とか言れる筈だにその事のないのを見ると尙如何とも斷定の仕難いのです(國)大きに……イヤ僕はモ一行けません君今一つ(松)兎も角例の大倉の事さへ愈々片付た上は同行で服部君の處を訪はうぢやありませんか(國)爾う仕て下さりや

最も妙ですが何分遠方の處だから。ナアお靜(靜)左様で御座り升(花)夫では國重さんは直ぐに又服部さんの處へお出で、(國)大倉の一條が片付次第是非行く積だせ(松)イヤ此方の話ばかりで氣が附かなかつた。モシお靜さんもお花さんもお氣に入つたものを食ひなさい。オ、その鮮が好からう(朝)ナニ速慮を仕なさるにや及びません。最も前も松山の旦那のお使で行て那程進めたにお辰ツアさんが留守がないとか何とか云つて来て下さらないもんだから頼と若い女中のお愛相がなくなつてお氣の毒です(花)イヤ如何仕まして(靜)最前から澤山戴きました(花)お靜さんチツと庭でも歩行て來ませうか(松)今に御膳が出來て來升せ(靜)花有難う。夫なら一寸御免をと云ひつ、庭の方へ立出る跡に國重は松山よりさ、れし盃一口飲んで下に置きながら(國)時に松山君君は如何か小説風の境界を好まる、標に思ふのですが果して左様なら僕も君の事に就て小説風に御談じを仕たい事があるのですけれど併しコリヤ今指掛つた譯でもなし……又如何に兄の権力朋友の間柄でも強て言はれぬ事ですから……(朝)モシ國重の旦那貴君爾な六かしい事を云ふに及ばん譯ですに御氣象にも似合はない何せ余の妹を貰ふ

て吳んかと判然仰しやらないか私も是程の御縁はないと豫て爾う思て居るのです(松)  
 イヤ御好意は有難いが僕よりは又國重君に就て別にお話しを仕様と思つてた事がある  
 のだに……(國)兎角話しを始めるは彼の大倉の方を取片付服部君を訪ふた上の事に  
 仕ませうと互に語合ふ折しむれ忽ち隣の問より大倉健三何れにてか下地のある事と  
 見ぬ酒氣紛々脚元も踰限さながら例の源介引連れて入來り一寸會釋して(健)コリヤ國  
 重君料らぬ處で。如何か昨夜も今朝も出下さつたさうですが掛違ふて失敬致しまし  
 た只今是へ參つた處大倉の方を取片付てどのお聲で君だと存じた上右のお辭では兼て  
 御依頼申した令妹の事も御心頭にお掛下さる事と推察致して何より重厚實は簡潔にお  
 妨するも如何と存じながら凡そお返辭の摸様を仰下さるまいか情願兼て御依頼のお  
 返答をど両手を膝に席を促がしツツと國重の面を見詰めたれば國重始め松山、朝五郎  
 も思はせ是はと打驚き彼是眼と眼を見合しつ、暫らく辭めなかりける

● 三十回

大倉健三の國重が答へ兼たる様子を怪み愈々膝を進めて(健)今お尋申したね返辭は如

何ですか夫とも又此でお差支のある事なら別室へ參りて承まはりませうサア何れとも  
 お答をと言迫れば國重は左なきだに彼が心術を悪しと思ふその上に今又無作法に此席  
 に入來れるを怒思へば頓て形を正し(國)成程昨日お話しのおつた一條は船でね分申し  
 てより此朝五郎方へ立寄た處果して同家に居合したゆゑ早速君が御懇望の由を申聞け  
 た處如何致しても承知しませんから折角の事ながらお斷り申し升と斷然り言放せば大  
 倉は餘りの案外に呆果てつ、屹となり(健)國重君。そのお辭は違つて居ませんか勿論  
 此に居られる客人の手前でもあつて言はれたか(國)イヤ決して左様な譯でない(健)然  
 らば君は眞實から……(源)モシ國重さん貴君ソリヤ何を言ひなさるのです是が只心  
 易い中から人の娘かなんぞを一寸聞て見て呉れ。ヨシ承知したと云ふ様な事なら格別  
 ですが貴君は元少しのお馴染もなく只平常知合ひの村田さんより那の中山とか云ふ人  
 に添書を仕られた迄の續で大救の金子を貴君に貸渡されそのお蔭で貴君の顔も立ち難  
 儀も解けたのではありませんか夫に今の様な魚脂のない物の云ひ様を仕なさるとは如  
 何いふものです餘り不人情で御座り升せ(健)自分の難儀は人に泣付さ人の依頼は少し

の頓着もなく失敬極めた今の挨拶夫でも政黨とか云つて立派な面を仕て居られるか斯  
 の如きが所謂政黨の主義であるかと罵りつゝ、兎にせ國重と膝突合す迄に歸寄つたるに  
 國重は沈着ながら勃として「國」勿論僕に於ても初め君が一面識もないものに大金の無  
 心を聞いて下さつたに就いては大壯高誼を感佩したが後妹の事を言出されたに至つて  
 忽ち愛相が盡きて「健」エ、何んだと。人の恩義を指して「國」イヤ君は頻りに自稱の恩  
 義を振立  
 られるが  
 始つから  
 僕に掛る  
 首刎の積



で貸されたと仕て見れば何處に恩義の實があるかイヤその義は口の争ひは指置て君が  
 心に問ふて見れば直ぐ分る事だがと言込れば大倉健三は赫と怒りを起し只さへ我儂の



性質に酒氣を帯びて宛ながら烈火の如く(健)イヤ言はして置けば様々な失敬過言と拳を固めて已に打掛らん様子なれば朝五郎は忙しく大倉を引留め松山も亦身を進めて間を隔て(松)は大倉氏とやら待ち玉へ此國重は兎角一徹な心から人の所爲を不義だと見れば直ちに面折して少しも憚らない性質で。マアサ靜かにし玉へ。殊に今は酒氣もあればと取和むる其中にも流石の國重は今松山の辭にて早くも心付く所やありけん忽ち色を和げ手早く革袋より二括の紙幣を取出し(國)先刻から料らせ失敬を致したが大倉君如何か是を御返戻申すゆゑお受取り下さい實は昨夜以來お宅に参つたも是がためです證書さへお持合なら利足み共に此處にてお渡し致しませうと云ふにも拘はらせ大倉は支へる兩個に突掛り(健)何だ手前等が入らざる邪魔を仕やアがつて夫に人の不義を見りや何だとか失敬な言種イ、ヤその金は未だ期限が来ないから欲しくはない。ヤイ朝五郎とか汝有馬以來屹と言分のある奴だ。コレ源助どんまどくして何するのだマツと仕て居るが好い。コウ國重金さへ返せば夫で恩も義理も濟むと思ふか。オ、敵仆して腹を慰めるのだと形容に似合はせ辭遣も荒々しく取らる、袖を振切つて國重眼がけ

て飛掛らんと猛狂へるその折柄次の室より不意に起つて踏込んだる兩個の書生あり是ほど何れも驚く中大倉は夫と見るより如何なる譯にや忽ち面色變へ今しも國重に取掛り支へる朝五郎と挑合しを振切つて椽側より庭に飛下り表を指して逃げ出ればソレと兩個の書生が跡を追ふ様子に國重等も怪しんで續て表に駆出すに豊公神社の脊後にて書生は終に大倉を取押(甲)ヤイ逃足の早い奴だ。コリヤ己は好くも大倉殿三など、化けて居たな汝は水戸産の坊主落ち蓮華の吉事本名岩田の吉五郎だらう(乙)去年東京で大きな詐欺の一仕事が當つてから身形容を作つて金満士族に成濟したは探偵盡して明らかだぞと云ひつ、早ひしくと細を掛けたるにぞ此方に見聞く國重等は思はせホツと息を吐き呆驚くその後何時の間にもやら眼來れる廣田源介が餘の事にアツと叫んで其儘其處に平張りたり

● 第卅一回

此に又大和吉野郡唐戸村なる服部が家には今日なん訪來れる國重龍二郎并に松山幾之助を一室に通し頼て主人良一も立出で、互に時候の挨拶など事果れば國重はツ、と席

を進め(國)先日大阪へお出なされた節は生憎お目に掛りませなんだが實に非常の御好意有難う存じ升ね蔭で兼々經畫致して居つた演說會も首尾好く一昨日に濟ませました何分夫の大倉より借用致した金に就ては御注意下さつた後日の事はさし置き目前甚だ困難の次第が生じて居つた爲不本意ながら拜借を(良)夫は勿論の事ですがお辰に托し置た書面は定めてお讀になりましたらうナ(國)ハイ委細拜讀致した上尙れ認め趣意も承知致しました(良)オ、夫で何とお考がつかまりましたか(國)何と、云つて君の御意中は全く政論にのみ熱心して幾んど實業を度外に視たる誤を理會せよとの事でありませう(良)成程お察し通りですが併し其以上今後の目的は如何する積です或ひは政黨社會を退く見込でもあり升か(國)イヤ政論に口を絶つことは何處迄も致さん心底です(良)然らば別に前日と異た所々無い様に見ゆ升ナ(國)イエ政論の一方に偏せないのです(良)オ、夫では何か實業に就て一家を經營し傍ら政論社會にも身を委ねやうと云ふお積りか(國)全く其意ではより以後僕相應な事業を見出して飽迄勉強する考へで居り升(良)夫は實に重疊です。處で僕も亦久し振先日大阪へ參つてお辰の方には直ぐに歸

花吹雪 十一

郷した様に申して置きましたか實はその後兩三日も逗留して政黨の模様より一般民間の有様を段々聞探つて見た處只新聞紙の上にて反射の情態を眺めるとは違つてその實体は頗る意外に出た所もあり升から自然覺る所あつて稍持論を改めました(國)エ君が持論を改めなされたど如何も意外ですナ……左すれば政黨に加入でも(良)イヤ目今政黨に加入など、は思ひも寄らない事です(國)夫は又如何した仔細で(良)ナニ別に仔細はない畢竟今日の情態では余には尙何れの政黨にも直ちに加入することは好まない迄です併し兼てより僕が見る所での往々産業もなく又學術經驗もない輩が政論に喋々吻を弄するは甚だ如何はしい事だと擯斥して居つたのですけれど熟々考へると此輩も目下輿論を作るには妄りに棄てられない時宜で固より是と彼と時勢も目的も違つて居るの一言ふ迄もありませんが今日維新の功業も浮浪の徒が器々として尊攘の說を傳唱へた中に成就した次第ゆる此の處に頗る覺る所があつたのです(國)大きに御尤だど考へ升(良)詰り右の譯ですから自後は政論の上にて於ても輕躁と夫の極端に奔る事とを避けて餘力の及ぶ丈は心を用ゆる覺悟だが夫に就て君が今日お出下されたは定めて先

日の書面に記し置いた處に随ふてゝあらうと思ひ升。彌々君は實業に就くお心懸かその邊を今一應確かに承はつた上で尙お話申す次第もあるのですと色を正して問懸けたるに國重も亦形を改め(國)そのお尋は先刻も申した通りで一旦口外致したからは假令如何なる艱苦を爲す迎も決して逡巡する様な事は致さん心得であり升。併し此に一つ僕が君も懇願する所があるのですが聞て下さり升まいか(長)勿論僕も今君のお答を聞く以上の決して棄て、置筈は有りませんが必らに實業に就きなされる御相談を仕ませう(國)イヤ僕の願ふのは其處でなくつて君は元來その姓を僕と同様國重と云ひ名を龍太郎と呼ばれなされは仕ないか否やと云ふ處を明して下されたいのですと充分の希望を表して尋ねるに長一は左も意外なりとの面色しつ暫らく口を籍んで辭なければ最前より傍に在つて首を垂れたる松山幾之助が進出で(松)今突然國重君が今般な次第を申出されては定めて不審に思ひなされるのは御尤ながら實は兼てより御交際致して居る僕も今迄君の御出身を委しく承知致さなかつたが此程料らに當家の御親族である夫の木村さんで薄々承れを君は元水戸藩の御生産で如何か維新以前より行方の知れなくなつ

た御舎弟を密々尋ねて居なかつた様にお噂もありました處國重君は又令兄を尋ねてお出でゝあり升から僕より聞く所をお話し申したゆゑです併し國重君は是迄君と交際して居られたに何故實をお明しなさらなかつたかイヤ君と國重君とは容貌は甚だ似て居なされる譯でもないが音聲と云ひ動作と云ひ僕が國重君の令兄だと云ふ推測は決して違ひ升まい(國)是迄余が國重と云ふ本姓を名乗つて居るにも拘はら老兄だ弟だと云つて下さらなかつたは何か思召のあつた事でありませうが全体長兄を尋ねるは余のみでなくつて外に一人の妹もあり尙夫には舊僕七助も附添つて居て實は今日同伴致して門外の茶店に待せてある次第ですから情願余共の心中をお察しあつて事實をお示し下されませと面を見詰て述べけれを長一は愈々不審を抱ける様子しながら忽ち獨り打點頭さ(長)イヤ如何もそのお話は僕に頼と分らない所もあり升が妹御なり七助とやらも當地に來て居られる事ですなら兎も角お呼入申した上次第に因つては僕の身分も委しう話しませうと云ひつ、手を打敲いて下女を呼ぶを國重は押留め自から起つて表に出で頼てお静七助を伴ふて元の座敷へ入來りぬ

一家の無爲安全に万の憂を門外に拒絶すれば豪富と稱すべき資産のあるにもあらざ名望に盡く迄に聞ぬされと癖を見越しの老樹と共に幸福長しなへなる松山幾之助が屋敷の裏庭に今しも農丁の忠平が菜園よりして幾株の夏大根拔來り井戸の流しにて洗ひながら彼方又在つて箒片手に草を抜く老人に聲を掛け(忠)七助さんお前は病揚句ぢや此處は客さんの目にも掛らんから体みなさい(七)ナニ是位は離作もないけれど聞て下さい昨日迄臥て居たのは如何やら此間唐戸の服部さんへ行たので障つたらしいがイヤ忠平さん年は老りともないものですナ(忠)年と云や御互であるが併しお前さんが國重さん御兄妹と家の旦那どのお伴を仕て那の服部さんの方へ行きなさい留守に今度余の孫奴が嫁入るので暫らくお暇を貰ふてハイ孫は此隣村にあり升のぢや………夫で今朝戻つて來から一向彼地での話も未だ聞て居んが一体如何いふ塩梅であつたのぢやナ(七)ハイお前さんも薄々知つて居なざる通り國重御兄妹の尋ねて居なかつたお兄様は愈服部さんでありましたせ(忠)ア、爾うかエ夫にしては又是迄國重さんはお心

易かつたに何せ服部さんは黙止つて居られたか一向分らん事ぢやナ(七)その疑の尤もだが服部さんから縁由を聞て見ると其處には又尤な所があるので聞より忠平は半洗へる大根をば流に指置き(忠)ハテナソリヤ一体如何いふもので彼方を見向て怪しみ問へば七助も側に近づき其處の木に根に腰打懸け(七)忠平さん聞きなさい那の服部さんが現在御舎弟と知ながらその名乗を仕なさんだは外でもない國重の旦那はお前さんも知る通り今世間で喧ましい政黨とかに入つて始終に方々を歩行廻つて居なざるもんだから其處は大きな聲で言はれないが随分脇から見ると浮々した書生も同様の迂闊に兄弟だと明して夫からの義理で兼て好まれない政黨に金でも出さばならん様な事が出来ては何を云つても御養子の身で家に對して濟まないどの御斟酌もわたり又一つには不意に金満の兄があると仕て見れば國重さんの心の張も自然に弛んで後々の爲に好くなからうとの考から何でも二三年前より大坂の宿屋に泊り合して心易くなりなさいたさうだに一向知らぬ顔をして只折に觸れて國重さんへ政黨々々と議論するばかりで行くものぢやない早う何か一つの家業を立てるが好い随分世話仕様からと

マア斯う云ふて居なされた事さうだ(忠)成程御尤ぢやナ(七)處が今度國重さんが同黨衆のために金子調達を引受けて大壯難儀を仕なされた處より平常服部様の辭と云ひ別して此間二百圓の金を出して言はれた所を大きに然うだと感心を仕てコリヤ如何しても金に不自由する様ぢや志も立て悪いから是非家業を定めやうとの心になり又服部さんの服部さんで是迄今の政黨杯とは詰らんものだとイヤ爾う無下に言なされたのでもないがツイ余等が口では斯なり升アハ、、、(忠)フン夫で(七)詰らんものだと思つたが好考へると爾でもなかつたとお氣が附いたと云ふ處へ持つて來て當家の主公も側から口をお添なされるワ夫にお靜さまも御一緒にお出だシ又余も座敷へ通つて親且那に附てお郷里を出た以來の話しを仕た上服部さんはね幼少いと云ふ中余の顔も覺て居なされるから到底さらりと兄弟だと明して夫に就てはお郷里での難をお免がれなすつてから江戸にお出になる途中でお附申した男は死んで仕舞色々苦勞をなされる間にも早う時勢を看破つて横濱の或る外國人の世話となり洋學から和漢の學問迄夜の目も寐せに御勉強なされた効が見えて四五年する中人にも知られ彼の地で指折の商家に引立

られて段々出世の道も就たから一旦の大坂へお出で、一商法と思なされた處料ら右の商家の主人が出所である服部家へ養子に入りなされた事迄委しうお話がありましたのです(忠)フン爾うかな夫はマアお愛たい事でお前さんが永の年月の辛苦も甲斐があったと云ふものぢや(七)ハイ是で余も肩の荷が卸りました(忠)ヤレノ爾うであらうとも實は余も此か家への三十年前尙郡山藩で親旦那が鳴らして御座つた時より御奉公仕て斯う云ふと可笑しいが忠義のお前さんにも負けない積の此忠平であるのに一向お家は無事で御一新後も外と違ひ此通り田地家庫をお買なすつて下作大勢に畑を任して結構な暮し親旦那のお没れなされた御定命イヤモ一頓と忠義を見せる折が無うて(と云ひ掛つて打笑ひ)是はしたり一向謹むかい詰らんことを言ひましたアハ、、、(七)アハ、、、夫程結構な事はありませんと云ふ處へ勝手口よりツ、と出来る一人の男あり此方を見るより立上り(忠)オ、朝五郎さん(七)何時お出でなされた(朝)ハイ只今ですが此間は參つて御厄介になりました七助さん追々快しいか(七)有難う御座り升(朝)併し七助さん今日の彌當家の旦那とお静嬢さんの御婚禮で何よりお愛たい實は先

日私が國重さん御兄妹と一緒に御當家へ参つたも如何ぞして此御縁を成就したいと思つての事でありました處誰の考へも變らぬものでお後室さまが殊に御懇望なさる上兼て此の旦那もお静嬢さんの御容貌は申すに及ばせ學問もあつて御發明なものであるから大壯お氣に叶つて又お静嬢さんで見れば深い御恩に感じてお敬ひなさるに就ては口よこそ出して云ひなさらぬソリヤ旦那の御氣象を慕しう思ふて御座つたゆゑ斯う早うに事が纏りましたがマアお前さんめ御安心ですナ(七)ハイ、夫に及今奥でも聞きなさつたらうけれど今度服部さんが念お兄様だと分つたに就てその中服部さんから國重さんに資産を拵へて上げなさつて那の田中のお花さんを迎へて御夫婦となさる筈で爾うなる日にや余を一生其處で養つて下さる上お虎造相應に手切金を恵んで遣ると仰しやるから誠に喜んで居升と嬉し涙を溢したるに朝五郎は打點頭さつ、辭を轉じ(朝)夫の爾うと大倉の昨日裁判所へ送致になつて國重さんのお係合も素つかり片付ましたせ(七)オ、左様ですか夫で廣田の源介に手傳安五郎等は如何して居升か(朝)ナニ彼奴等は未だ大倉の引つ掛りて調べられて居るさうですが如何で碌々行く筈はありませぬわ

など語合ふ中に長き夏の日暮暮初めて其處等小暗くなりたれば最前より傍聞せる忠平の打發を洗へる大根引つ提げつ、是はツイ迂濶りした定めて料理人が待つて居るであらうと吻いて庖厨の方に走行くにぞ七助朝五郎も頓て引續て裏面に入れば一個の下婢が(婢)オ、ね兩個とも何處へ行てなさつたモ、お盃も済みました處で貴君方もお坐敷へお通りなされと仰しやり升と聞くより兩個は忙しく身支度整へ下婢に延れて奥へ通るに点列ねし銀燭の影華やかに坐敷に並居る人々には新郎新婦を始めとし母の岸江服部夫婦國重龍二郎并に媒灼に頼まれし服部の親族某、其家の親族など十五六名なり何れも今宵の吉事を祝しつ、愛たく盃を擧げたるが中にも服部良一は酒三巡及べる頃席を進め祝辭に代へて一場の演舌をなしその終に於て「今斯の如き艱苦を経て斯の如き婚儀の調へるは幾と風雨に花を吹散されし慘狀に引變へて果實の熟々たるを枝頭に見る如く最僕のためには望外の喜びにして之に就て我々兄弟の如く維新前騷亂の世に生れて劍霜彈雨の中より命を免れしものと雖も幸ひに今日明世に遭遇せしからには刀鎗の利を舌鋒に換へ砲彈の力を精神に籠めて各産業を治むる傍に純粹の政

論を世に唱へて自から亦その成功の利益を受けんことを希望す云々主人は以て如何とせらるゝやと述べたりければ一座の拍手喝采暫らく鳴りも止まざりしとぞ

志士花吹雪 畢

明治十一年十一月五日印刷  
全 年十一月十二日出版

定價二角

發行者 大淵 濤

大阪府南區末吉橋通三丁目十五番地

著作者 佐伯 久作

大阪府東成郡玉造岡山町三百七十九番地

印刷者 山上貞二郎

大阪平野町二丁目十一番地  
自由堂

版權 所有

發賣所 駿々堂本店

大阪心齋橋北詰四番地

●大阪駸々堂本店新版發兌目錄

大阪府知事建野郷三君題字  
刑事法律學士櫻井一久君著

●市制町村制義解 實價五十錢 郵稅二十錢

橋本醇君著

●町制市制詳解 同三十錢 同十六錢

福永惟精著

●市制町村制心得 同二十錢 同十四錢

判事法律學士櫻井一久君講述

●民法要論全二冊 同十一錢

大審院刑事第一局西岡途明君題字

●書式いろは全集 同四十五錢 同廿六錢

仙橋散史序・石堂居士編

●將來之政事社會 同十五錢 同八錢

久永廉三著

●一國國會之燈籠 全 實價廿五錢 郵稅八錢

●自傳 春のやをほろ校正 春のやをほろ著

●小說無味氣 全 同 卅五錢

●鷹貨つかひ 全 同 廿五錢

●松のうち 全 同 廿五錢

●上田觀水著 必携商業講談 全 同 十五錢

●實用算術書 全 同 十二錢

●前田健治郎著 未廣重恭題字

●經濟金貸氣質 全 同 二十錢

●宇田川文海校正 大東樓恩樂人著

●滑稽ほら物語 全 同 二十錢

蘆屋簗村著

●商人氣質 全 實價十錢 郵稅八錢

志賀祐五郎著

●總理大臣 全 同 廿五錢 同八錢

柳條亭花彦著

●善惡艸流行新形 全 同 二十錢 同六錢

雨香散史著

●町制未來之夢 全 同 廿五錢 同八錢

蘆屋主人著

●實說野路の菊 全 同 二十錢 同八錢

北江散人著

●新案詩畫文筥 全 同 廿五錢 同十錢

曾根廻屋翠著

●深窓の影 全 同 三十錢 同十二錢

夜話薄

●のて柏 全 同 貳拾錢 同八錢

蘆屋居士著

●播磨瀉八重の潮路 全 同 二十錢 同八錢

蘆屋居士著

●花吹雪 全 同 二十錢 同八錢

内村義城著

●日本將來の運命 全 同 三十錢 同八錢

久永廉三著

●新日本の娘艶舌 全 同 二十錢 同八錢

久永廉三著

●浮燈十九世紀之暗礁 全 同 十五錢 同八錢

地方自治

●日本人民 全 同 十五錢 同六錢

宇田川文海校正 笠原道守著

●親會 全 同 廿五錢 同十錢

宮崎夢柳著

●芒の一叢 全 同 廿五錢 同六錢



江南齋著

● 睡夢 全 實價貳十錢 郵稅八錢

● 浮世一

● 佳人之奇遇 全 同 廿五錢 郵稅六錢

● 俗

● 松葉 全 同 二十錢 郵稅八錢

● 新散

● 新道成寺 全 同 二十錢 郵稅八錢

● 中江篤介君題字

● 桔骨の扼腕 全 同 廿五錢 郵稅十二錢

● 蘆屋居士著

● 方寸一ツ 全 同 二十錢 郵稅十錢

● 窮通

● 演說各論集 全 同 三十錢 郵稅八錢

● 小野種徳編

● 金蘭囊 全 同 三十錢 郵稅八錢

● 相ひび

● 內村秋風居士著

● 新日本之商人 全 實價二十錢 郵稅八錢

● 岡野半牧閣

● 幕の外 全 同 二十錢 郵稅十錢

● やりく

● 大日本帝國之行末 全 同 八錢

● 織田純一郎著

● 政治家社會 初編 同 卅五錢

● 岡野半牧閣

● 春興初子の松 全 同 拾六錢

● 岡野半牧閣

● 花浴の風雪 全 同 十六錢

● 岡野先生校

● 雲 全 同 二十錢

● 新編

● 黃昏日記 全 同 六錢

● 天香逸史著

● 菅野幹編

● 哲學汎論 全 實價四拾錢 郵稅拾貳錢

● 上村貞治郎著

● 無神概論 全 同 廿五錢

● 一斑

● 宿梅 全 同 四十五錢

● 政治小説

● 夢幻之鐘 全 同 三十五錢

● 內村秋風居士著

● 萬製法秘訣全書 同 十五錢

● 青柳秀枝著

● 商業簿記獨習 全 同 卅五錢

● 古川怪菫子著

● 怪談龍月花下影 同 廿五錢

● 古川怪菫子著

● 花茨胡蝶の彩色 同 二十五錢

● 小林麟藏著

● 早算新法 全 實價十二錢 郵稅三錢

● 實地

● 社會氣質 全 同 廿五錢

● 宇田川文海校

● 必讀思のかけはし 全 同 十五錢

● 男女

● 快樂の栞 全 同 十五錢

● 秘訣

● 蠶業全書 全 同 十二錢

● 從七位安江靜著

● 毛糸編物法 全 同 二十錢

● 駒木根貫一郎著

● 出頭人心得 全 同 卅錢

● 福永惟精編

● 會話獨案內 全 同 四十錢

● 所

● 服裁縫獨案內 同 廿五錢

● 西洋

● 會話獨案內 同 十二錢

● ハル

● 服裁縫獨案內 同 廿五錢

松下勝太郎編

●有益無盡藏全價八十四錢

林正躬著

●國會議法全同 拾貳錢

林正躬著

●通國史略全同 五十錢

丸山平治郎著

●文七情話之寫真全同 十五錢

元結

●繪本明治勳功記全同 貳十錢

八八居士著

●花牌使用法全同 十五錢

宇田川文海著

●新寫真全同 三十錢

久永廉三著

●小説骷髏之慷慨全同 四十錢

佐藤藏九郎君著

●自由の失號全一 刻册

山岡鉄太郎公題字 兒島榮太郎君著

●世渡の秘訣全 郵稅六錢

岡野先生校 梅野半醉著

●東都のほり鯉全同 二拾錢

名産の

●放言集全 近 刻

宇田川文海著

●士族之商業全同

宇田川文海著

●汝所好全同

奥山十平著

●芦之一葉全同

久永廉三著

●雨後の月全同

松下勝太郎編

●有益無盡藏全實價八十錢  
稅四十錢

林正躬著

●國會組織法全同  
拾貳錢

林正躬著

●通國史略全同  
五十錢

九山平治郎著

●文七情話之寫真全同  
十五錢

奧村正雄著

●明治勳功記全同  
貳十錢

八八居士著

●花牌使用法全同  
四十五錢

宇田川文海著

●新寫真全同  
三十錢

久永兼三著

●哲學體之慷慨全同  
四十錢

佐藤藏太郎君著

●自由の失號全近一  
刻册

山岡鉄太郎公題字 兒島榮太郎君著

●世渡の秘訣全實價十八錢  
郵稅六錢

岡野先生校 極野半醉著

●東都のほり鯉全同  
二拾錢

名産の 中江篤助著

●放言集全近刻

宇田川文海著

●士族之商業全同

宇田川文海著

●汝所好全同

奧山十平著

●苜蓿之一葉全同

久永兼三著

●雨後の月全同

欠

MISSING